

平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

北 島 遺 跡

2002

埼玉県熊谷市教育委員会

平成 14 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

北 島 遺 跡

2002

埼玉県熊谷市教育委員会



北島遺跡全景

序

私たちの郷土熊谷には、原始・古代の集落や古墳等の埋蔵文化財が、数多く分布しています。

こうした埋蔵文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならないと考えております。

熊谷市では、2004年に本市を秋季メイン会場として開催される第59回国民体育大会に向けて「日本一簡素で心のこもった国体」を合言葉に、その開催に向けて諸準備に取り組んでおります。その一環として市道30394号線の道路改良事業を実施することとなりました。事業地内及びその周辺には、原始・古代から中世に至る広大な遺跡が確認されており、遺跡の重要性に鑑みて関係部局と保存に向けて協議を行ってまいりました。しかし事業上やむを得ず計画等の変更ができないため、工事により破壊を受ける箇所については、記録保存の方策を講ずることとなりました。

本書は、平成13年度に実施された発掘調査の成果をまとめたものです。

今回報告いたします北島遺跡は、広大であり、多時期かつ多種の埋蔵文化財が存在する遺跡であり、過去数回にわたって発掘調査が実施された遺跡です。そのうち北端部に位置する埋蔵文化財発掘調査の成果であり、古墳時代から平安時代にかけての集落跡が検出され、当地域における集落の変遷を考える上で貴重な資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料としてまた埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、ご理解、ご協力を賜りました地元関係者には厚くお礼申し上げます。

平成14年9月

熊谷市教育委員会

教育長 飯塚 誠一郎

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字上川上字西北島833番地他に所在する北島遺跡（埼玉県遺跡番号59－058）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、市道30394号線改良工事に伴う事前記録保存のための調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第Ⅰ章3のとおりである。
- 4 発掘調査の期間は平成14年1月7日から同年3月29日までである。
整理・報告書作成期間は平成14年4月15日から同年9月30日までである。
- 5 発掘調査の担当は、熊谷市教育委員会吉野 健・寺社下 博が行い、本書の執筆・編集は寺社下が行った。
- 6 写真撮影は、発掘調査・遺物共に寺社下が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。

凡 例

- 1 調査範囲が東西に長く、しかも分断されたため、東からⅠ～Ⅶの調査区を設定した。
- 2 各遺構の番号は、調査区で括らず、東から西への連番とした。
- 3 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりである。
遺構配置図 1／200 住居跡・堅穴・土坑・井戸・畠 1／60 溝 1／80
- 4 土層断面図中の表記記号は、次のとおりである。
P・土器、 S・川原石
- 5 遺構・遺物挿図中のスクリーンパターン等は、原則として次の内容を示す。
地 山 =  炭化物 =  焼 土 = 
噴 砂 ・ 釉 = 
- 6 遺構平面図中の遺物番号は、遺物挿図中の遺物番号に一致する。
- 7 遺構挿図中のレベル基準点は、各挿図中で統一した。なお、統一できなかった遺構については、各々示した。
- 8 遺構覆土及び遺物の色調は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・1998年版）に照らし、最も近似した色相を表示した。
- 9 遺物実測図の縮尺は、1／4を基本とし、土錘・馬歯等は1／2とした。
- 10 遺物実測図中、口縁の表現は、波状を呈するもの以外全て直線で模試化した。また、径の実測できなかった場合（残存率1／2以下のもの）については、中心線との接点を空白化して表示した。
- 11 遺物実測図中の断面の表現は、還元焰焼成のものは黒塗り、それ以外のものは白抜きで表示した。
- 12 遺物観察表中の単位は、全てcmを示す。なお実測できず推定復元した場合には、推定値として（ ）で括って表示した。
- 13 遺物観察表中の胎土は、肉眼で観察できる次のような包含物質について、多い順に数字で示した。
①白色粒子 ②黒色粒子 ③赤色粒子 ④片岩粒子 ⑤白色針状物質 ⑥礫
- 14 遺物観察表中の焼成は、次のように3段階に区分して、該当する項目を数字で示した。
①良好（良く焼きしまっている） ②普通 ③不良（脆く、崩れやすい）

目 次

口絵	1 調査の方法……………8
序	2 検出された遺構と遺物……………14
例言	IV 遺構と遺物……………14
凡例	A 住居跡……………14
目次	B 竪穴状遺構……………31
	C 土坑……………36
	D 溝跡……………42
	E 井戸跡……………56
	F 畠跡……………56
	G その他の遺構と遺物……………58
I 発掘調査の概要……………1	V 調査のまとめ……………59
1 調査に至る経過……………1	
2 発掘調査・報告書作成の経過……………1	
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織……………2	
II 遺跡の立地と環境……………3	
III 遺跡の概要……………8	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形……………2	第17図 9号・10号・11号・12号住居跡 出土遺物……………25
第2図 周辺遺跡分布図……………4	第18図 13号住居跡……………26
第3図 北島遺跡全測図……………7	第19図 13号住居跡出土遺物……………27
第4図 基本土層図……………8	第20図 14号・15号住居跡……………28
第5図 調査区全測図……………9・10	第21図 14号・15号住居跡出土遺物……………28
第6図 遺構配置図(1) I～Ⅲ区……………9・10	第22図 16号住居跡……………30
第7図 遺構配置図(2) IV～Ⅷ区……………11・12	第23図 16号住居跡出土遺物……………30
第8図 1号・2号住居跡……………14	第24図 1号竪穴、2号土坑、1号～3号溝……………31
第9図 1号・2号住居跡出土遺物……………15	第25図 2号・3号竪穴……………32
第10図 3号・4号・5号住居跡……………17	第26図 4号竪穴……………33
第11図 3号・4号住居跡出土遺物……………18	第27図 5号竪穴……………34
第12図 6号・8号住居跡……………19	第28図 竪穴出土遺物……………35
第13図 7号住居跡、8号土坑、E-35ピット群……………20	第29図 土坑① 1号・3号～7号土坑、E-29 ・31ピット群、6号溝……………37
第14図 6号・7号・8号住居跡出土遺物……………21	第30図 土坑② 10号～14号土坑、E-77・108 ピット群、14号・15号・39号溝……………38
第15図 9号・10号・11号住居跡、9号 土坑……………23	
第16図 12号住居跡……………24	

第31図	土坑③ 16号土坑、E-59・109ピット群、52号・54号溝……………39
第32図	土坑出土遺物……………40
第33図	ピット群出土遺物……………41
第34図	溝① 4号・5号・7号～13号溝…43
第35図	溝② 16号～18号・27号・28号溝…44
第36図	溝③ 19号～26号・29号～31号溝…45
第37図	溝④ 32号～37号溝、1号不明遺構…47
第38図	溝⑤ 38号～40号溝……………48

第39図	溝⑥ 41号溝・E-87ピット群…………49
第40図	溝⑦ 42号～45号溝、E-88ピット群50
第41図	溝⑧ 46号～49号溝、E-94ピット群51
第42図	溝⑨ 50号・51号溝、15号土坑……52
第43図	溝⑩ 53号～56号溝……………53
第44図	溝出土遺物……………54
第45図	1号井戸跡……………56
第46図	畠跡……………57
第47図	遺構外出土遺物……………58

表 目 次

第1表	1号住居跡出土遺物観察表……………16
第2表	2号住居跡出土遺物観察表……………16
第3表	3号住居跡出土遺物観察表……………18
第4表	4号住居跡出土遺物観察表……………18
第5表	6号住居跡出土遺物観察表……………22
第6表	7号住居跡出土遺物観察表……………22
第7表	8号住居跡出土遺物観察表……………22
第8表	9号住居跡出土遺物観察表……………25
第9表	10号住居跡出土遺物観察表……………25
第10表	11号住居跡出土遺物観察表……………25
第11表	12号住居跡出土遺物観察表……………25
第12表	13号住居跡出土遺物観察表……………27
第13表	14号住居跡出土遺物観察表……………29
第14表	15号住居跡出土遺物観察表……………29
第15表	16号住居跡出土遺物観察表……………30

第16表	1号竪穴出土遺物観察表……………35
第17表	2号竪穴出土遺物観察表……………35
第18表	4号竪穴出土遺物観察表……………36
第19表	5号竪穴出土遺物観察表……………36
第20表	1号土坑出土遺物観察表……………40
第21表	8号土坑出土遺物観察表……………40
第22表	E-108ピット群 No.1ピット 出土遺物観察表……………41
第23表	1号溝出土遺物観察表……………55
第24表	4号溝出土遺物観察表……………55
第25表	6号溝出土遺物観察表……………55
第26表	32号溝出土遺物観察表……………55
第27表	41号溝出土遺物観察表……………55
第28表	50号溝出土遺物観察表……………55
第29表	遺構外出土遺物観察表……………58

図版目次

図版1	作業風景
	作業風景
	I区全景

図版2	Ⅱ区全景（東半）
	Ⅱ区全景（西半）
	Ⅲ区全景

VI区全景
図版3 VII区全景（東半）
VII区全景（西半）
VIII区全景
VIII区全景
図版4 1号住居跡
1号住居跡遺物出土状況①
1号住居跡遺物出土状況②
図版5 2号住居跡
2号住居跡遺物出土状況
3号住居跡
図版6 3号住居跡遺物出土状況
4号住居跡
5号住居跡
図版7 6号住居跡
6号住居跡
6号住居跡貼り床
図版8 6号住居跡遺物出土状況
6号・7号住居跡
7号住居跡
図版9 7号住居跡遺物出土状況①
7号住居跡遺物出土状況②
8号住居跡
図版10 9号住居跡
10号住居跡
9号・10号住居跡遺物出土状況
図版11 11号住居跡
11号住居跡遺物出土状況①
11号住居跡遺物出土状況②
図版12 11号住居跡遺物出土状況③
11・12号住居跡遺物出土状況
12号住居跡
図版13 12号住居跡遺物出土状況
13号住居跡
13号住居跡遺物出土状況
13号住居跡カマド①

図版14 13号住居跡カマド②
13号・14号・15号・16号住居跡
14号・15号住居跡遺物出土状況①
図版15 14号・15号住居跡遺物出土状況②
14号・15号住居跡カマド遺物出土状況
14号・15号住居跡遺物出土状況③
図版16 14号・15号住居跡遺物出土状況④
16号住居跡
16号住居跡遺物出土状況①
図版17 16号住居跡遺物出土状況②
1号竪穴
2号竪穴
図版18 3号竪穴
4号竪穴遺物出土状況
4号竪穴
図版19 1号土坑
6号土坑
7号土坑
図版20 8号土坑
8号土坑遺物出土状況
11号土坑
図版21 12号土坑
13号土坑
14号土坑
図版22 15号土坑
16号土坑
E-35ピット群
図版23 E-59ピット群
E-108ピット群
E-108ピット群遺物出土状況
図版24 1号・2号溝
4号溝
5号溝
図版25 6号溝
7号溝
8号溝

図版26	17号溝 18号～26号溝 27号・28号溝	図版36	7号住居跡－2、8、10 10号住居跡－1 11号住居跡－2 13号住居跡－1、3
図版27	29号溝 30号溝 31号溝	図版37	13号住居跡－4、5 14号住居跡－1、2 15号住居跡－1、2 4号竪穴－6
図版28	31号溝礫出土状況 32号～37号溝 35号溝	図版38	4号竪穴－10 6号溝－1、3 50号溝－3 遺構外遺物－8 (出土遺物 甕類)
図版29	36号溝 38号溝 40号溝	図版39	1号住居跡－15 2号住居跡－1 3号住居跡－8、9 7号住居跡－14 8号住居跡－1
図版30	41号溝 41号溝馬歯出土状況 41号～48号溝	図版40	16号住居跡－1、2、3
図版31	42号溝 43号・44号溝 45号・46号溝	図版41	8号土坑－1、2 4号竪穴－11 E-108ピット群No.1ピット－2 50号溝－4 11号住居跡－4 (出土遺物 その他)
図版32	50号溝遺物出土状況① 50号溝遺物出土状況② 50号・51号溝	図版42	3号住居跡－10 7号住居跡－16 15号住居跡－4 遺構外遺物－5 2号住居跡－2、3、4、5 41号溝－1
図版33	1号井戸跡 畠跡① 畠跡②		
図版34	畠跡③ 畠跡④ 畠跡⑤ (出土遺物 坏類)		
図版35	1号住居跡－1、2、4、6 3号住居跡－1 4号住居跡－1 6号住居跡－1、2		

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成16年に開催が予定されている第59回国民体育大会に向けて、熊谷市では平成9年以来、その諸準備に積極的に取り組んでおり、会場及び周辺の道路整備も着々と進行している。

こうした中、平成13年4月20日付け熊道路発第94号をもって、熊谷市長から熊谷市教育委員会教育長あてに、熊谷市今井、上川上及び上中条にかかる市道30394号線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の所在及び取扱いについて協議があった。本道は、国体主会場へのアクセス道であり、現道の拡幅及びU字溝の敷設が計画されたものであった。

これに対し熊谷市教育委員会では、事業予定地内が周知の遺跡（北島遺跡、No.59-058）であるため、現状保存するか、または埋蔵文化財に影響を及ぼさない方法での開発が望ましいこと、やむを得ず埋蔵文化財に影響を及ぼす場合は、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること、また発掘調査の実施については教育委員会に協議する旨を、同5月28日付け熊教社発第150号をもって回答した。

その後、保存について協議を重ねたが、工事計画に緊急性があり、また変更も不可能であるとの結論がだされたため、記録保存の措置を構ずることとなった。文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、熊谷市長より平成13年11月14日付けで提出された。

発掘調査は、平成14年1月7日から熊谷市教育委員会によって実施された。発掘調査に関わる熊谷市教育委員会の通知は、平成14年1月16日付け熊教社発第761号をもって提出された。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

北島遺跡の発掘調査は、2002（平成14）年1月7日に開始した。

調査面積は、遺跡総面積715,000㎡のうち、道路拡幅部及びU字溝敷設部分1,175.54㎡である。

調査対象地は、水田7筆に及び、それぞれの間には現在使用中の水路・道路が位置した。また、東縁部は盛り土がなされ、駐車場として利用されていた。このように、7枚の水田の各筆及び東縁盛り土部はそれぞれ分断されたため、調査区を東からⅠ～Ⅷ区に区分して設定した。調査は、各調査区とも遺構確認面まで重機によって掘削し、その後作業員による遺構確認のための精査を行った。

検出された遺構は、順次掘削精査し、実測・写真撮影を行った。また発見された土器などの遺物は、必要に応じて出土状況の実測・写真撮影を行うと共に、収納していった。

こうして平成14年3月29日、現地における全ての調査を終了した。

(2) 整理・報告書作成

本報告書作成に伴う整理作業は、平成14年4月15日より、遺物の水洗い・注記から土器の接合・復元を行い、遺物の分類そして実測作業へと進めていった。また同時に、遺構図面及び写真整理も行った。

次いで、遺物の拓本採り、実測図のトレース・版組み、観察表の作成、遺構実測図及び土層図の版組み・トレースを行うと共に、遺物の写真撮影をした後、遺構写真と共に写真図版を作成していった。また同時に原稿執筆を行っていった。

こうして体裁が整った後、業者選定を行い、本報告書の刊行に至った。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

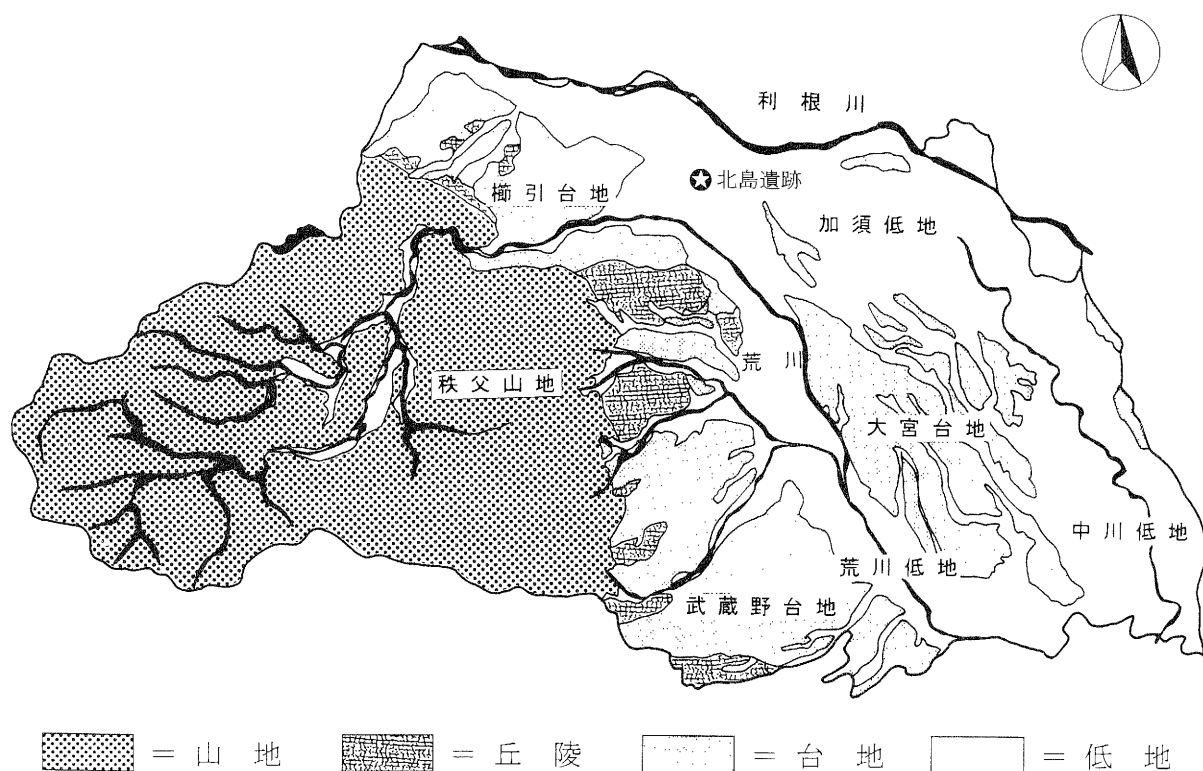
主体者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査（平成13年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林 武夫
社会教育課長	岩田 隆
副参事	浅野 晴樹
課長補佐	北 俊明
主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	浅見 敦夫
主任	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	小野寺弘光
発掘調査員	加藤 隆則
発掘調査員	蔵持 俊輔

(2) 整理・報告書刊行事業（平成14年度）

教育長	飯塚誠一郎
教育次長	小林 武夫
社会教育課長	岩田 隆
副参事	田中 英司
課長補佐	藤原 清
主幹兼係長	金子 正之
主査	寺社下 博
主査	浅見 敦夫
主査	吉野 健
主事	松田 哲
発掘調査員	加藤 隆則
発掘調査員	船場 昌子
発掘調査員	渡辺 大士



第1図 埼玉県の地形

Ⅱ 遺跡の立地と環境

北島遺跡は、熊谷市大字上川上字西北島833番地他に所在し、荒川と利根川の最も近接する地域にあって、荒川の北西約4km、利根川の南西約4kmに位置する。またJR高崎線熊谷駅からは北北東約3.5kmにあたる。

熊谷市域は、西部が櫛挽台地上、荒川以南が江南台地上に位置するほか、大半は新荒川扇状地（熊谷扇状地）上に含まれる。また市域の北縁から北東縁にかけては、利根川によって形成された妻沼低地がひろがっている。本遺跡は、熊谷扇状地末端湧水地と妻沼低地末端地が錯綜する地に位置し、複雑な旧河道とともに、旧河道によって形成された自然堤防上に立地している。

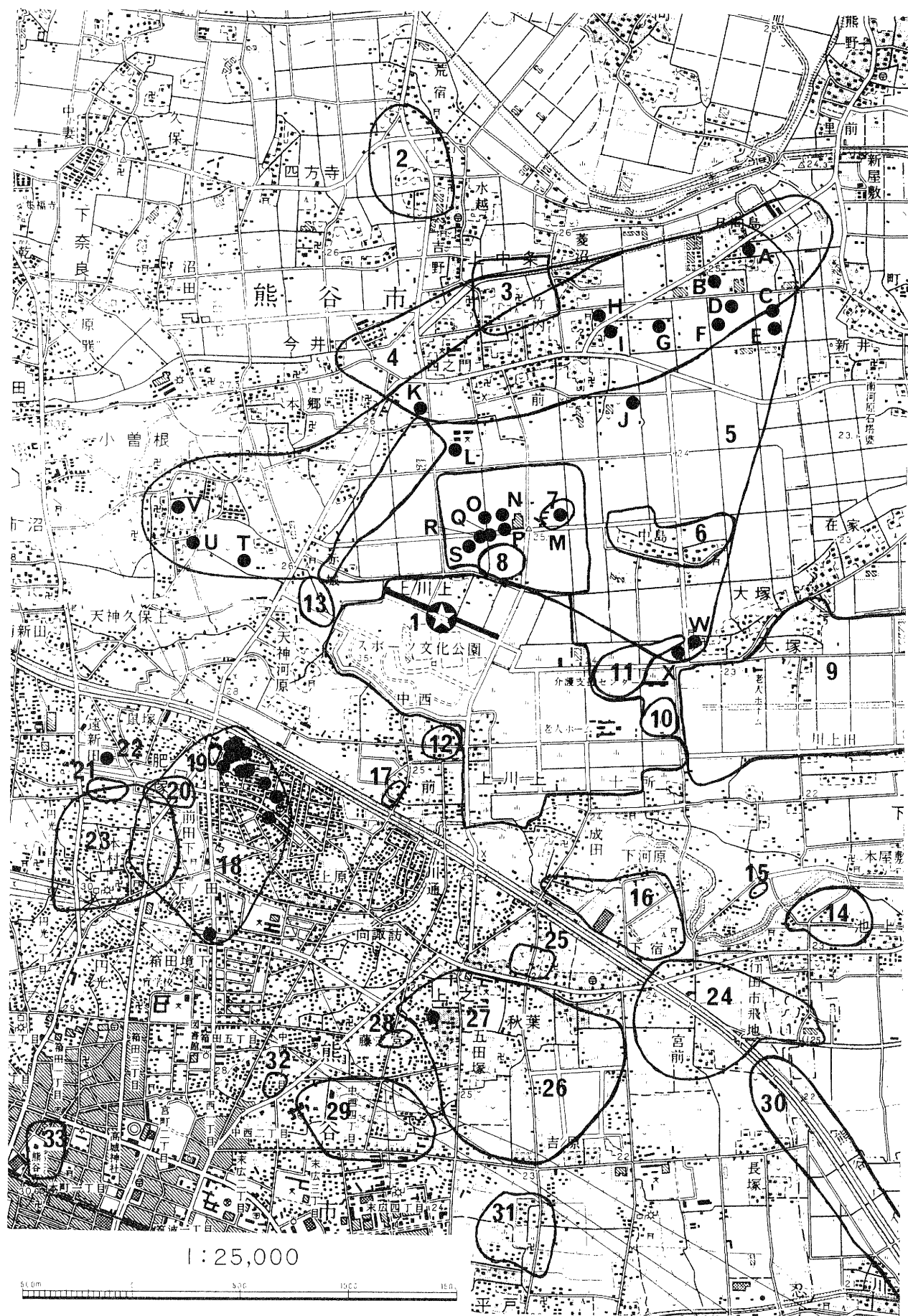
北島遺跡は、大部分が熊谷スポーツ文化公園（平成16年度開催の第59国民体育大会会場）地域内に所在し、平成12年度までに（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団により、15次・19地点にわたる調査が実施されている。

今回発掘調査した部分は、北島遺跡の北端にあたり、標高24.5m前後、大部分が水田（一部盛り土が成され、駐車場・1区）となっていた。現地表から遺物包含層まで20cmと、非常に薄いものであった。

本遺跡を中心とした熊谷扇状地末端付近の荒川の伏流水の湧水地域と妻沼低地末端の錯綜地域では、弥生時代中期の初期稲作が展開されるのであるが、先行する縄文時代の遺跡も散見される。

熊谷市西部の寺東遺跡（地図未掲載）は、櫛挽台地北東端に位置し、前期（関山式）土器及び後期（称名寺式）の埋甕土坑が検出されている。寺東遺跡の北・妻沼低地上には、石田遺跡・入川遺跡や深町遺跡（共に地図未掲載）が所在し、中期（加曾利E式）から後期（堀之内式）に及ぶ集落が確認されている。これらの遺跡の端部には別府沼（利根川旧河川）が蛇行し、いずれの遺跡も沼に向けての緩斜面上に展開されている。このうち石田遺跡の対岸には、後期（加曾利B式）の土器群が検出された横間栗遺跡が所在している。横間栗遺跡はまた、弥生時代中期（須和田式期）の再葬墓16基が検出されていることでも知られている。こうした弥生時代中期の再葬墓は、熊谷市三ヶ尻遺跡内の上古遺跡が櫛挽台地上に位置する他は、深谷市上敷免遺跡、明戸東遺跡、妻沼町飯塚遺跡、飯塚南遺跡等、横間栗遺跡の北側一帯に展開される妻沼低地上に集中的に所在しているのである。また、当該期の集落遺跡としては、やはり妻沼低地上に関下遺跡、飯塚南遺跡等が知られている。

一方、熊谷市東部地域での縄文時代の遺跡は、諏訪木遺跡（26）や北島遺跡で、土器や石器が検出されており、西部地域同様、旧河川の緩斜面上で集落が形成されていた可能性が高い。これに続く弥生時代中期に入ると、北島遺跡で再葬墓や土器棺墓・土坑墓が検出されている。また、近在する前中西遺跡（29）、平戸遺跡（31）でも当該期の土器群が検出されているが、前中西遺跡では再葬墓と方形周溝墓という、異なる二つの葬送形態が同居しており、異彩を放っている。これら前中西遺跡や北島遺跡の東に位置する行田市の小敷田遺跡（30）は、関東地方で最古段階の須和田式期の方形周溝墓が検出されている。あたかも、前中西遺跡を境に熊谷市の東部と西部で、再葬墓と方形周溝墓という異なった墓制が展開されているようである。そして、北島遺跡と小敷田遺跡の中間に位置する池上遺跡（24）では大規模な環濠集落が展開されている。また、北島遺跡の西に接して小規模な集落が、天神遺跡（13）で確認されている。



弥生時代後期に至ると、先の妻沼低地上に、深谷市明戸東遺跡、妻沼町弥藤吾新田遺跡等が、東部の北島遺跡周辺では、北島遺跡、中条条里遺跡内（9）の東沢遺跡、行田市池守遺跡（地図未掲載）等、大規模な集落遺跡が展開されてくる。弥藤吾新田遺跡では弥生町式土器が、他の遺跡では吉ヶ谷式土器が出土している。

このうち北島遺跡では、掘立柱建物跡や土坑と共に70軒に及ぶ住居跡が、さらに、堰・水路や5～8mの方形区画をもつ水田跡も検出されている。時期は中期から後期に及び、装着されたままの打製石斧、大型蛤刃石斧、扁平片刃磨製石斧、磨製石鏃、弓・容器等の木製品等、大量の遺物が出土している。すでにこの時期に、湧水地を背景として低地を利用した、大規模で積極的な水田経営が行われていたことを明白に物語っている、といえよう。

古墳時代前期に入ると、熊谷市西部から深谷市にかけての妻沼低地上では、熊谷市域の中耕地遺跡、根絡遺跡、横間栗遺跡、一本木前遺跡、深谷市域の本郷前東遺跡、明戸東遺跡、東川端遺跡、宮ヶ谷戸遺跡、上敷免遺跡、妻沼町域の弥藤吾新田遺跡等で集落が営まれている。このうち一本木前遺跡、弥藤吾新田遺跡は大規模な集落が想定されている。また東川端遺跡や上敷免遺跡では、方形周溝墓群が検出されている。東川端遺跡第2号方形周溝墓からは、パレススタイルの大型壺が、一本木前遺跡2号方形周溝墓からは器台・埴等の土器群と共に、方台部中央に検出された主体部からは翡翠製勾玉・碧玉製管玉等が出土している。

熊谷市東部から行田市域の、熊谷扇状地末端から妻沼低地の錯綜地帯では、池上遺跡、池守遺跡、小敷田遺跡、皿尾遺跡（地図未掲載）、東沢遺跡、天神遺跡、北島遺跡、天神東遺跡（10）、中条遺跡内の雷電塚遺跡（F周辺）等、多数の集落遺跡が知られている。このうち小敷田遺跡では、畿内や東海地方系の土器が出土し、雷電塚遺跡からは脚部穿孔高坏・器台・S字口縁台付甕と共に剣型をはじめとした多数の滑石製模造品が出土している。また小敷田遺跡、東沢遺跡、北島遺跡からは鋤・鍬等多数の木製農具が出土している。さらに北島遺跡、小敷田遺跡では、大規模な方形周溝墓群が検出されている。

このように、弥生時代中期に開始された低地帯での稲作農耕は、それぞれの地で継承され、規模等が発展・拡大し、定着してきた様相を呈しているのである。

第2図掲載遺跡一覧

- | | | | | | |
|---------------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 1 北島遺跡 | 2 光屋敷遺跡 | 3 中条氏館跡 | 4 中条遺跡 | 5 中条古墳群 | 6 中島遺跡 |
| 7 鎧塚遺跡 | 8 女塚遺跡 | 9 中条条里遺跡 | 10 天神東遺跡 | 11 田谷遺跡 | 12 上川上東遺跡 |
| 13 天神遺跡 | 14 古宮遺跡 | 15 上河原遺跡 | 16 宮の浦遺跡 | 17 河上氏遺跡 | 18 肥塚古墳群 |
| 19 八幡上遺跡 | 20 出口上遺跡 | 21 出口下遺跡 | 22 肥塚中島遺跡 | 23 肥塚館跡 | 24 池上遺跡 |
| 25 成田氏館跡 | 26 諏訪木遺跡 | 27 東光寺古墳 | 28 藤之宮遺跡 | 29 前中西遺跡 | 30 小敷田遺跡 |
| 31 平戸遺跡 | 32 箱田氏遺跡 | 33 熊谷氏館跡 | | | |
| A 団扇塚古墳 | B 屯倉塚古墳 | C 中条23号墳 | D 鹿那祇西古墳 | E 鹿那祇東古墳 | F 雷電塚古墳 |
| G 行人塚古墳 | H 権現塚古墳 | I 稚児塚古墳 | J 鍋塚古墳 | K 聖天塚古墳 | L 丸塚古墳 |
| M 鎧塚古墳 | N 女塚1号墳 | O 女塚2号墳 | P 女塚5号墳 | Q 女塚3号墳 | R 女塚6号墳 |
| S 女塚4号墳 | T 東浦古墳 | U 小曾根神社古墳 | V 金堀塚古墳 | W 大塚古墳 | X 中条3号墳 |
| (以上A～Zは中条古墳群) | | | | | |

中期の様相は、今ひとつ明確ではない。しかし、西部の深谷市東川端遺跡では、剣型の滑石製模造品を用いた集落内祭祀が確認されている。また東部の中条遺跡内の権現山遺跡（H付近）では把手付大型甗を伴った出現期の竈を備えた住居跡が検出され、北島遺跡では須恵器甗を模倣した土師器小型壺が出土している。さらに最近の調査では、藤之宮遺跡（28）でも一括の土器群が検出されている。いずれも中期後半以降の所産であり、今後の調査に期待するところが大きい。

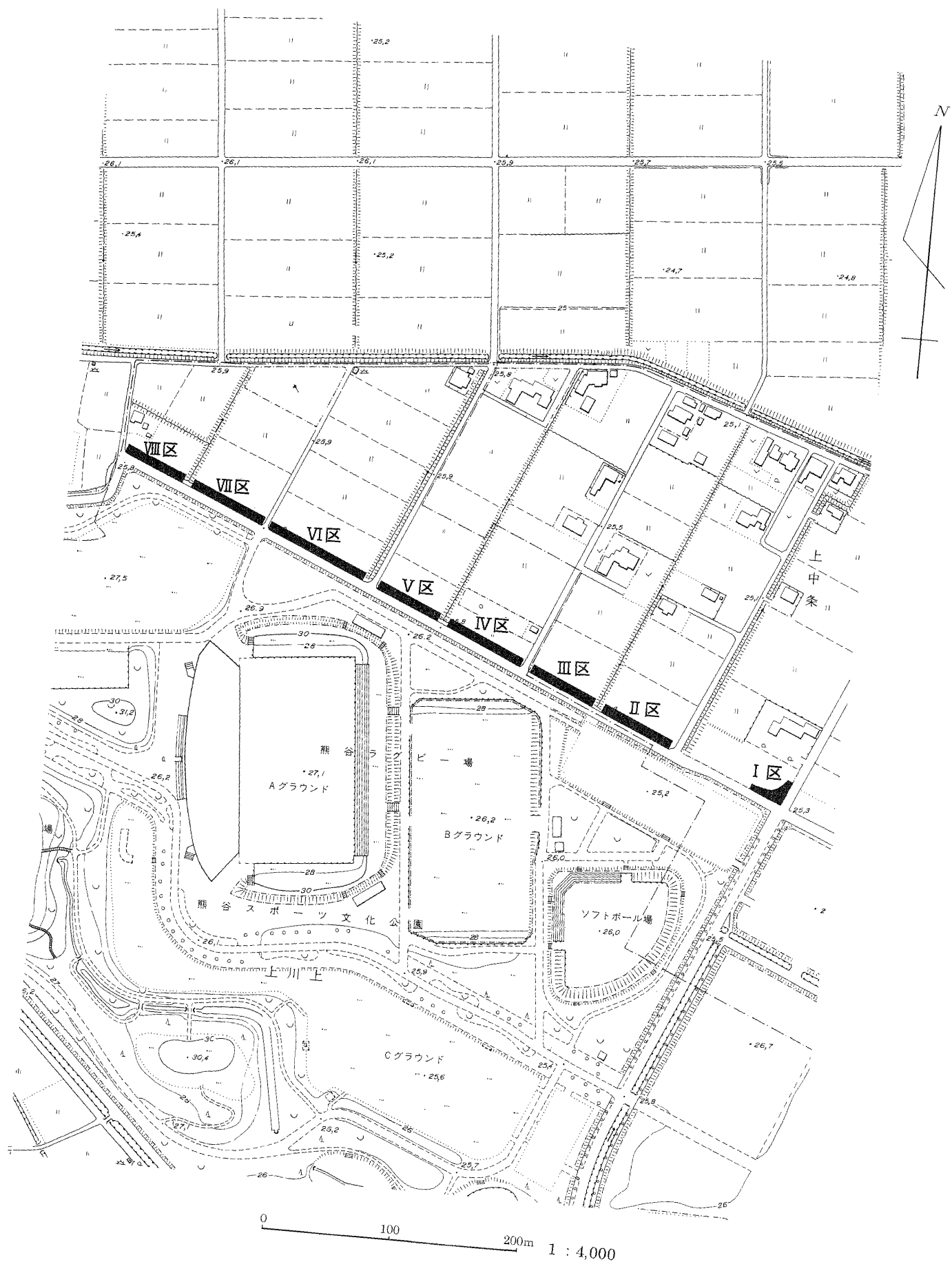
古墳の出現は、中期の後半、B種横刷毛埴輪をもつ前方後円墳・横塚山古墳をもってその嚆矢とする。その後中条古墳群の中に、鎧塚古墳（M）、女塚1号墳（N）が築造されてくる。鎧塚古墳は、盾型の周溝をもち、前方部を西に向けた帆立貝式全前方後円墳で、全長43.8mを測る。須恵器高坏型器台を中心に土師器高坏・坏・甕をセットとした墓前祭祀土器群が2ヶ所検出されている。女塚1号墳は、二重周溝をもつが、やはり前方部を西に向けた帆立貝式前方後円墳で、全長46.0mを測る。前方部及び周溝外堤から盾持武人埴輪、太鼓を抱える人物埴輪等、多数の形象埴輪の出土が特徴的である。両古墳共5世紀末頃の築造と考えられている。また両古墳は、東西約200mの距離に位置し、周囲に円墳が群在する。そのうち2号墳（O）では馬・鹿・猪等の動物や人物等の形象埴輪が出土し、4号墳（S）では川原石使用の礫礫が検出されている。中条古墳群では、国重要文化財の馬型・武人埴輪を出土した鹿那祇東古墳（E）、最近の調査で検出された北島遺跡内の古墳群等の、埴輪最盛期の古墳から、側壁に切組積の角閃石安山岩、天井・奥壁に緑泥片岩を用いた大型の横穴式石室をもつ大型円墳・大塚古墳（W）まで、5世紀の末頃から7世紀前半までの古墳が造営され続ける。こうした状況は、東光寺古墳（27）を中心とした上之古墳群、肥塚古墳群（18）でも同様（開始時期は6世紀）である。肥塚古墳群では川原石乱石積と角閃石安山岩切組積2種類の胴張型横穴式石室が確認されており、後者は利根川系、前者は荒川系の石材であり、両河川の相克によって作り出された当地の地形的特長と一致し、非常に興味深い様相を呈しているのである。

一方、初源期の横塚山古墳のみられた西部地区では、横塚山古墳周辺部、櫛挽台地北東端の別府古墳群等形象を含む埴輪盛期の古墳が継続し、川原石乱石積の胴張型横穴式石室を有し、一部の古墳に八角形や六角形の終末期古墳を含む籠原古墳群が台地状に築造されてくる。

古墳時代後期における西部地域の集落遺跡は、樋之上遺跡、上辻・下辻遺跡等の櫛挽台地東端部、妻沼低地の自然堤防上では、熊谷市域の一本木前遺跡、天神下遺跡、根絡遺跡、深谷市域の原遺跡、東川端遺跡、新屋敷東遺跡、上敷免遺跡、砂田遺跡、柳町遺跡、城北遺跡、妻沼町域の飯塚南遺跡、道ヶ谷戸遺跡等、遺跡数・規模共に爆発的に拡大する。特に一本木前遺跡では、現時点で300軒前後の住居跡が検出され、さらに今後の調査でその数が増加することが予想されており、その規模は群を抜いている。

また東部地域でも北島遺跡、諏訪木遺跡（26）、中条遺跡内の中島遺跡（6）・光屋敷遺跡（2）・常光院東遺跡（3）、行田市小敷田遺跡、池守遺跡等、やはり遺跡数・規模共に爆発的に拡大する。

古墳時代後期に櫛挽台地東端もしくは北東端、あるいは妻沼低地及び熊谷扇状地自然堤防上の微高地に形成された集落は、増減はするものの、そのほとんどが奈良・平安時代集落へと継続されていく。そして、櫛挽台地北東端部の西別府廃寺、西別府祭祀遺跡、深谷市幡羅遺跡を中心として、北側妻沼低地上に展開される別府条里跡、条里跡の東端に位置する一本木前遺跡への広がり、東部では北島遺跡、諏訪之木遺跡を中心として、その北・東に展開される中条条里遺跡（9）への広がり、こうした東西の二つの拠点を核として、以後展開されることとなるのである。



第3図 北島遺跡全測図

III 遺跡の概要

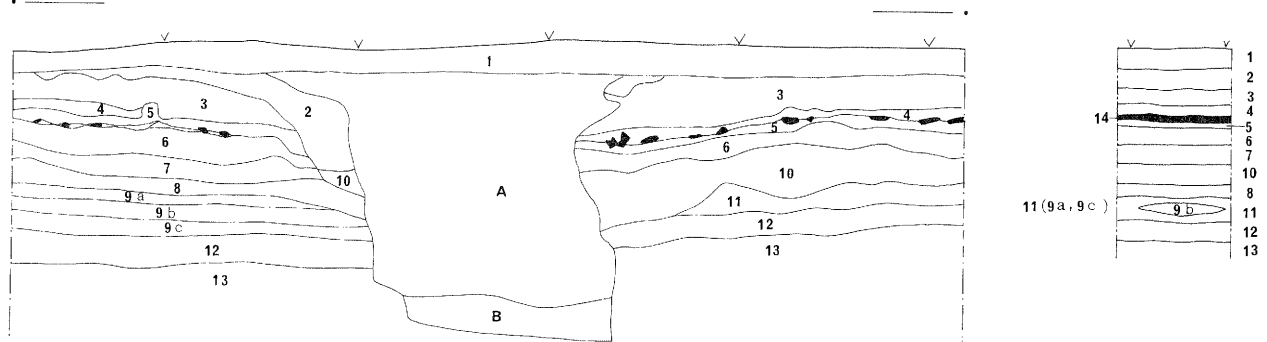
1 調査の方法

発掘調査は、715,000 m²に及ぶ北島遺跡の北端（西部）にあたる、スポーツ文化公園北側周回道路（市道30394号線）の北側への拡幅部及びU字溝敷設部分を対象としたものである。

調査地の現況が水田7筆、盛り土を施した駐車場であり、それぞれの境界は水路及び道路で分断されていたため、水田7筆及び駐車場をそれぞれ個別の調査区として設定し、東側駐車場から西側水田に向けてⅠ区・Ⅱ区……Ⅷ区とした。Ⅰ区からⅧ区は、東西約576 mに及ぶ。なお、調査区の幅は、Ⅱ区からⅦ区は2～2.5 m、Ⅷ区幅1～2 mであった。またⅠ区は、南北13 m東西15 mの三角形で斜辺が弧状に窪む範囲の調査であった。

市道30394号線は、Ⅰ区部分が多少曲折するが、Ⅱ区からⅧ区部分はほぼ直線を呈するため、この直線に合わせて、全体を網羅する東西方向を基準とするラインを設定した。基準ラインはN-67°00'00"-Wラインとし、Ⅱ区からⅦ区は調査区内に、Ⅰ区及びⅧ区は調査区の南側に接するように設定した。よって、南北の基準ラインはN-23°00'00"-Eを示すこととなる。東西の基準ラインをEラインとし、5 mのグリッドに分割して、東西ラインをA～E、これと直交する南北ラインを2～117とした。そのため、Ⅰ区最東端グリッドはE-2、最北端はB-2、Ⅷ区最西端はE-117となった。グリッド名は、北東のライン交点名をもって西5 m・南5 mの範囲を示している。

調査は、事前の試掘調査によって、調査区の長軸方向にほぼ一致するパイプ管理設溝が多数掘削されていることが判明していたため、この掘削溝を先に掘って、各調査区ごとの土層堆積状況を把握することから開始した。

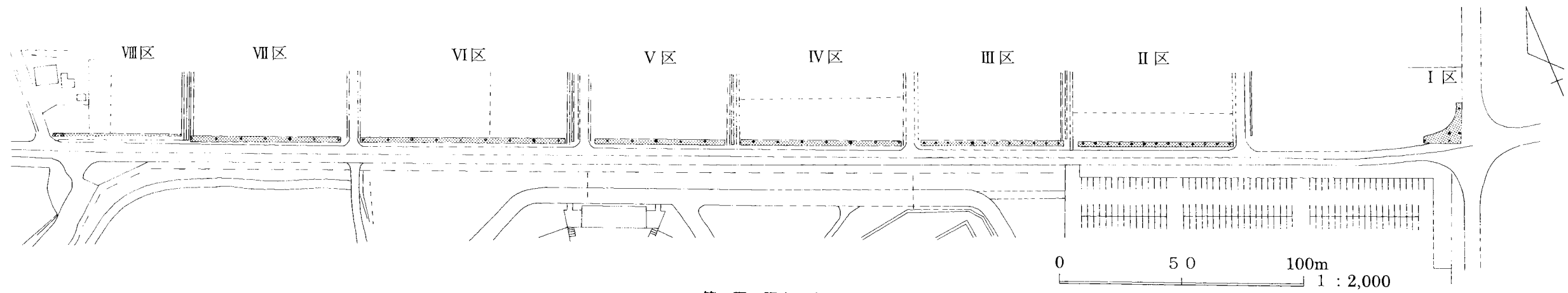


基本土層

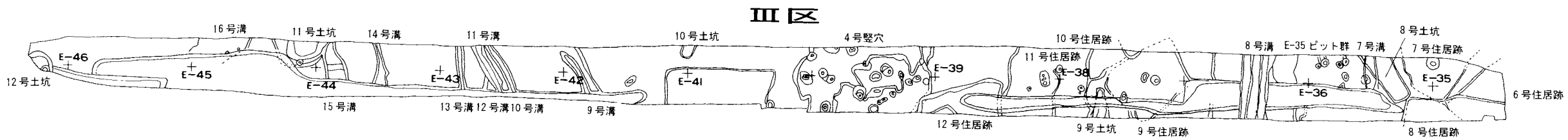
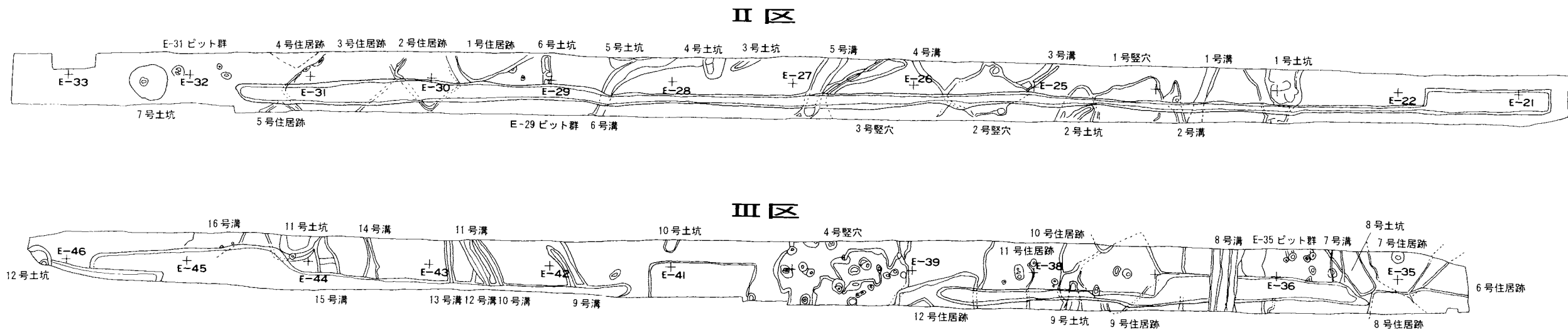
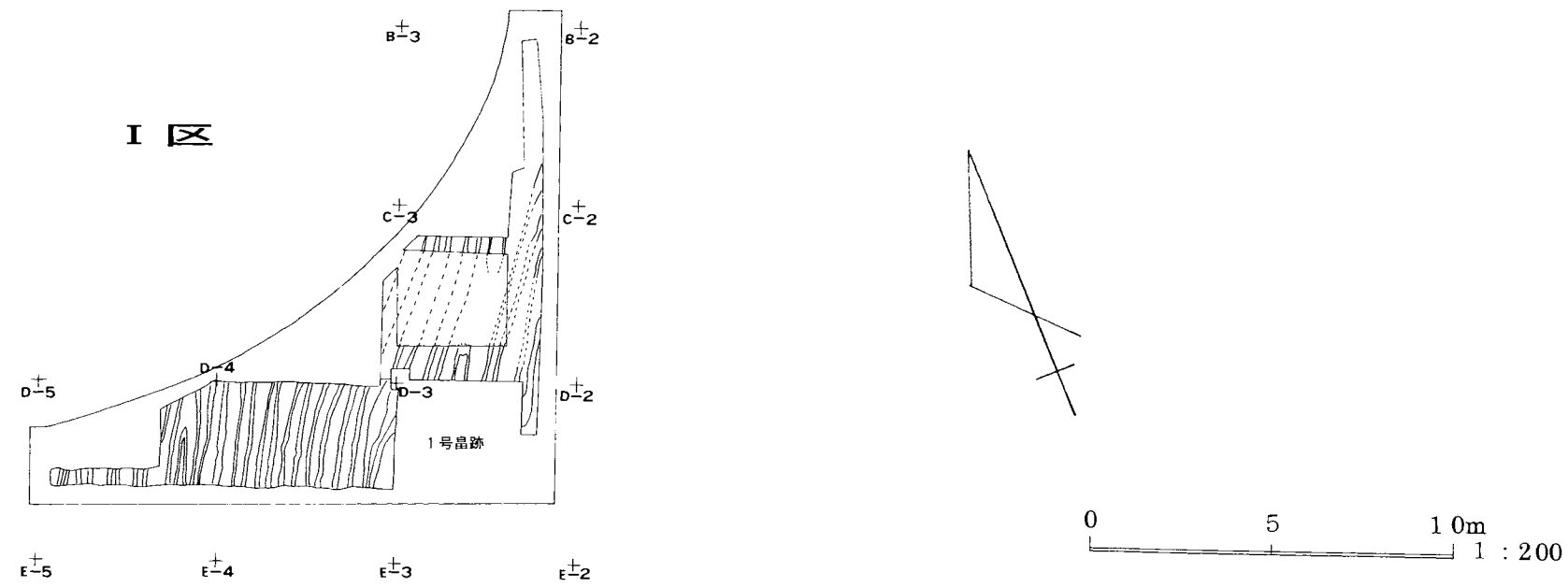
- 1 表土、耕作土
- 2 灰色（10Y 6/1）粘土層（シルト質）。火山灰含む、マンガン粒、酸化鉄多量を含む。
- 3 灰色（10Y 5/1）粘土層（シルト質）。
- 4 灰色（N 5/1）粘土層。軽石粒を多量に含む。
- 5 灰色（N 4/ ）粘土層。軽石粒を含む。オリーブ灰色（10Y 6/2）シルトブロックを、帯状もしくはブロック状に含む。
- 6 暗灰色（N 3/ ）粘土層（シルト質）。上位に軽石小粒を含む。部分的に炭化物をしもふり状に含む。
- 7 褐灰色（10YR 6/1）粘土層（シルト質）。
- 8 灰色（7.5Y 4/1）粘土層（シルト質）。
- 9 a b cの3層に細分されるオリーブ灰色（5GY 3/1）シルト質粘土層。a及びc層が11層に該当する。b層は灰色シルト（S 4/ ）を含む。

- 10 灰色（N 5/ ）粘土層。軽石細粒、炭化物粒（部分的に帯状）、オリーブ灰色シルト粒、焼土粒を含む。
 - 11 オリーブ灰色（5GY 6/1）粘土層（シルト質）＝ 9a、9c層
 - 12 黒褐色（2.5Y 3/1）シルト層。
 - 13 緑灰色（10GY 6/1）砂質土。
 - 14 火山灰純層（図中黒塗り）
 - A オリーブ黄（7.5Y 6/3）色砂質土。5・6層をブロック状（人頭大）に多量に含む。
 - B 緑灰（5G 6/1）色砂。5・6層をブロック状に含む
- A・B層は、パイプライン埋設土層。

第4図 基本土層図

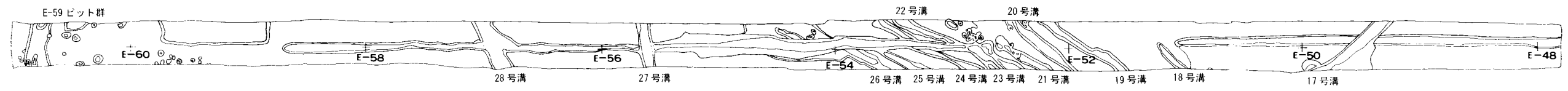


第5図 調査区全測図

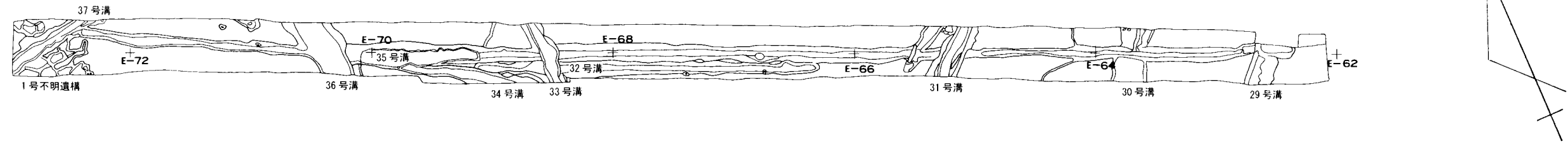


第6図 遺構配置図 (1) I～III区

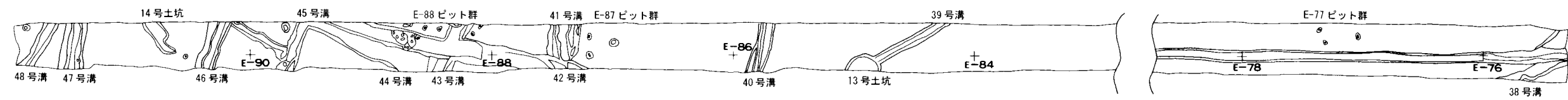
IV区



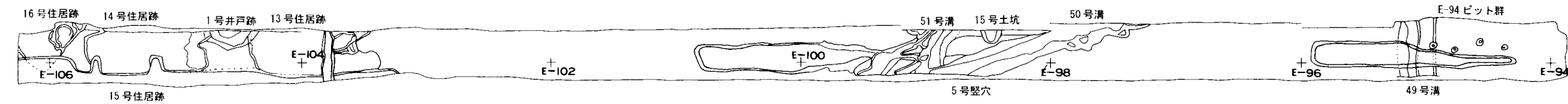
V区



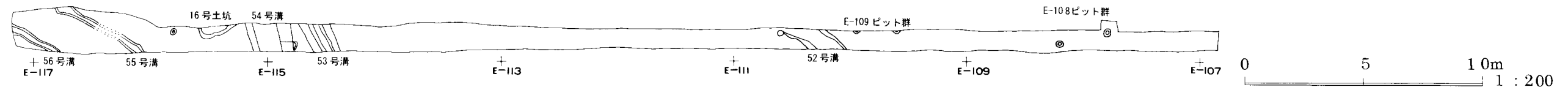
VI区



VII区



VIII区



第7図 遺構配置図(2) IV～VIII区

その結果、基本的には、上位から表土・耕作土（1層）、浅間A軽石粒を含む灰色シルト質粘土（2・3層）、浅間B軽石粒を含む暗灰色シルト質粘土（4・5・6層）、褐灰色シルト質粘土（7層）、灰色シルト質粘土（8層）、オリーブ灰色シルト質粘土（11層）、黒褐色シルト（12層）、緑灰色砂（13層）と堆積することが判明した。このうち5層中には、浅間B軽石の純層（14層）が堆積する地域もみられた。遺物包含層は4～7層であるが、7層と8層の間に部分的に堆積する軽石細粒を含む灰色粘土（10層）中にも包含されている。古墳時代前期の遺物は、灰色シルトを基盤とする土層に含有されていた。なお、この灰色シルト層は、Ⅶ区のみで堆積している土層である。

オリーブ灰色シルト質粘土（11層）は、無遺物層である。しかしながら、オリーブ灰色シルト質粘土は上下2層に分離（9a層・9c層と区別するが本来は同一層）し、部分的に灰色シルト層（9b層）を挟む部分もみられ、複雑な様相を呈していた。灰色シルト層（9b層）を挟む場合は9a・9b・9c層とし、挟まない場合は単独層・11層とした。こうした状況ではあったが、遺物包含層の4～7層中では遺構プランが確認できないこと、また全ての遺構が、深浅はあるものの本層まで掘り込んでいたことから、本層を遺構基盤層として、各調査区共、本層まで機械による掘下げを行った後に、遺構検出作業を行うこととした。

本層はまた、各調査区間でかなりのレベル差がみられた。その上面レベルは、以下のとおりである。Ⅰ区・23.3m、Ⅱ区24.0m、Ⅲ区東部24.2m、同西部24.3m、Ⅳ区23.9m、Ⅴ区東部23.9m、同西部24.3m、Ⅵ区東部24.3m、同西部24.4m、Ⅶ区東部24.8m、同西部24.9m、Ⅷ区東部24.9m、同西部24.7m。

これによると、Ⅷ区からⅦ区の地域が最も高く（24.9m）、Ⅷ区西部及びⅥ区にかけての地域にかけて徐々に低くなる。そしてⅤ区東部に至ると最も低く（23.9m）なる。低い状態はⅣ区全域に及び、Ⅲ区との境界で再び高く（24.3m）なる。そしてまた徐々に低くなり、東端Ⅰ区では最も低く（23.3m）なる。最高位と最低位のレベル差は、1.6mを測る。このうち低位のⅠ・Ⅳ・Ⅴ（東部）では、オリーブ灰色シルト質粘土（11層）と黒褐色シルト（12層）が厚く堆積するものの、他のレベルの高い調査区では、11層上位（9a層）が薄く堆積するのみであり、12層は堆積せず、13層・緑灰色砂が直下に堆積している。なお、基本土層図（第4図）は、基盤層が低位に存するⅣ区・D-58グリッドの堆積状況を示したものである。

住居跡は、こうした基盤層が高位の調査区（Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅶ区）で検出されている。Ⅱ区の西半で5軒（1号～5号住居跡）、Ⅲ区東半で7軒（6号～12号住居跡）、Ⅶ区西半で4軒（13号～16号住居跡）の16軒に及び、その配置もかなり集中する様相を呈している。

5基検出された竪穴状遺構も、Ⅱ区で1号住居跡の東側に3基（1号～3号竪穴）、Ⅲ区で12号住居跡の西側に1基（4号竪穴）、Ⅶ区で13号竪穴の東に1基（5号竪穴）と、いずれも住居跡に近接して配置されている。

土坑は、総数16基が検出されている。Ⅱ区に7基、Ⅲ区に5基、Ⅵ～Ⅷ区にかけて4基と集中する。しかしその集中度は、Ⅱ・Ⅲ区では住居跡・竪穴と同様であるものの、西側Ⅵ・Ⅶ区ではやや粗い。

溝は、ほぼ全域に検出され、総数56条を数える。このなかで、基盤層が最高位のⅦ区から徐々に低位に移行するⅦ区～Ⅴ区西部にかけての緩斜面上に深堀の溝が集中する。

畠跡は、基盤層が最低位のⅠ区から検出されている。

2 検出された遺構と遺物

検出された遺構は、住居跡16軒、竪穴状遺構5基、土坑16基、ピット群10群、溝56条、井戸跡1基、畠跡1作、性格不明遺構1基である。その他、近・現代のパイプラインによる掘削溝が、Ⅱ区～Ⅷ区にかけて随所（Ⅷ区は、南半部分全てに掘削溝が確認されたため調査対象から外した）にみられた。

Ⅳ 遺構と遺物

A 住居跡 住居跡は、Ⅱ区に5軒、Ⅲ区に7軒、Ⅶ区に4軒の計16軒が検出されている。

1号住居跡 Ⅱ区・D - 29グリッドに位置する。西南コーナー付近が調査されたのみであり、大半は（第8図）北側未調査区域に広がりをもつと思われる。

（第9図） 調査された範囲は、西南コーナーを挟んだ西辺1.75m、南辺2.90mの三角形範囲であり、全体の規模等は不明である。南辺軸の方位は、N - 95° - Eを示す。

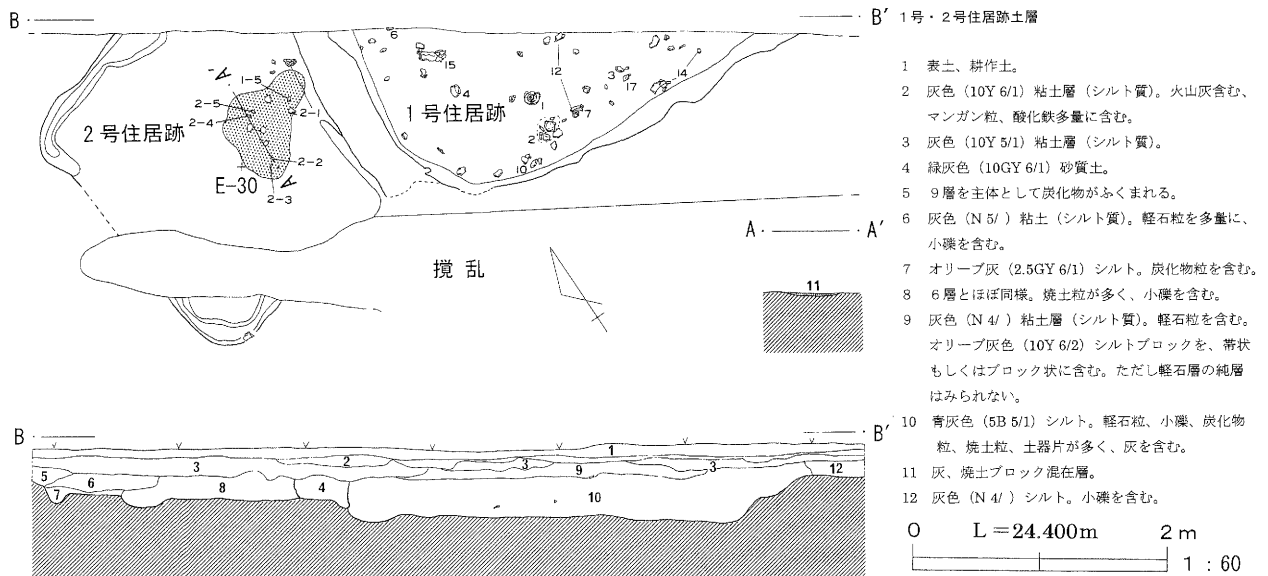
覆土は2層で構成されている。上層は、軽石粒・オリーブ灰色シルトブロックを含む灰色シルト質粘土層（9層）、下層は、軽石粒・小礫・炭化物粒・焼土粒・灰を含む青灰色シルト層（10層）である。いずれも土器片を含むが、特に下層には多量に含まれていた。

床面はほぼ水平であるが、基盤層のオリーブ灰色シルト質粘土は2～3cmと薄く、直下の礫・砂混在層がむき出しとなる部分もみられた。

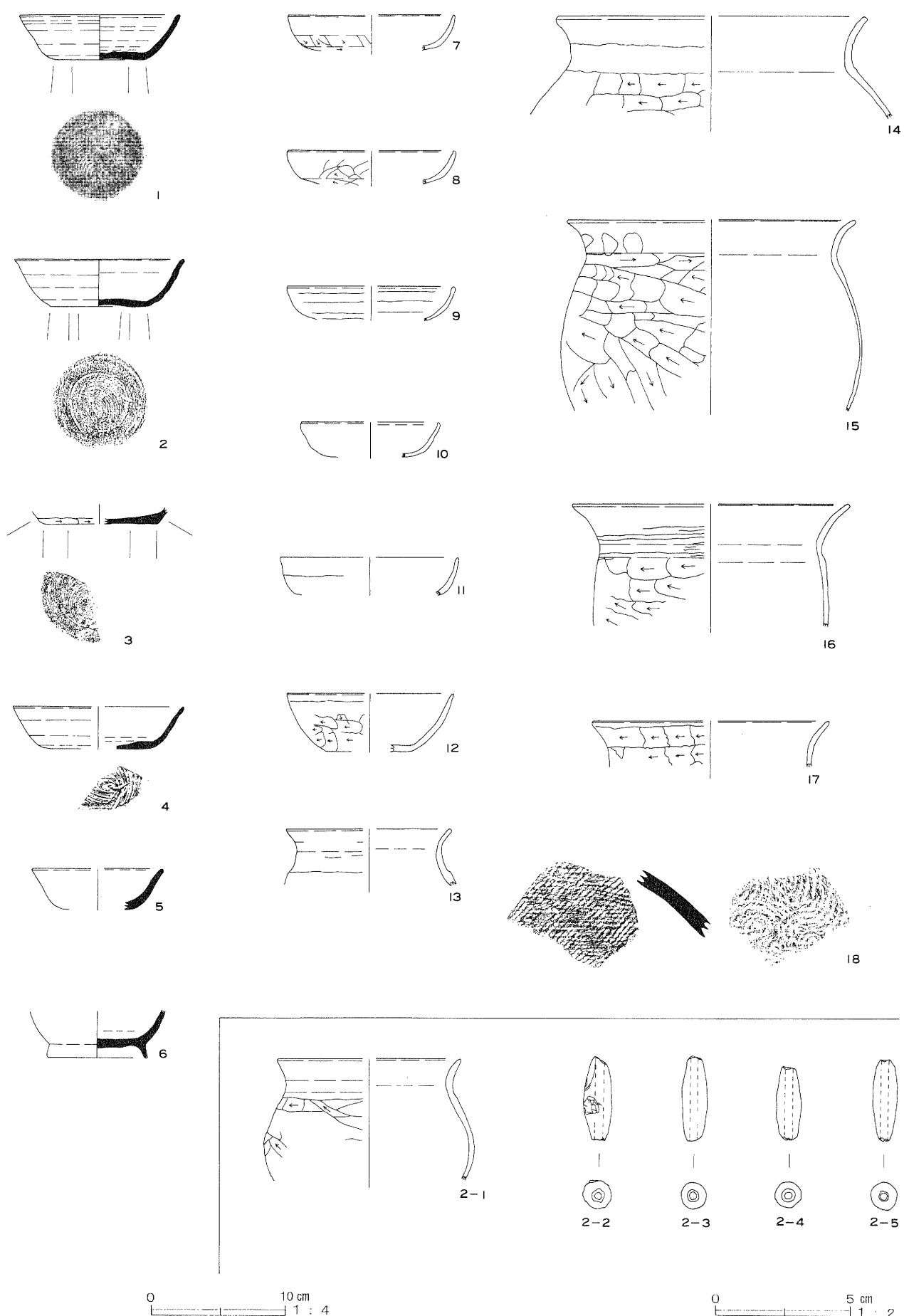
壁はほぼ直立し、最も深いところで40cmを計るが、壁体土がシルト質のため、南壁の大部分が崩落していた。全体の形態は、方形を基本とするものと思われる。

カマド・柱穴等は検出されていない。

遺物は、須恵器坏（1～5）、須恵器高台椀（6）、土師器坏（7～12）、土師器甕（13～17）、須恵器甕（18）等が出土している。須恵器坏は底面周辺部回転篋削りのもの（1～3）と糸切りのままのもの（4・5）がある。実測された遺物は、大部分が10層中からの出土であるが、須恵器高台椀（6）と須恵器甕（18）は9層中から出土している。



第8図 1号・2号住居跡



第9図 1号・2号住居跡出土遺物

第1表 1号住居跡出土遺物観察表（第9図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	11.8	3.3	6.5	①④⑥②	②	橙	4/5	内外面煤付着。二次加熱
2	須恵器・坏	12.3	3.4	7.0	①⑤④②⑥	①	灰	1/2	口辺部吸炭
3	須恵器・坏	—	—	(8.2)	①②	②	灰	底部1/3	
4	須恵器・坏	(12.5)	—	—	④①②⑥	①	オリーブ灰	1/4	口辺部吸炭
5	須恵器・坏	(9.6)	—	—	⑥①②④	①	灰白	1/7	2号住居出土破片と接合
6	須恵器・高台椀	—	—	(7.4)	②④①	②	灰	底部1/2	表面剥離
7	土師器・坏	(12.2)	—	—	④①③②	②	にぶい橙	1/5	
8	土師器・坏	(12.4)	—	—	④①③⑥	②	にぶい橙	1/7	
9	土師器・坏	(12.2)	—	—	④②①	②	橙	1/8	
10	土師器・坏	(10.0)	—	—	④①②	②	にぶい黄橙	1/6	内外面煤付着
11	土師器・坏	(13.2)	—	—	②④③	②	橙	口縁部1/5	
12	土師器・坏	(12.2)	4.3	(6.0)	①④②	②	にぶい橙	1/6	外面煤付着
13	土師器・甕	(12.1)	—	—	②④①③	②	明赤褐	口縁部1/4	内面炭化物付着
14	土師器・甕	(23.0)	—	—	①②③④⑥	①	橙	口縁部1/3	
15	土師器・甕	(21.2)	—	—	④①②⑥	②	橙	上半1/3	外面煤、内面炭化物付着
16	土師器・甕	(20.4)	—	—	②④③①⑥	②	橙	口縁部1/4	二次加熱
17	土師器・甕	(17.2)	—	—	④⑥①②③	②	にぶい黄橙	口縁部1/4	
18	須恵器・甕	—	—	—	①④	②	灰	破片	

第2表 2号住居跡出土遺物観察表（第9図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師器・甕	(13.6)	—	—	①④②③⑥	②	明赤褐	1/3	外面煤、内面炭化物付着
2	土 錘	長さ3.1 最大径1.05 孔径0.3						完形	
3	土 錘	長さ3.1 最大径0.9 孔径0.3						完形	
4	土 錘	長さ2.7 最大径0.95 孔径0.3						完形	
5	土 錘	長さ3.0 最大径0.95 孔径0.3						完形	

2号住居跡 II区・D - 29・30グリッドから、E - 29・30グリッドに位置する。北東コーナーは、北（第8図） 側未調査区に広がる。また西辺南半から南辺にかけては、パイプラインの掘削によって破壊（第9図） 壊されている。東に30cmの間隔で1号住居跡が隣接する。

西辺2.45m、南辺1.85mを計り、東辺ラインがやや外反し不安定であるもの、長方形を呈すると考えられる。長軸である西辺方位は、N - 7° - Wを示す。

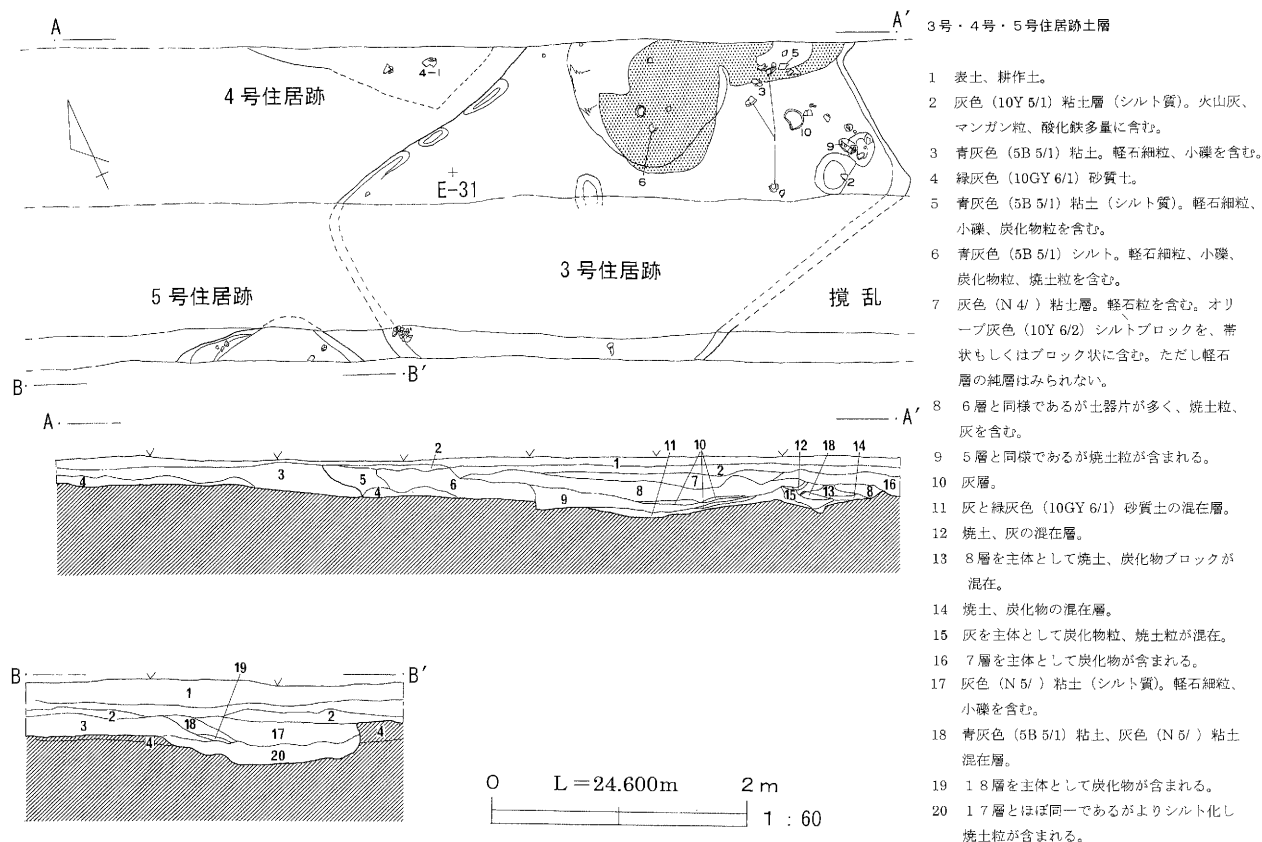
覆土は、多量の軽石細粒・小礫・焼土粒を含む灰色シルト質粘土（8層）である。この8層と同位には、西壁側にオリーブ灰色シルト質粘土、東と南側に緑灰色砂（4層）がみられた。4層は、基本土層の13層に当たり、東壁・南壁は緑灰色砂のみで壁体が構成されていたことを示す。

壁は緩やかな傾斜をもつ。全体に浅い。カマド柱穴等は検出されていない。

床面は固く締まっていた。北壁及び南壁直下には15cm以上の溝が回る。また東壁寄り中央の床は、僅かに窪みをもち、灰と焼土ブロックの混在層が堆積していた。灰層の中からは土師器甕（1）、小型の土錘（2～5）が出土している。

3号住居跡 II区・D - 30・31グリッドから、E - 30・31グリッドに位置する。北東及び南西コーナーは、それぞれ北側及び南側の未調査区に広がる。また南半中央部は、パイプラインの掘削によって破壊されている。東辺側に2号住居跡、北辺側に4号住居跡、西辺側に5号住居跡が接している。

各辺共ほぼ直線を呈するが、東辺北東隅寄りに張り出し部をもつ。実数値は計測不可能



であるが、長軸4.28 m、短軸2.75 mの長方形を呈するものと考えられる。長軸方位は、N - 77° - Eを示す。

覆土は、上層に軽石細粒・小礫・炭化物粒・焼土粒・灰を含む青灰色シルト (8層)、下層に軽石細粒・小礫・炭化物粒・焼土粒を含む青灰色シルト質粘土が堆積している。

壁は、ほぼ直立する。北壁直下に幅8~10cmの溝がみられるが、連続しない。

床面は、固く締まり安定するが、中央から北東隅寄りに深さ10cm程の窪みをもち、灰と緑灰色砂の混在層が堆積する。この灰は、北東隅の床平坦面に至っても連続し、さらに東壁北東隅寄りの張り出し部の中へと広がる。張り出し部は、断面形が床面上の窪みから奥に向けて傾斜をもち、さらに焼土・灰・炭化物等が堆積することから、カマドの存在を窺わせるが、張り出し部自体及び床面上に焼土化面は検出されていない。

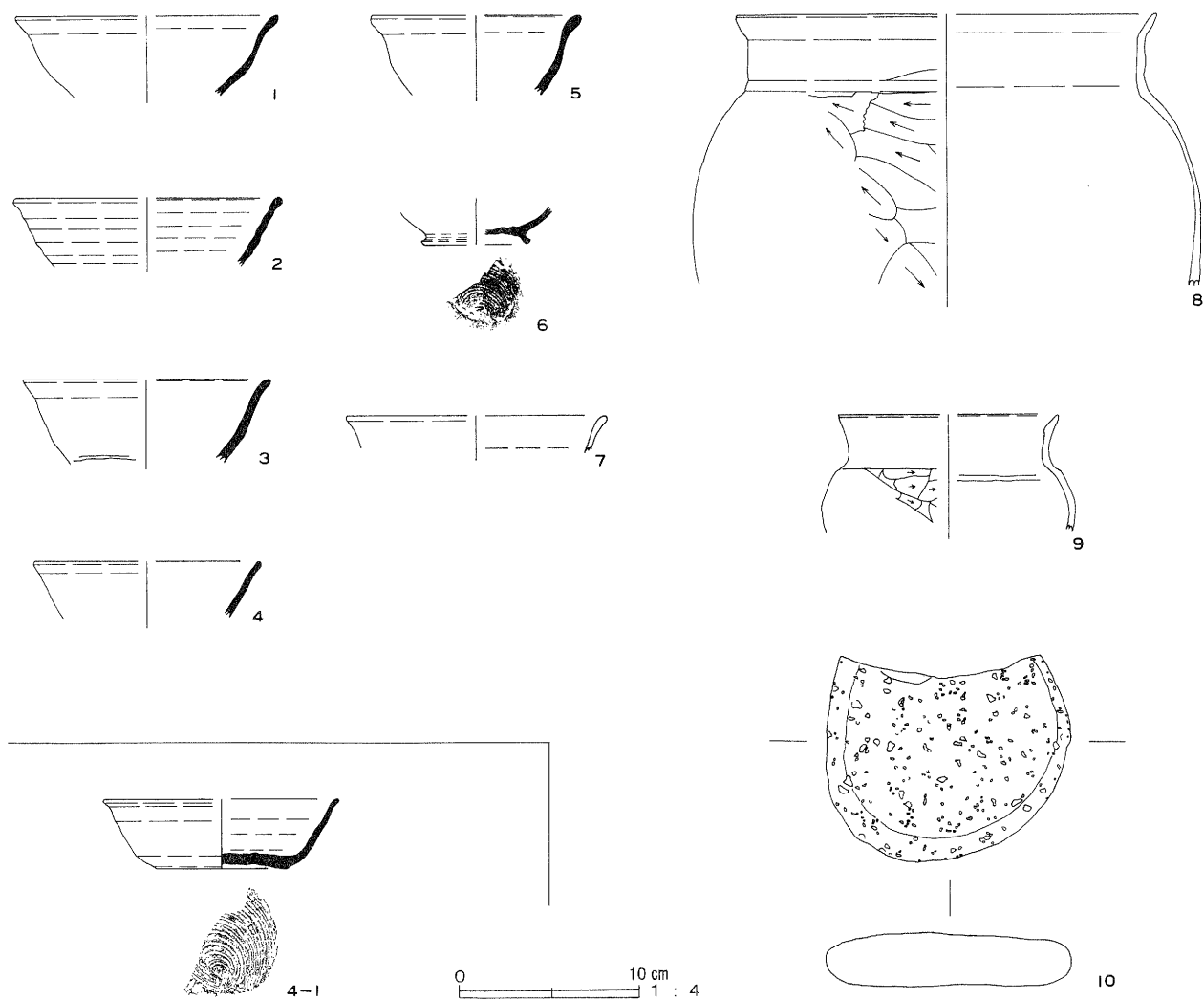
床面中央及び南東隅にピットがみられるが、いずれも深さ5cm程と浅い。

遺物は、大部分が東辺寄りの床面直上から、須恵器坏 (1~5)、同高台椀 (6)、土師器坏 (7)、同甕 (8・9)、磨石 (10) 等が出土している。

4号住居跡 II区・D - 30・31グリッドに位置する。南西コーナー付近が確認されたのみで、大部分 (第10図) は北側の未調査区に広がる。南辺側に3号住居跡が隣接する。

(第11図) 壁は不安定であり、西辺1.6m、南辺0.7mの範囲が知れるのみである。西辺はN - 47° - Wを示す。方形を基本とした形態を示すと思われる。

覆土は、青灰色を呈し、軽石細粒・小礫を含む粘土層 (3層)、炭化物粒を含むシルト質



第11図 3号・4号住居跡出土遺物

第3表 3号住居跡出土遺物観察表 (第11図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	(14.2)	—	—	①②⑥	①	灰	1/4	内外面一部吸炭
2	須恵器・坏	(14.2)	—	—	①⑥	①	灰	1/10	
3	須恵器・坏	(13.5)	—	—	①④⑥	①	灰	1/6	内面灰褐色
4	須恵器・坏	(12.2)	—	—	①②⑥	①	青灰	1/8	内外面一部吸炭
5	須恵器・坏	(11.3)	—	—	②①④	①	灰白	1/6	
6	須恵器・高台碗	—	—	(5.6)	①⑥	②	灰	底部3/5	内面一部吸炭
7	土師器・坏	(14.2)	—	—	③①④⑥	②	明赤褐	口縁部1/8	二次加熱。表面剥離
8	土師器・甕	(23.0)	—	—	①②③④⑥	②	にぶい黄橙	上位1/6	外面煤、内面炭化物付着
9	土師器・甕	(12.0)	—	—	④②①⑥	②	橙	口縁部1/3	外面煤、内面炭化物付着
10	磨石	長さ13.3 最大幅13.4 厚さ2.8							二面使用。二次加熱。炭化物付着

第4表 4号住居跡出土遺物観察表 (第11図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	(12.8)	3.8	7.0	①⑥⑤④	②	灰	1/2	

粘土層（5層）、さらに焼土粒をも含むシルト層（6層）に区分された。

床面は比較的固く安定しているが、ピット等は検出されていない。

遺物は、床面上から須恵器坏が出土している。

5号住居跡 II区・E - 31グリッドに位置する。北東コーナー付近が確認されたのみで、大部分は南側（第10図）の未調査に含まれる。東辺側に3号住居跡が隣接する。

壁はほぼ直立するが、北辺1.0m、東辺0.7mが知れるのみである。北辺はN-76°-Eを示す。方形を基本とした形態を示すと思われる。

覆土は、軽石細粒・小礫・焼土粒を含む灰色シルト（20層）で、上位（17層）は同質であるが、粘土質を帯びている。床面は固く安定している。

遺物は、白色針状物質を含む須恵器坏小片が出土しているのみである。

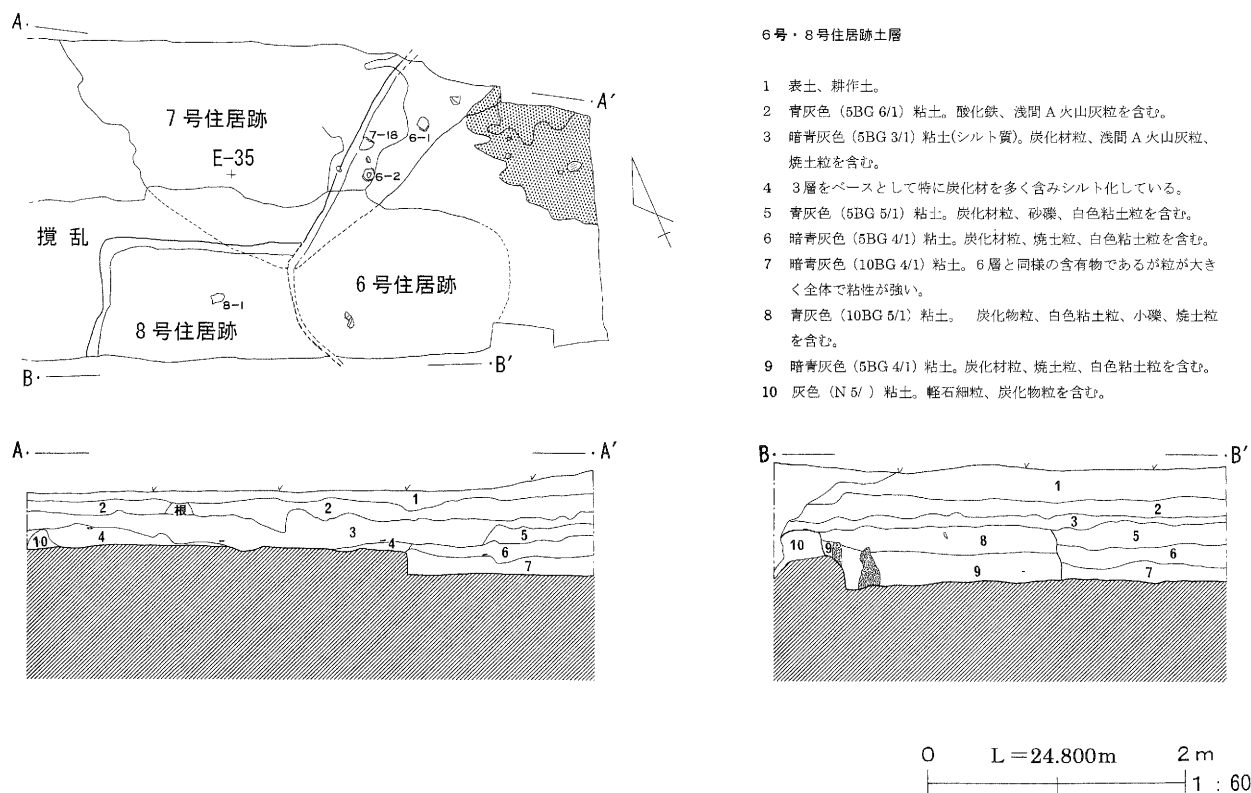
6号住居跡 III区・D - 34、E - 34グリッドに位置する。西隅付近が確認されたのみで、北・東・南側（第12図）の未調査区に、大部分が広がると思われる。西隅部で8号住居跡を切断し、北西辺上は（第14図）7号住居跡に削平されている。また、6号・7号・8号各住居跡の重複箇所上面は、パイプライン掘削溝によって削平されている。

壁はほぼ直立する。規模は、北西辺2.5m、南西辺0.7m範囲が知れるのみである。北西辺はN-50°-Eを示す。西隅は丸みをもつが、方形を基本とした形態を示すと思われる。

床面は、ほぼ水平に厚さ3cm程の暗褐色粘土が貼り付けられ、固く安定していた。また床面上には、藁状炭化材が一面に検出されている。貼り床の下は、砂礫混在層である。

覆土は、炭化物粒・砂礫・白色粘土粒を含む青灰色粘土（5層）、炭化物粒・焼土粒・白色粘土粒を含む暗青灰色粘土（6層）であるが、6層は、下方へ移行するにつれ含有物の粒子が大きくなる（7層）。

遺物は、北西辺際の6層中から須恵器坏（1）、須恵器高台碗（2）が出土している。



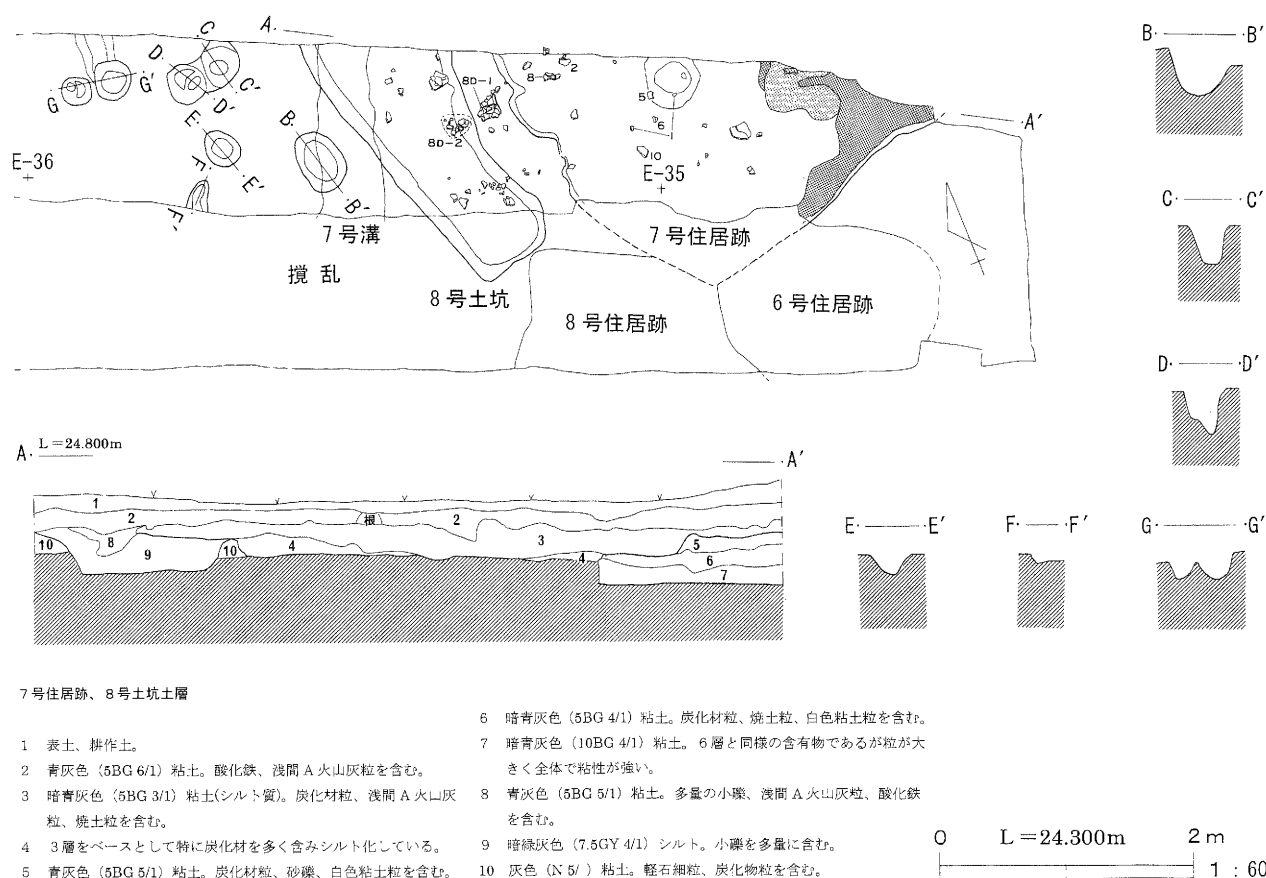
7号住居跡 Ⅲ区・D - 34・35、E - 34・35グリッドに位置する。西南半が確認されたものの、北東半は、北側未調査区に含まれる。南西隅から南東辺にかけて、6号・8号住居跡を削平しているが、南西辺上は8号土坑によって削平され、南西隅はパイプライン掘削溝によって床面近くまで切断されている。

壁はほぼ直立する。規模は南西辺2.55m、南東辺2.25mの範囲が知れるのみである。南東辺の方位はN-159°-Eを示す。両辺共脹らみをもち、やや不整形ではあるが、方形を基本とした形態を呈すると思われる。

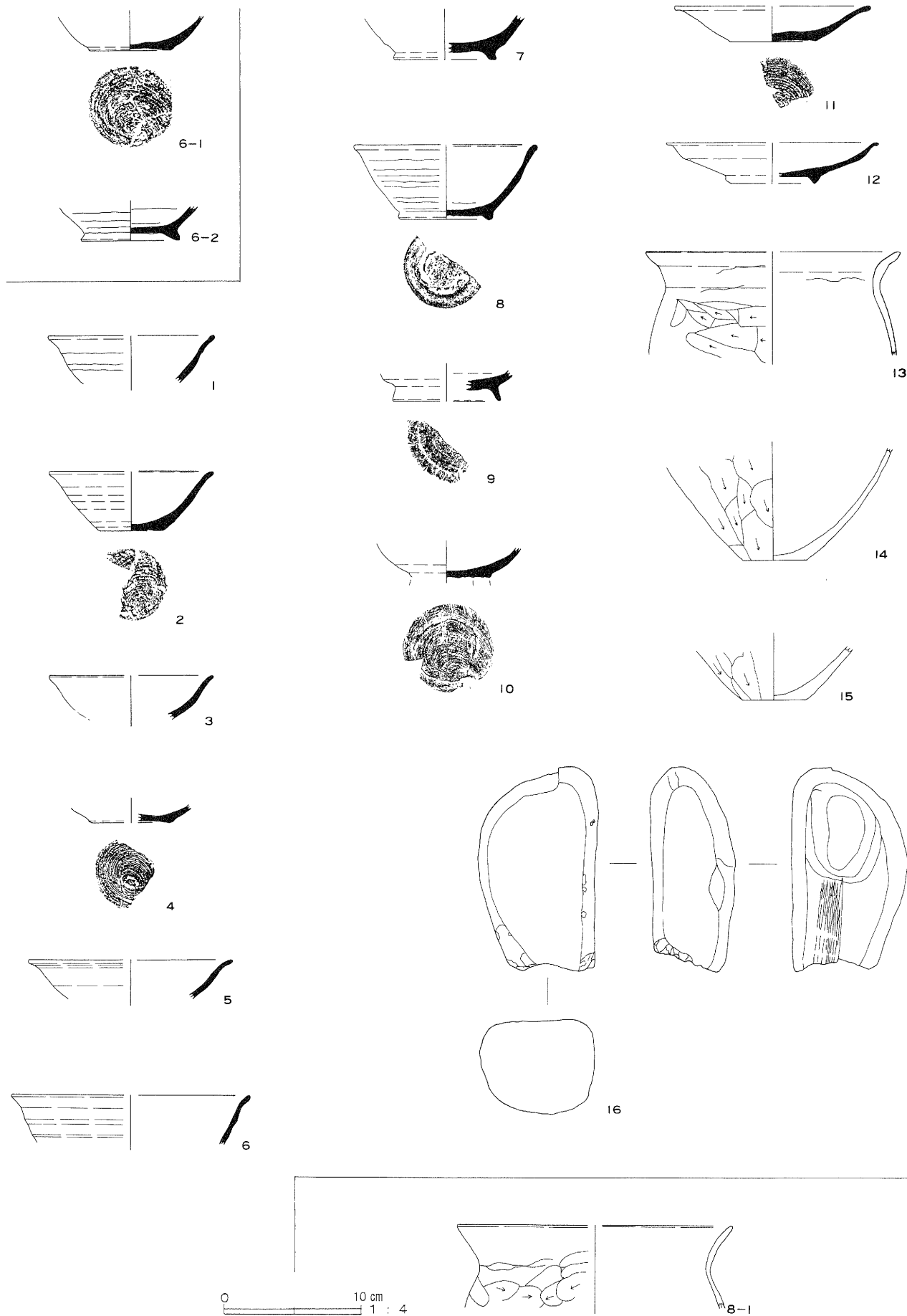
床面は、やや凹凸があるものの、固く安定している。中央に40×45cm 深さ10cm のピットが検出されている。床面上には、中央から南東辺にかけて灰・焼土・炭化物が混在して堆積している。南東辺の東端が張り出す様相を呈しており、この張り出しを扇の要として堆積しているところから、張り出しは、カマドであった可能性が高い。しかしながら、焼土面は確認されていない。

覆土は、炭化物粒・軽石粒・焼土粒を含む暗青灰色シルト質粘土（3層）であり、壁際では炭化物の量が増加し、シルト化も進んでいる（4層）。

遺物は、ほぼ全面から小片の状態で出土している。須恵器坏（1～5）、須恵器碗（6）、須恵器高台碗（7～10）、須恵器皿（11・12）、土師器甕（13～15）、3面使用の砥石（16）がみられるほか、土師器甕類の細片が多量に出土し特徴付けている。



第13図 7号住居跡、8号土坑、E-35ピット群



第14図 6号・7号・8号住居跡出土遺物

第5表 6号住居跡出土遺物観察表（第14図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	—	—	(6.0)	①④⑥②⑤	③	灰	底部のみ	内外面煤付着
2	須恵器・高台椀	—	—	7.0	④①②⑥	②	暗灰	底部のみ	内外面黒色処理

第6表 7号住居跡出土遺物観察表（第14図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	(12.2)	—	—	①④②⑥⑤	①	緑灰	1/6	
2	須恵器・坏	(12.0)	4.4	(4.8)	④①②⑥⑤	③	暗灰	1/3	二次加熱。内外面煤付着
3	須恵器・坏	(11.8)	—	—	②⑥	①	灰白	口縁部1/8	
4	須恵器・坏	—	—	(5.6)	①②③⑤⑥	①	灰	底部1/4	一部灰褐色
5	須恵器・坏	(14.8)	—	—	①⑥②⑤④	①	灰	口縁部1/8	
6	須恵器・椀	(17.3)	—	—	①④⑥	①	灰白	口縁部1/8	
7	須恵器・高台椀	—	—	(7.5)	①②③④⑥	①	灰白	底部1/8	
8	須恵器・高台椀	(13.5)	5.5	(7.0)	①④⑥②	①	灰	1/3	
9	須恵器・高台坏	—	—	(8.0)	⑤①②④⑥	②	灰-緑 灰	底部1/4	
10	須恵器・高台椀	—	—	5.7	①②④⑥⑤	②	灰	底部のみ	
11	須恵器・皿	(14.0)	2.6	(6.2)	①⑤④	②	灰	1/4	
12	須恵器・皿	(14.4)	3.0	(5.4)	①⑥	②	灰白	底部1/4	
13	土師器・甕	(18.6)	—	—	①②③④⑥	②	明赤褐	上位1/4	輪積痕。外面煤、内面炭化物付着
14	土師器・甕	—	—	4.6	②③④①⑥	②	橙	底部1/2	
15	土師器・甕	—	—	4.6	②④①⑥	②	にぶい褐	底部のみ	内面にぶい橙。二次加熱
16	砥石	長さ15.0 最大幅8.5 厚さ7.0							三面使用

第7表 8号住居跡出土遺物観察表（第14図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師器・甕	(20.0)	—	—	④②①③⑥	②	明赤褐	口縁部1/6	二次加熱

8号住居跡 III区・E - 34・35グリッドに位置する。北隅部分が確認されているが、東南半は6号住居跡に切断され、西南半は南側未調査区に含まれる。また北東辺の上面は、7号住居跡に（第14図）削平され、さらに北東辺の大部分は、パイプラインの掘削溝によって切断されている。

壁は、ほぼ直立している。規模は、北東辺1.1m、北西辺0.95mの範囲が知れるのみである。北東辺の方位はN-110°-Eを示す。北東辺・北西辺両辺共ほぼ直線を呈し、方形を基本とした形態を示す。

床面は、固く安定しており、6号住居跡床面とほとんど同レベルである。床面上にはピット等は検出されていない。

覆土は、上層が炭化物粒・白色粘土粒・小礫・焼土粒を含む青灰色粘土（8層）、下層が炭化物粒・焼土粒・白色粘土粒を含む暗青灰色粘土（9層）である。なお、8層と6号住居跡5層の上面には、7号住居跡3層が堆積している。また北隅で見られた噴砂は、8層途中まで確認されている。

遺物は僅かであり、土師器甕（1）が1点出土したのみである。

9号住居跡 III区・D - 36・37、E - 36・37グリッドに位置する。北及び南隅がそれぞれ未調査区に入る。南辺中央から西辺中央部は、パイプラインの掘削溝によって切断されている。（第15図）

（第17図） 壁は、ほぼ直立して、概ね直線を呈する。規模は、長軸3.0m、短軸2.4mを計る。長方形を呈し、長軸方位は、N-75°-Eを示す。

床面は、凹凸がみられるが、比較的固く締まり、安定している。床面上には、西辺近くに径30×45cm、深さ45cm、中央に径30cm、深さ25cm、さらにその北に径40×20cm、深さ

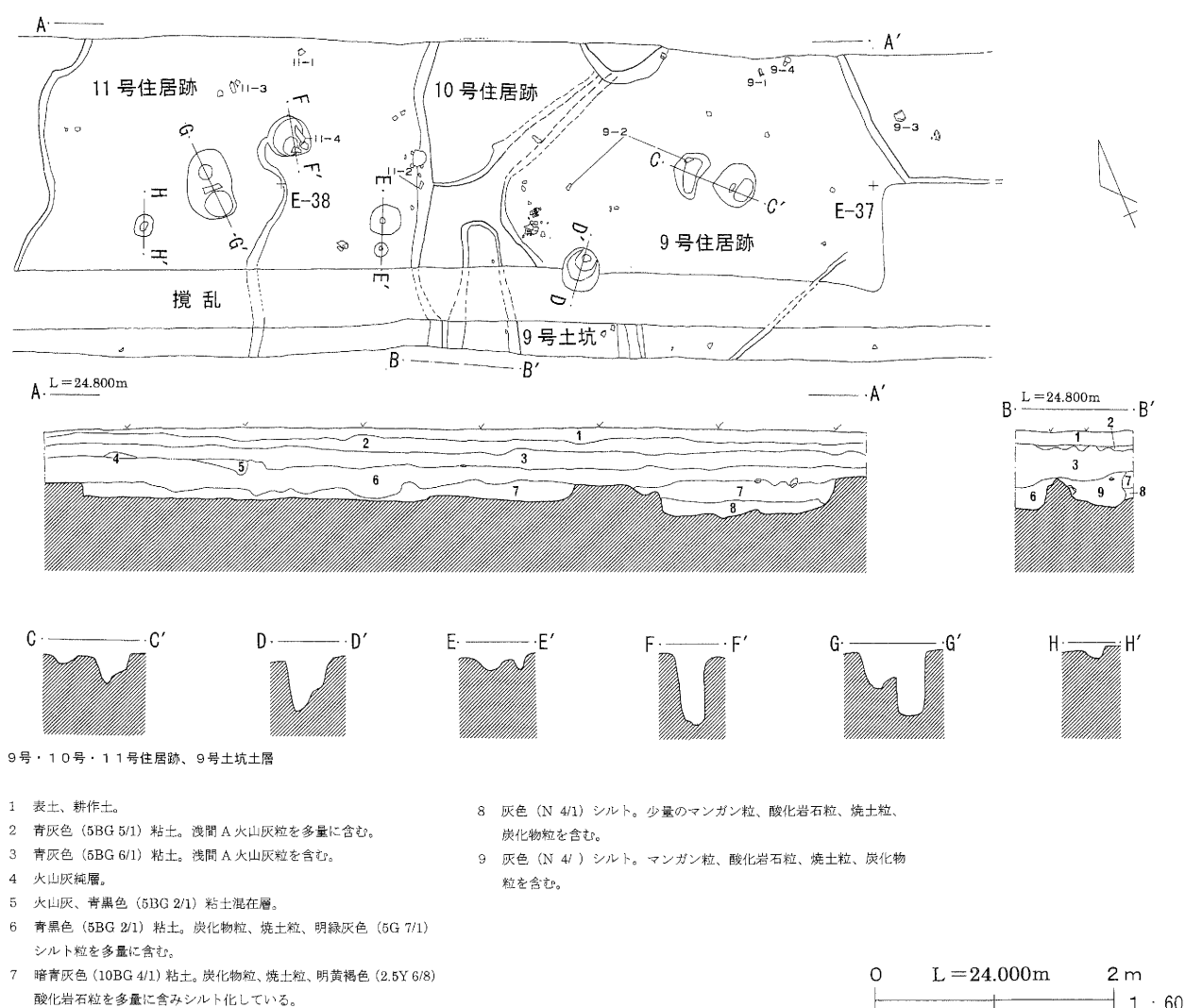
10cm の規模をもつピットが検出されている。前 2 者は、2 段掘りである。

覆土は、上層は炭化物粒・焼土粒・明黄褐色酸化岩石粒を含む暗青灰色シルト質粘土（7 層）、下層はマンガン粒・焼土粒・炭化物粒・明黄褐色酸化岩石粒を含む灰色シルト（8 層）が堆積している。

遺物は、須恵器坏（1・2）、須恵器高台碗（3）、土師器台付甕（4）が出土しているが、表面の磨滅したものが多い。

10号住居跡 Ⅲ区・D - 37グリッドに位置する。南西側10cm程で9号住居跡に隣接し、西側は11号（第15図）住居跡に切断されている。東辺南端部及び南辺部分が確認されたに過ぎず、北側の大半は（第17図）未調査区に入っている。

壁は、ほぼ直立している。ラインの詳細は不明であるが、南辺の西端が北にカーブを描くことから、11号住居跡に切断される部分が西南隅にあたるとみられる。そうであるならば、南辺は1.85mを測ることとなり、これが本住居の短辺を示すと思われる。東辺は40cmしか知り得ないが、これを長辺とするとその方位は、N-8°-Wを示すこととなる。



第15図 9号・10号・11号住居跡、9号土坑

床面は、波状を呈するが、比較的固く安定している。柱穴等は検出されていない。

覆土は、9号住居跡上位覆土と同一の、炭化物粒・焼土粒・明黄褐色酸化岩石流を含む暗青灰色シルト質粘土（7層）であり、さらに上面に炭化物粒・焼土粒・明緑灰色シルト粒を含む青黒色粘土（6層）が堆積する。なお6層は、9号住居跡、11号住居跡上位にも連続して堆積している。

遺物は、須恵器坏（1）が1点出土したのみである。この杯は底部のみであるが、中央部が穿孔されており、紡錘車として利用されていたものと思われる。

11号住居跡 Ⅲ区・D - 37・38、E - 37・38グリッドに位置する。東辺北東部で10号住居跡を切断し（第15図） ている。南半部では、パイプラインの掘削溝によって切断されている。北及び南側は、未（第17図） 調査区に入っている。

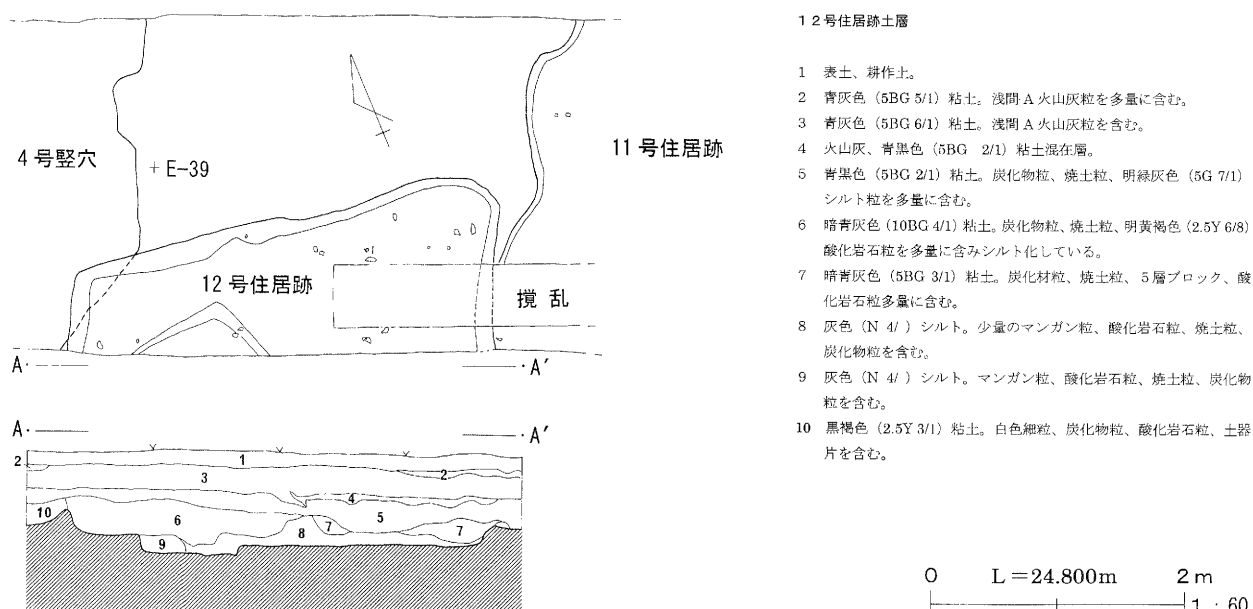
壁は、ほぼ直立するが、崩落した部分が多く、全体でかなり曲折したラインを呈する。東辺2.55m、西辺2.7m範囲が確認されている。東西両辺が長軸と思われ、その方位は、N - 23° - Eを示す。短軸は、3.0mを測ることとなる。

床面は、ほぼ水平であるが硬度が少なく、安定しない。また中央ピットから東南部分は1段下がる。西側との段差は10cmほどである。中央部には2段掘りピットが2穴穿たれている。東側ピットは、径35cm、最深部65cm、西側ピットは、径60×35cm、最深部55cmを測る。その他小ピットもみられるが、いずれも浅い。

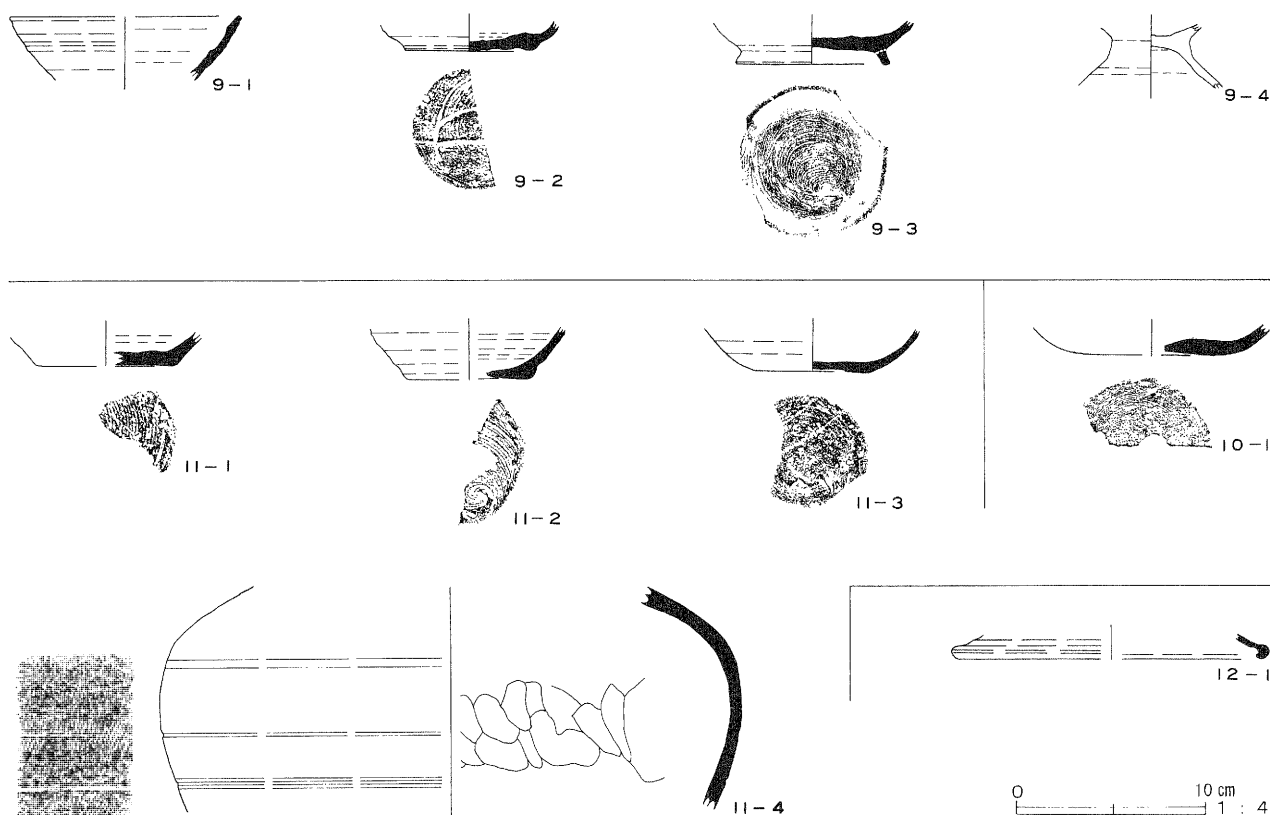
覆土は、炭化物粒・焼土粒・明黄褐色酸化岩石粒を含む暗青灰色シルト質粘土（7層）であり、10号住居跡と同一である。しかし、明確には区別はできないものの、10号住居跡覆土と比較すると、一段とシルト化している。

遺物は、須恵器坏（1～3）、須恵器短頸壺（4）が出土している。

12号住居跡 Ⅲ区・E - 38・39グリッドに位置する。東辺の一部をパイプラインの掘削溝によって切（第16図） 断され、北西隅で4号竪穴を切断している。また南半は、南側未調査区に入っている。



第16図 12号住居跡



第17図 9号・10号・11号・12号住居跡出土遺物

第8表 9号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・坏	(12.0)	—	—	①⑤	②	灰	1/8	口辺部吸炭
2	須恵器・坏	—	—	6.8	①②⑥	②	灰白	底部1/2	表面磨滅
3	須恵器・高台椀	—	—	7.8	①⑥	②	灰	1/2	
4	土師器・台付甕	—	—	—	④①⑥	②	明赤褐	底部1/5	台内外面共煤付着

第9表 10号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・坏	—	—	(7.4)	⑤①②⑥③	①	灰	底部1/2	底部中央穿孔痕あり

第10表 11号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・坏	—	—	(7.2)	⑤⑥③②	③	灰	底部1/4	内面にふい橙。表面磨滅
2	須恵器・坏	—	—	(6.7)	①⑤②	③	灰白	底部1/2	底部穿孔か。
3	須恵器・坏	—	—	6.0	①②③④⑥	②	灰	底部2/3	
4	須恵器・短頸壺	—	—	—	②①⑥	①	灰	肩・部	外面自然釉付着。

第11表 12号住居跡出土遺物観察表 (第17図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器・蓋	(15.8)	—	—	①②④⑥	②	褐灰	口縁部1/8	

(第17図) 壁は、ほぼ直立するものの、下端部で緩傾斜となり、丸みを持って床へ移行する。壁ラインは直線を呈し、東西辺は並行するものの、北辺はこれらと直交しない。北東隅は丸みをもつが、全体では台形を呈すると思われる。北辺は3.45 mを計り、東西辺はそれぞれ1.55 m、0.65 m分が知れるのみである。東西辺の方位は、N-23°-Eを示す。

床面は固く、安定している。中央北西隅寄りに深さ10～15cmで矩形の窪みがみられる。覆土は、上位に炭化物粒・焼土粒・明黄褐色酸化岩石粒を含む暗青灰色粘土（6・7層）下位にはマンガン粒・明黄褐色酸化岩石粒・焼土粒・炭化物粒を含む灰色シルト（8・9層）が堆積している。このうち6層は7層に比べてシルト化し、7層にはさらに上層の青黒色粘土（5層）ブロックを含んでいる。9層は8層に比べてマンガン粒の含有量が多い。

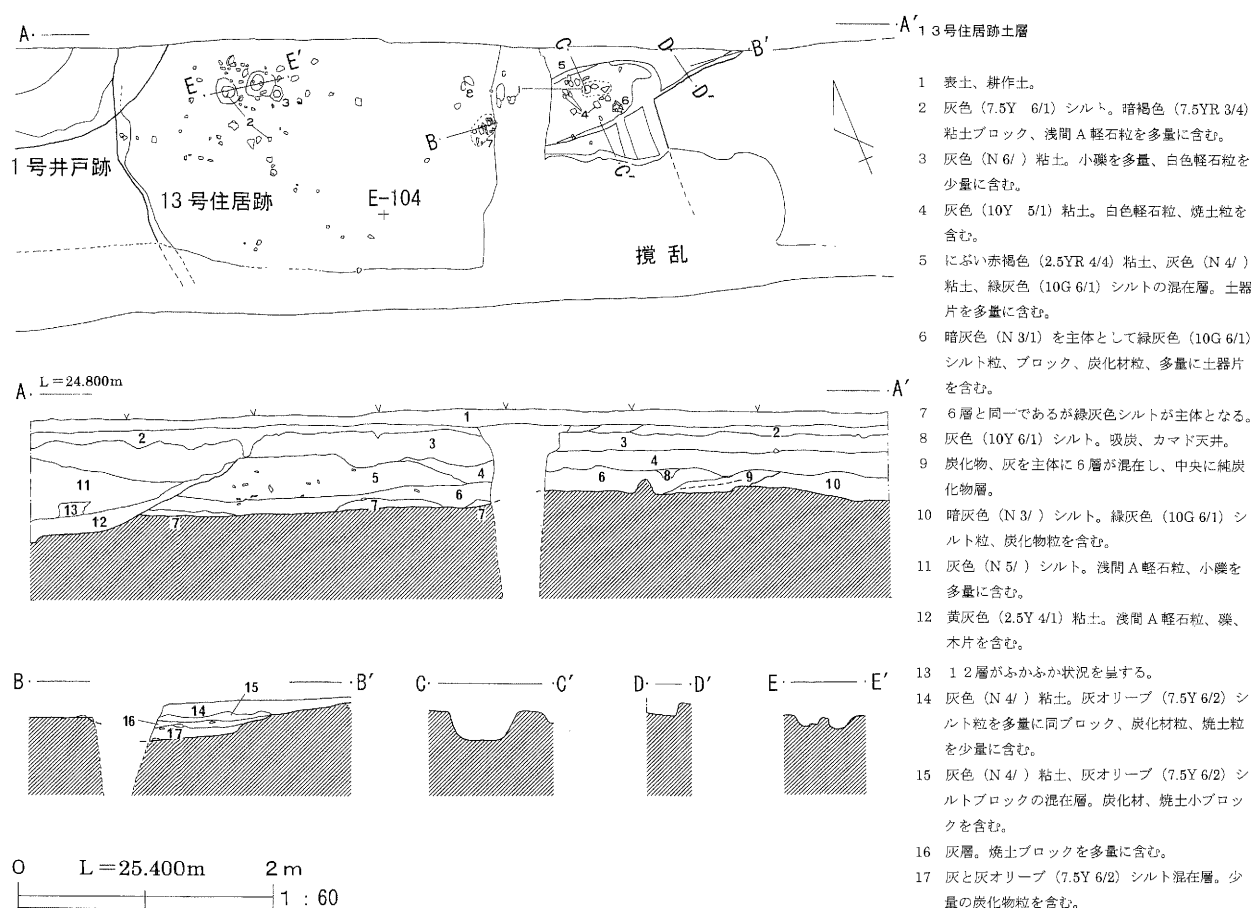
遺物は、須恵器蓋（1）が出土している。

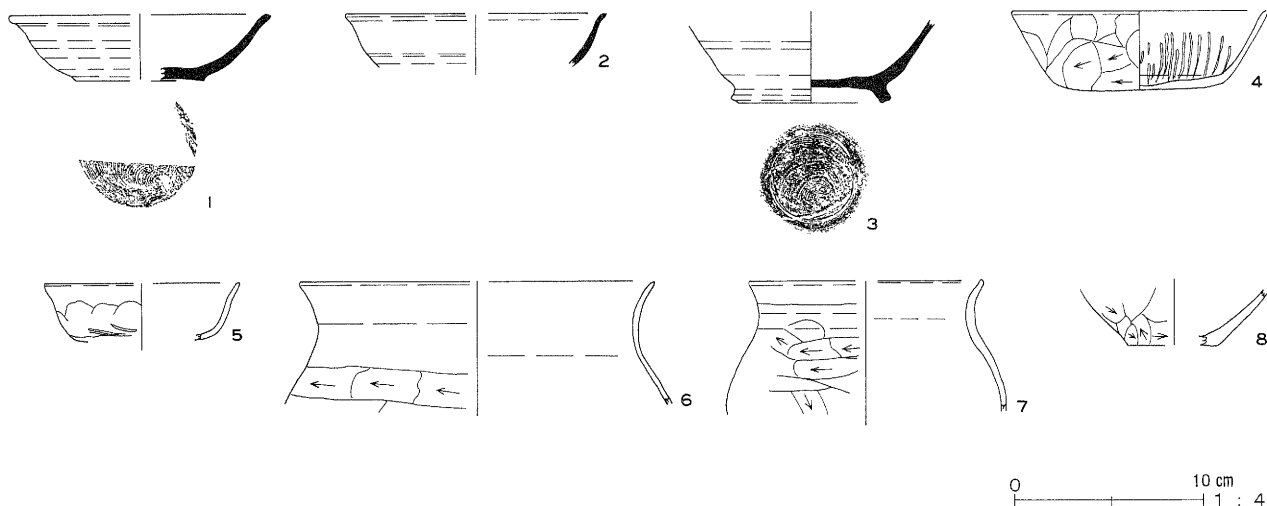
13号住居跡 VII区・D - 103・104、E - 103・104グリッドに位置する。南半及びカマド前は、パイプ（第18図）ラインの掘削溝によって、また西壁の一部は1号井戸跡によって切断されている。また北半は、北側未調査区に入っている。

壁は、ほぼ直立する。西辺は、外に脹らみをもつが、概ね東辺と平行する。西辺は1.60m、東辺はカマドを除いて0.40m分が知れるのみであるが、主軸は4.10mを計り、方位はN-94°-Eを示す。主軸を長軸とする長方形を呈すると思われる。

床面は固く、安定している。西辺寄りに小ピットが2穴みられるが、深さ8～10cmと浅く、断面形も逆台形を呈する。

カマドは、東辺に設置されている。火床の大半は竪穴内に位置し、幅55cmを計る。長さ、前面が切断されており知り得ないが、現状では1.05mを計る。平面形は、長円形を呈する。床・壁共に強く被熱している。床は前面が深く、直線的に緩く傾斜して奥壁へ移行





第19図 13号住居跡出土遺物

第12表 13号住居跡出土遺物観察表（第19図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	(13.7)	3.4	(6.6)	①②③⑥	①	灰	1/3	
2	須恵器・坏	(13.6)	—	—	⑤①⑥②	①	灰	口縁部1/5	
3	須恵器・高台椀	—	—	8.5	①②⑥	①	灰	下位のみ	
4	土師器・坏	13.4	4.2	6.8	②④①⑥	②	にぶい橙	1/2	内外面煤付着。二次加熱
5	土師器・坏	(10.1)	—	—	②③⑥⑤	②	明赤褐	1/5	一部吸炭
6	土師器・甕	(18.4)	—	—	②①④⑥	②	にぶい褐	上位の一部	内外面煤付着
7	土師器・甕	(12.3)	—	—	②④①③	②	明赤褐	口縁部1/4	外面煤、内面炭化物付着
8	土師器・甕	—	—	(4.6)	③②①④	②	にぶい橙	底部1/2	外面煤付着

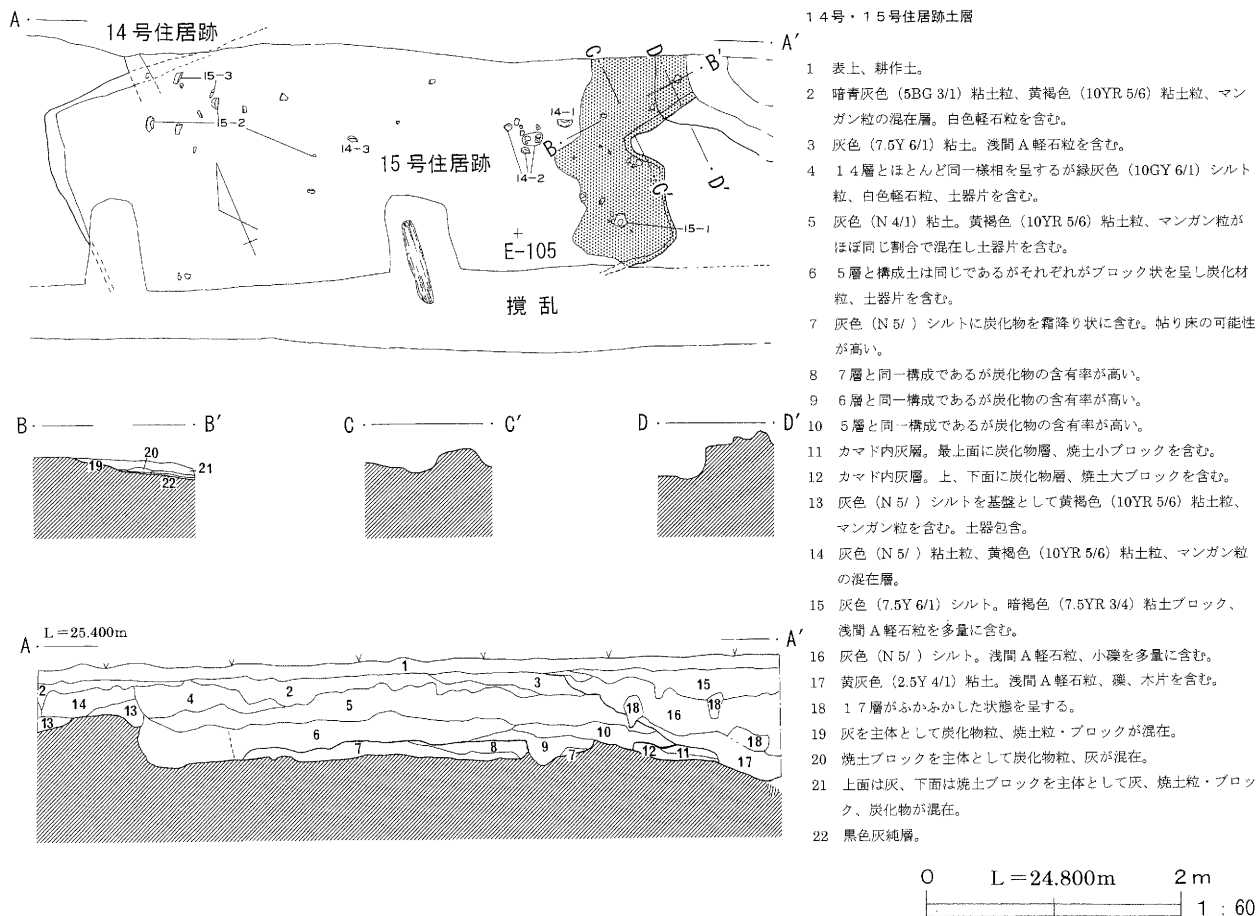
する。奥壁は段を成し、火床より若干強い傾斜で煙道部へと連続する。煙道部北壁は、北側未調査区に入っており全体の形態は不明であるが、南壁は東端部で丸みをもち、煙道部の終焉を想定させる。恐らく煙出しに向けて徐々に幅を狭めているものと思われる。現状で長さ75cmを計る。

覆土は、上層が鈍い赤褐色粘土・灰色粘土・緑灰色シルトの混在層（5層）、下層が緑灰色シルト粒・ブロック、炭化物粒を含む暗灰色粘土（6層）であり、また、組成は6層と同一であるが、緑灰色シルトが主体となる7層が、床上に堆積する部分もみられる。いずれの層も土器小片を多量に含んでいる。

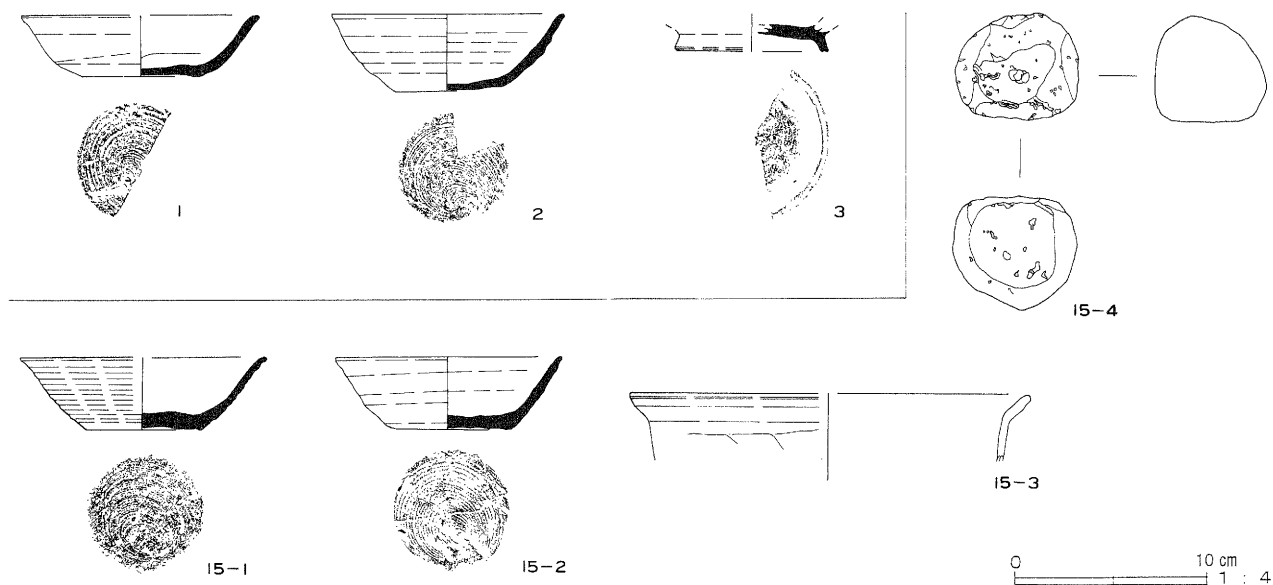
遺物は、小ピット周辺とカマド内の2箇所に集中している。前者には須恵器坏（2）、須恵器高台椀（3）、後者には須恵器坏（1）、土師器坏（4・5）、土師器甕（6～8）がみられる。

14号住居跡 VII区・D - 104・105グリッドに位置する。南半はパイプラインの掘削溝、東辺は1号井戸跡によって切断されているが、15号住居跡の上半を切断・削平している。また北半は、北側未調査区に入っている。

本住居跡は、15号住居跡の覆土として扱っていた灰色粘土・黄褐色粘土・マンガンがそれぞれブロック状を呈し、同じ割合で混在し、炭化物粒を含む土層（6層）の下位が、固く締まって面を成していたため、この面を追及して調査区を北西側に僅かに拡張したところ、15号住居跡の北壁を切断している本住居跡の西壁を15cm分検出したものである。東辺側は、6層と同位に、10層（6層と同一構成であるが、炭化物粒の含有率が高い）が堆



第20図 14号・15号住居跡



第21図 14号・15号住居跡出土遺物

積している。しかし10層の東縁は、1号井戸跡によって切断されているため立ち上がりがみられず、本住居跡の規模・形態共に不明であるといわざるを得ない。一応、現段階で知れる規模は東西3.90 mの範囲のみである。西辺の方位は、N - 4° - Eを示す。

床面は固く締まるが、凹凸がみられ、安定しない。西辺寄りでは、15号住居跡床面と同

第13表 14号住居跡出土遺物観察表（第21図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	(12.4)	3.2	(6.0)	②⑥④①③	①	灰	1/2	
2	須恵器・坏	12.2	4	6	⑤①②⑥	②	灰	5/6	
3	須恵器・高台椀	—	—	8	②①⑥	③	灰白	1/10	

第14表 15号住居跡出土遺物観察表（第21図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	(13.0)	3.7	6.1	⑥①②	①	黄灰	3/5	
2	須恵器・坏	11.7	3.8	6.2	①⑥	①	青灰	9/10	口辺部吸炭
3	土師器・甕	(21.2)	—	—	①②③④	①	明赤褐	口縁部1/4	
4	磨石	長さ5.5 幅6.5 厚さ5.7							一面使用。軽石製

レベルまで下がる部分もみられる。

遺物は、床面上から須恵器坏（1・2）、須恵器高台椀（3）が出土している。

15号住居跡 VII区・D - 105・106、E - 106グリッドに位置する。南半はパイプラインの掘削溝、カマド上面は、1号井戸跡によって切断されている。

（第21図） 壁は、ほぼ直立する。西辺は僅かに脹らみをもつが、ほぼ直線を成す。各辺は、攪乱溝による切断、及び北側未調査区であることによって寸断されており、北辺0.75 m、西辺1.15 m、東辺はカマド部を除いて0.85 m、南辺は0.70 mが計れるのみである。しかし、北西と南東両隅が検出されていることから、本住居跡は、長軸4.30 m、短軸2.85 mの規模をもつことが知れる。長軸を主軸とした長方形を呈する。主軸方位はN－86°－Eを示す。

床面は、固く安定している。柱穴等は、検出されていない。

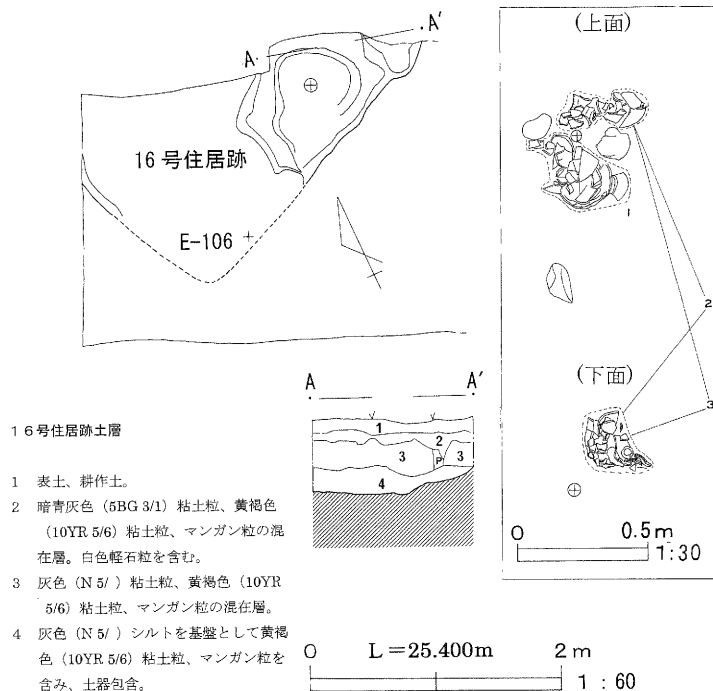
カマドは、東辺に設置されている。火床は、大部分が竪穴外に張り出す。南半部が深く北半部が浅い。また、前面が浅く、奥に向けて深くなるという、特異な断面を示す。斜面上に堆積する灰層（11・12層）については、14号住居跡に帰属することも考えられたが、両層の上面が固くなり、両層が14号住居跡の床として使用されていたと判断され、本住居跡カマド覆土としたものである。火床の壁・床は、共に被熱面が剥離しており、1号井戸跡による削平と未調査区への延伸もあって、規模・形態は不明といわざるを得ないが、竪穴東壁とカマド東壁の角度から、カマド全体の形態は、概ね三角形を呈すると思われる。現状では前面幅70cm、奥行き97cmを計る。

覆土は、炭化物を霜降り状に含む灰色シルト（7・8層）が堆積しているが、両層とも14号住居跡の床面として、固く締まっていた。

遺物は、北西隅付近から須恵器杯（2）、土師器甕（3）、カマド脇南東隅付近の灰層中から須恵器坏（1）、覆土中から軽石製砥石が出土している。

16号住居跡 VII区・D - 105・106、E - 106グリッドに位置している。大半は、北側及び西側の未調査区に入っている。また南隅は、壁がパイプラインの掘削溝によって削除されており、床面のみが残存していた。

壁は、南西辺と南東辺の一部が検出され、一部削除された部分も含めると、それぞれ1.35 m、2.55 mを計る。両辺はほぼ直角に配され、南東辺の方位は、N－65°－Eを示す。方形を基本とした形態を呈するものと考えられる。壁体は、ほぼ直立する。

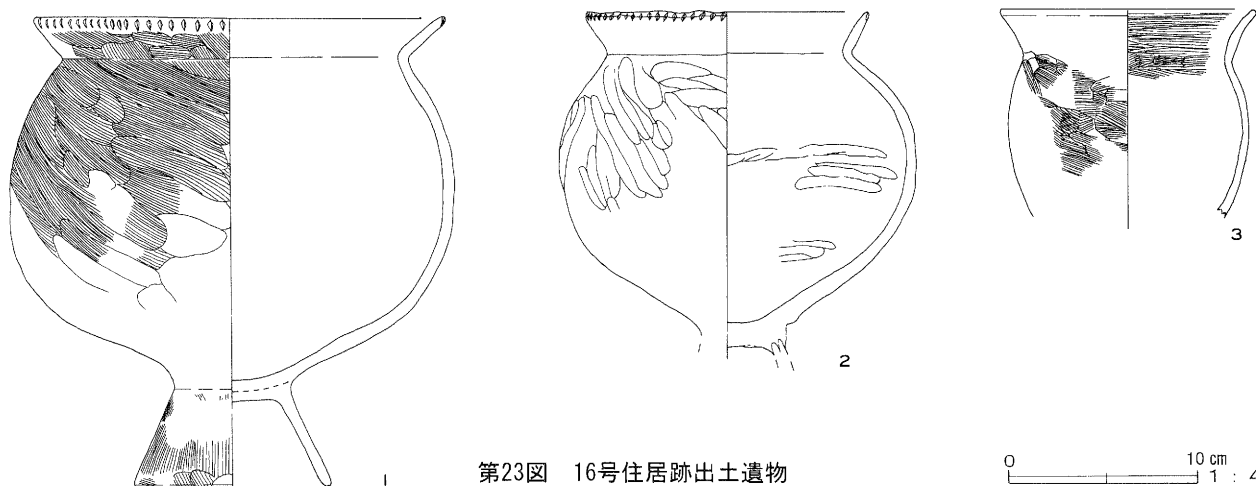


第22図 16号住居跡

床面はやや固く、安定している。南東辺直下には126×85cm、深さ14cmの長円形ピットがみられる。他に柱穴等は、検出されていない。

覆土は、黄褐色粘土粒・マンガン粒を含む灰色シルト（4層）が堆積し、上位には4層と同一構成であるものの、黄褐色粘土粒・マンガン粒の量が増加し、灰色シルトと混在（3層）している。

遺物は、長円形ピット内から、土師器台付甕が3個体（1～3）出土している。南側から北に向けて1・3・2の順で配置されていた。中央の3は、1・2と比して下位に位置する。3の上面には東西に円礫が2個配されていた。円礫は、ピット南東端にも1個検出されている。



第23図 16号住居跡出土遺物

第15表 16号住居跡出土遺物観察表（第23図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・台付甕	21.6	24.7	10.3	⑥①④②	②	にぶい橙	9/10	外面煤、内面炭化物付着
2	土師器・台付甕	14.1	---	---	①④⑥③②	③	にぶい橙	台部欠	外面煤、内面炭化物付着
3	土師器・台付甕	13.4	---	---	⑥②③①	②	橙	上半2/3	外面一部煤、内面一部炭化物付着

B 堅穴状遺構

堅穴状遺構は、Ⅱ区に3基、Ⅲ区に1基、Ⅶ区に1基の計5基が検出されている。

堅穴住居跡と同様、方形を基本とした形態を呈するものの、床面が軟弱であり安定しないもの（1号～3号）、形態が不明瞭であり、床面も固く締まるものの安定しないもの（4号）床面が固く締まり安定するものの、形態が不明瞭なもの（5号）がある。

1号竖穴 II区・D - 24、E - 23・24グリッドに位置する。西辺の大部分を2号土坑によって削除（第24図）され、中央部はパイプラインの掘削溝によって削除されている。また西南部は南側未調査区に入っている。（第28図）

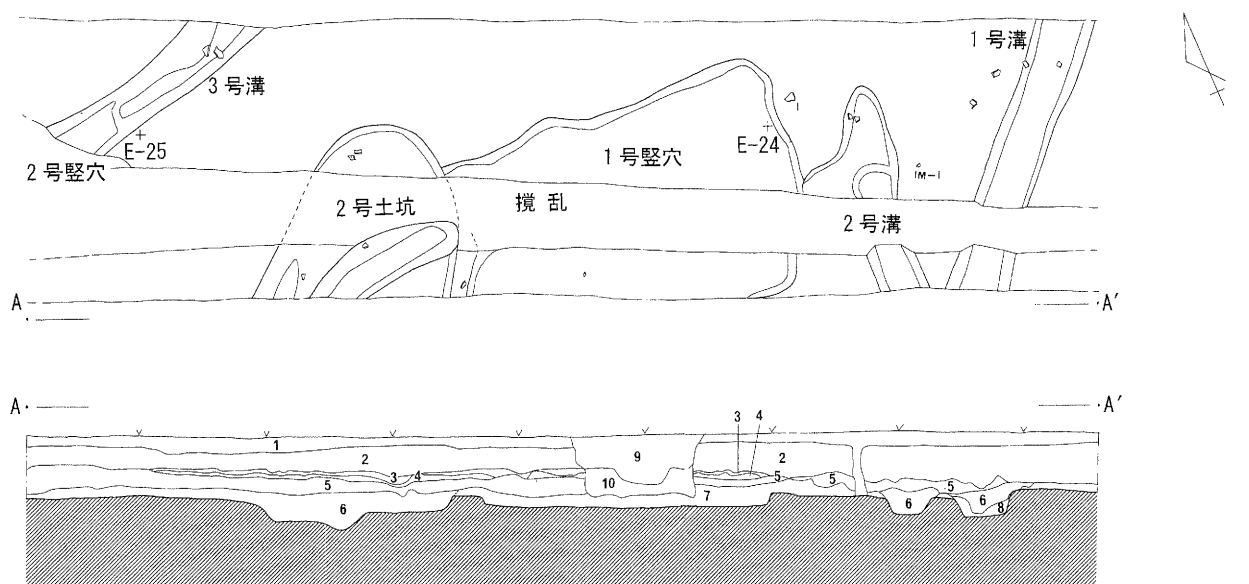
壁は、ほぼ直立するが、直線を成す部分が少ない。北辺（長軸）2.05 m、東辺（短軸）は1.85 mを計り、南辺と西辺は、現状でそれぞれ35 cm、55 cm 分が知れる。全体では、やや歪ではあるけれども、東西方向に長軸を持つ長方形を呈しているといえる。北辺の方位は、N-94°-Eを示す。

床面は、ほぼ水平であるが柔らかく、不安定である。柱穴等は検出されていない。

覆土は、軽石粒を含み、オリーブ灰色シルトブロックを帯状もしくはブロック状に含む灰色粘土（5層）が堆積するが、竖穴内の大部分には褐灰色シルト質粘土（7層）が堆積している。5層の上面には、軽石粒純層（4層）、さらには軽石粒を多量に含む灰色粘土層（3層）と続く。軽石粒純層は、ところによって5 cmの厚みをもつ。

遺物は、内黒の椀（1）が1点出土したのみである。

2号竖穴 II区・D - 25、E - 25グリッドに位置する。西隅を3号竖穴に、南半の大部分はパイプラインの掘削溝によって削除されている。また東隅から南隅にかけては、3号溝に削平されている。（第28図）壁は、ほぼ直立する部分と緩傾斜を示す部分がみられ、直線を成す部分が少ない。

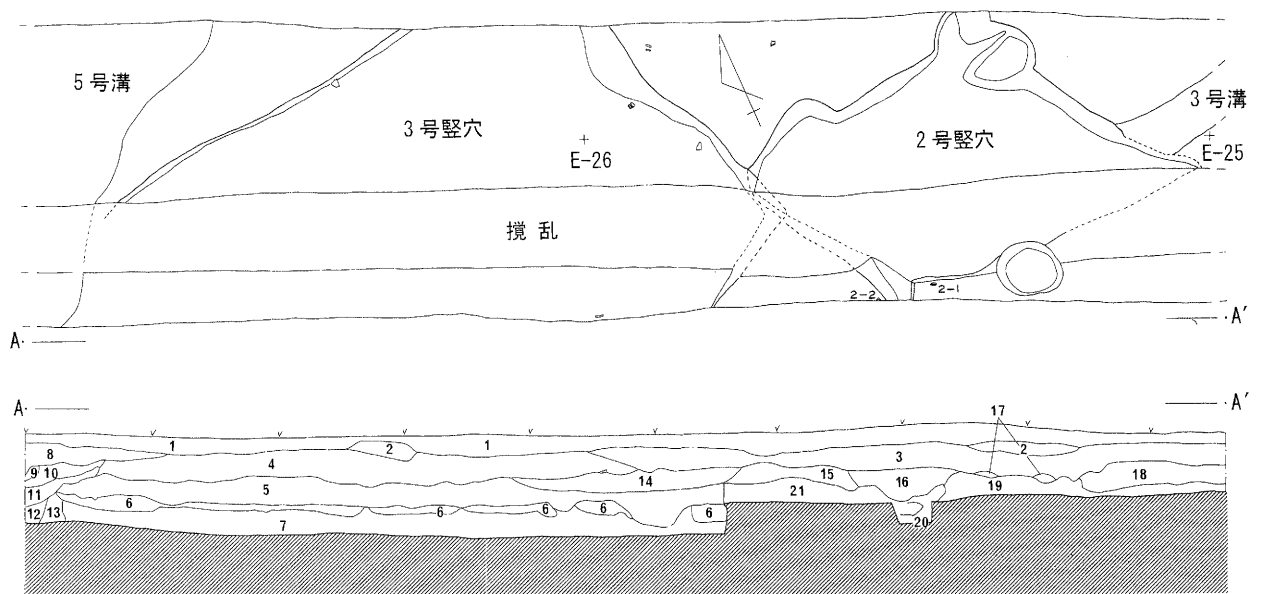


1号竖穴、2号土坑、1号・2号溝土層

- | | |
|--|---------|
| 1 表土、耕作土。 | 9 攪乱土 |
| 2 灰色（10Y 5/1）粘土層（シルト質）。 | 10 卵黄色砂 |
| 3 灰色（N 5/1）粘土層。軽石粒を多量に含む。 | |
| 4 火山灰純層。 | |
| 5 灰色（N 4/）粘土層。軽石粒を含む。オリーブ灰色（10Y 6/2）シルトブロックを、帯状もしくはブロック状に含む。 | |
| 6 暗灰色（N 3/）粘土層（シルト質）。上位に軽石小粒を含む。部分的に炭化物を霜降り状に含む。 | |
| 7 褐灰色（10YR 6/1）粘土層（シルト質）。 | |
| 8 オリーブ灰色（5GY 6/1）粘土層（シルト質）と第6層の混在層。 | |

0 L = 24.600m 2 m
1 : 60

第24図 1号竖穴、2号土坑、1号～3号溝



2号・3号縦穴土層

- | | |
|---|---|
| 1 表土、耕作土。 | 11 黄灰色 (2.5Y 6/1) シルト。炭化物粒を微量に含む。 |
| 2 暗青灰色 (10BG 4/1) 粘土。白色火山灰粒、小礫、酸化鉄、ビニールを含む。 | 12 暗青灰色 (10BG 3/1) 粘土及び青灰色 (10BG 5/1) 粘土の混在層。 |
| 3 青灰色 (10BG 5/1) 粘土。白色火山灰粒、酸化鉄粒、青黒色 (10BG 2/1) 粘土ブロックを含む。 | 13 青灰色 (10BG 5/1) 粘土。酸化鉄粒、青黒色 (10BG 2/1) 粘土ブロック、土師器片 (国分期) を含む。 |
| 4 3層と同様であるが、酸化鉄粒の含有が多い。 | 14 灰色 (N 4/) 粘土層。オリーブ灰色シルトブロックを含む。 |
| 5 灰白色 (5Y 7/1) 粘土層 (シルト質)。灰白色 (5Y 7/2) シルトを部分的に含む。 | 15 灰色 (10Y 7/1) シルト。炭化物を少量に含む。 |
| 6 灰白色 (10Y 7/1) 粘土層 (シルト質)。灰色 (N 5/) シルト土粒が点在する。 | 16 1 8層に近似するが軽石粒の含有が少ない。 |
| 7 灰色 (5Y 6/1) シルト。酸化鉄を全体的に、灰白色 (10Y 7/1) シルトを小ブロック状に含む。 | 17 火山灰純層。 |
| 8 灰色 (5Y 6/1) シルト。灰白色 (5Y 7/2) シルトを小ブロック状に、炭化物粒を微量に含む。 | 18 灰色 (N 4/) 粘土層。軽石粒を含む。オリーブ灰色 (10Y 6/2) シルトを、ブロック状に含む。 |
| 9 暗青灰色 (10BG 3/1) 粘土。青灰色 (10BG 5/1) 粘土ブロックを含む。 | 19 暗灰色 (N 3/) 粘土層 (シルト質)。上位に軽石小粒を含む。部分的に炭化物を霜降り状に含む。 |
| 10 灰オリーブ色 (7.5Y 6/2) シルト。全体的に浅黄色 (5Y 7/3) シルトを含み、酸化鉄を微量に含む。 | 20 1 6層と2 1層の混在層。 |
| | 21 褐灰色 (10YR 6/1) 粘土層 (シルト質)。 |

0 L=24.600m 2m
1 : 60

第25図 2号・3号縦穴

一応北辺2.50 m、西辺1.55 m、南辺2.20 m、東辺2.35 mを計り、変則的な菱形を呈する。北辺の方位はN-78°-Eを示す。東辺北端部と南辺中央南西隅寄りにはピットが穿たれている。前者は60×41cm、後者は53×43cmの規模で、共に長い円形を呈する。深さはそれぞれ18cm、23cmを計る。

床面は、ほぼ水平であるが柔らかく、不安定である。柱穴等は、検出されていない。

覆土は、上位に軽石小粒を含み、部分的に炭化物を霜降り状に含む暗灰色シルト質粘土である。縦穴の深さは15cm程である。東辺及び南辺に見られたピットも同一である。

遺物は、須恵器坏 (1・2) が出土し、いずれも底面周辺部回転篋削りが施されている。

3号縦穴

Ⅱ区・D・25・26、E・25・26グリッドに位置する。北東隅及び南半はそれぞれ未調査区に入っている。南西隅では2号縦穴を切断しているものの、北西隅は5号溝によって、また中央部はパイプラインの掘削溝によって切断されている。

壁は、ほぼ垂直であるが、一部崩落している部分もある。各辺の検出された長さは、北辺2.70 m、東辺2.00 m、南辺0.95 mである。その結果本縦穴は、短辺3.15 mの台形に近い

長方形を呈すると思われる。北辺の方位は、 $N-84^{\circ}-E$ を示す。

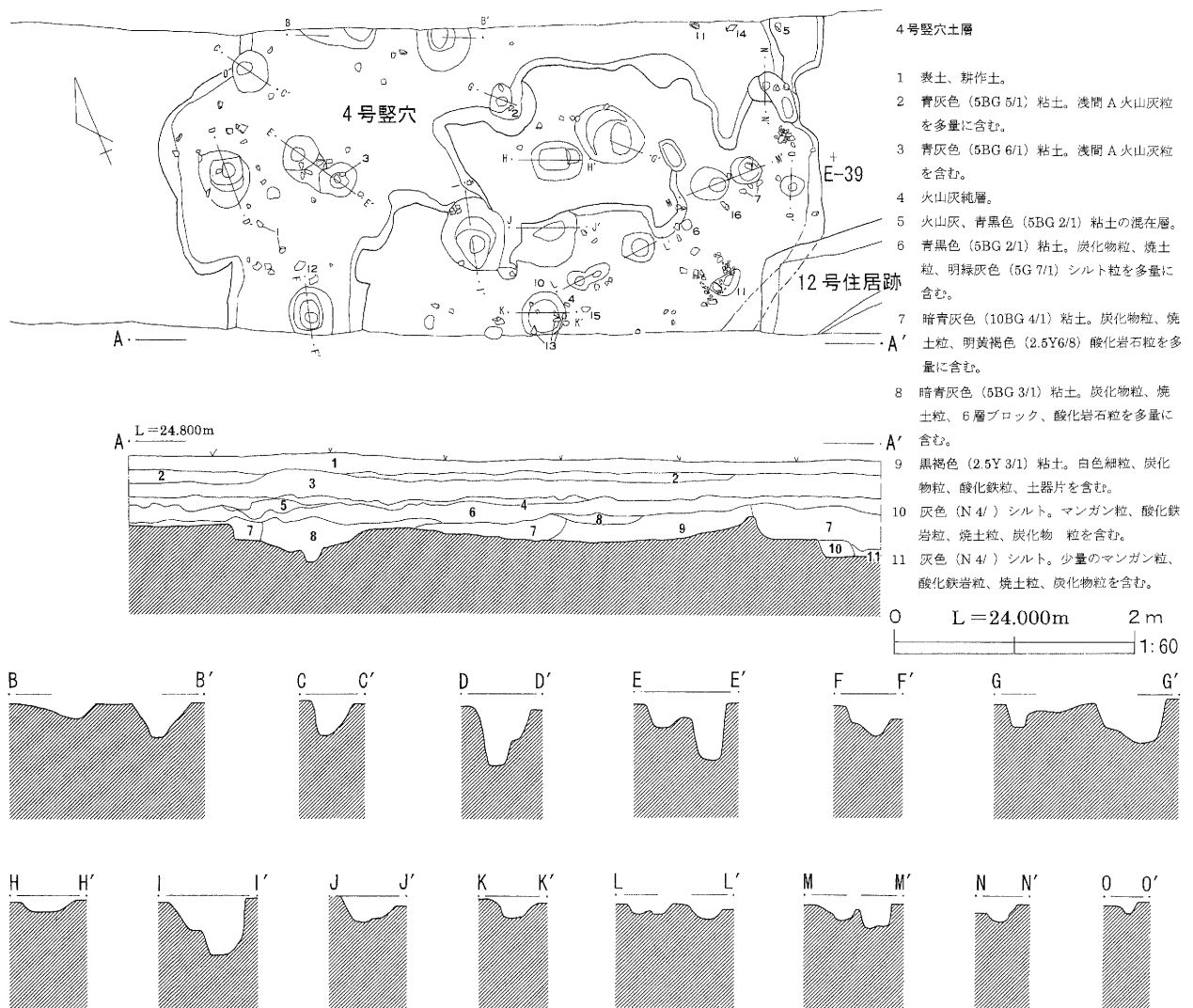
床面は、緩やかな凹凸をもち、不安定である。柱穴等は、検出されていない。

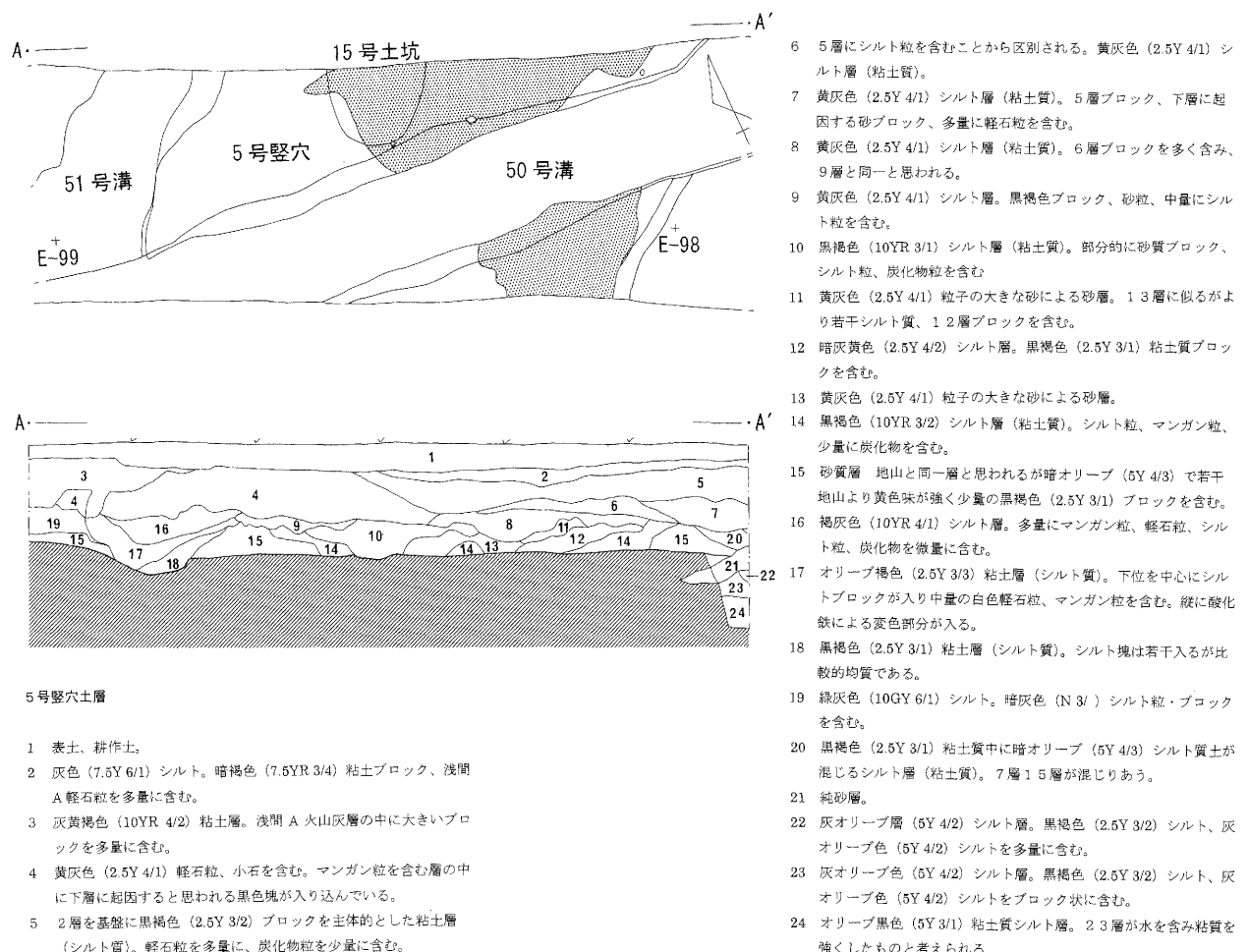
覆土は、灰白色シルトを小ブロック状に、酸化鉄を全面に含む灰色シルト（7層）であり、上位に灰白色シルト質粘土（6層）が堆積している。遺物は、検出されていない。

4号竖穴 II区・D - 39、E - 39グリッドに位置する。北側及び南側は、それぞれ未調査区に入っている。南東部は、12号住居跡によって切断されている。

（第28図） 壁は、緩傾斜をもつ部分が多い。辺は、直線を成すが、一直線とはならず、凹凸が激しい。しかしながら東西両辺は、概ね一定方向を示し、並行となる。間隔は、4.70 mから5.65 mを計る。方位は、 $N-25^{\circ}-E$ を示す。床面は安定せず、中央部が盛り上がり、周辺部が一段下がる。大小のピットが20穴穿たれ、径12～62cm、深さ8～54cmを計る。

覆土は、炭化物粒・焼土粒・明黄褐色酸化岩石粒を含む暗青灰色粘土（7層）、7層と同一構成で、青黒色粘土ブロックを含む暗青灰色粘土（8層）、白色細粒・炭化物粒・酸化鉄粒を含む黒褐色粘土（9層）が同位で堆積している。





第27図 5号竖穴

遺物は、覆土中より満遍なく出土しており、須恵器蓋 (1)、須恵器坏 (2～5)、須恵器高台椀 (6・7)、須恵器皿 (8)、須恵器壺 (9)、土師器坏 (10)、土師器甕 (11～16) 等の器種がみられる。

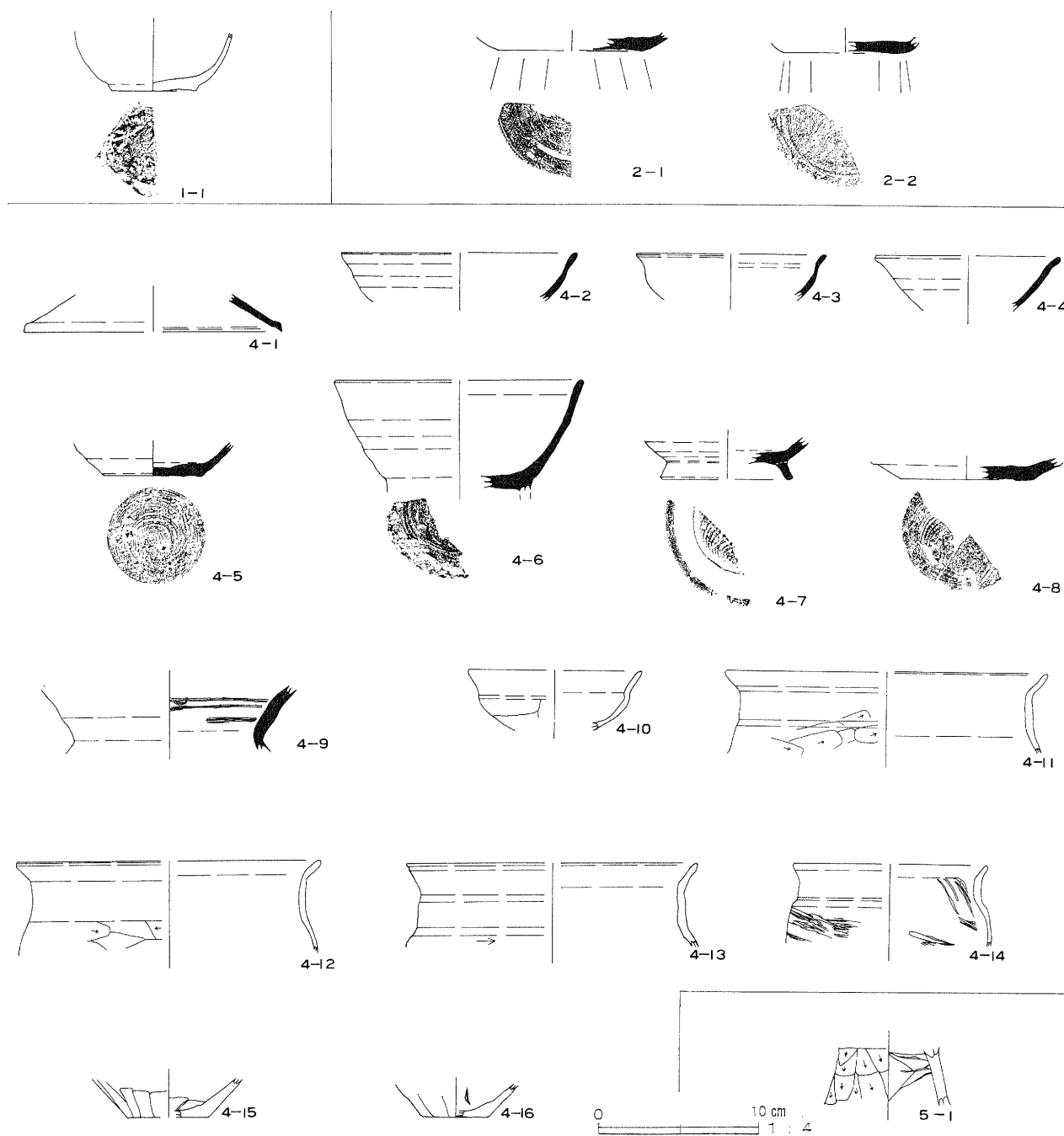
5号竖穴 VII区・D - 97・98、E - 98 グリッドに位置する。中央部は東西にわたって50号溝によって、北西辺の一部は51号溝によってそれぞれ切断されている。また上面は15号土坑によって削平され、南北両側は未調査区に入っている。

壁は、南東辺の一部及び北西辺の一部しか確認できないが、ほぼ垂直であり、両辺間は4.00mを計る。南東辺の方位はN - 53° - Eを示す。

床面は、固く締まり、安定している。柱穴・炉等は検出されていないが、住居跡である可能性が高い。東半部床面直上には、炭化物が広がる。

覆土は、壁際に黒褐色粘土ブロックを含む暗オリーブ砂 (15層)、中央部に向けて、マンガン粒・炭化物粒を含む黒褐色シルト (14層)、黒褐色粘土ブロックを含む暗灰黄色シルト (12層)、黄灰色砂 (13層) が堆積している。

遺物は、床面上から台付甕台部 (1) が出土している。



第28図 竪穴出土遺物

第16表 1号竪穴出土遺物観察表 (第28図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	内黒・碗	—	—	(5.3)	④②③①	②	橙	下位1/5	底部外面吸炭

第17表 2号竪穴出土遺物観察表 (第28図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	—	—	(8.8)	①⑤⑥	①	青灰	底部1/4	
2	須恵器・坏	—	—	(7.3)	⑤②	②	灰白	底部1/4	

第18表 4号竪穴出土遺物観察表 (第28図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・蓋	(16.0)	—	—	②①	①	黄灰	下位1/7	
2	須恵器・坏	(14.7)	—	—	②⑥④①	②	灰	口縁部1/6	
3	須恵器・坏	(11.8)	—	—	①④⑥	②	灰	口縁部1/8	口辺部吸炭
4	須恵器・坏	(11.6)	—	—	①②④⑥	②	黄灰	口縁部1/6	
5	須恵器・坏	—	—	6.0	①②⑥	②	灰	1/2	
6	須恵器・高台椀	(15.6)	—	—	①②⑥	③	灰白	1/4	
7	須恵器・高台椀	—	—	(8.2)	②⑥	②	灰	高台部1/3	
8	須恵器・皿	—	—	(7.8)	⑥①	②	黄灰	底部1/2	
9	須恵器・壺	—	—	—	①②⑥	②	灰	頸部1/6	
10	土師器・坏	(10.8)	—	—	②	③	橙	口縁部1/8	
11	土師器・甕	(19.8)	—	—	①②④	②	赤褐	口縁部1/3	一部吸炭
12	土師器・甕	(19.0)	—	—	①②③④⑥	②	橙	口縁部1/8	外面一部煤付着
13	土師器・甕	(18.0)	—	—	③②①④	②	明赤褐	口縁部1/4	
14	土師器・甕	(12.0)	—	—	①②③④⑤	②	赤褐	上位1/8	外面煤、内面炭化物付着
15	土師器・甕	—	—	(5.0)	①②③④⑥	②	橙	底部1/2	
16	土師器・甕	—	—	(4.2)	②①③⑥	③	橙	底部1/2	底部外面吸炭

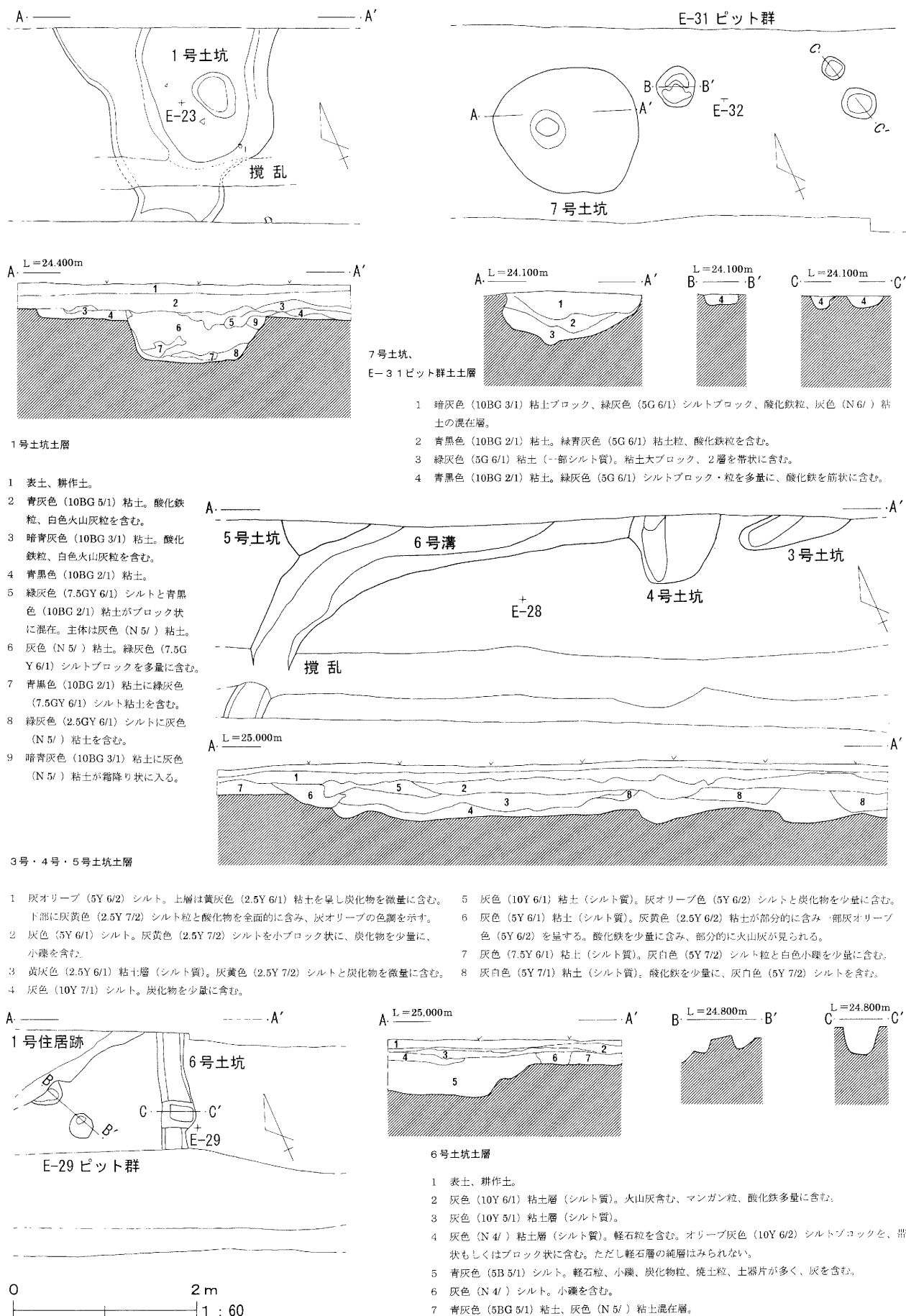
第19表 5号竪穴出土遺物観察表 (第28図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師器・台付甕	—	—	—	①③④⑥	②	橙	台上部1/4	二次加熱

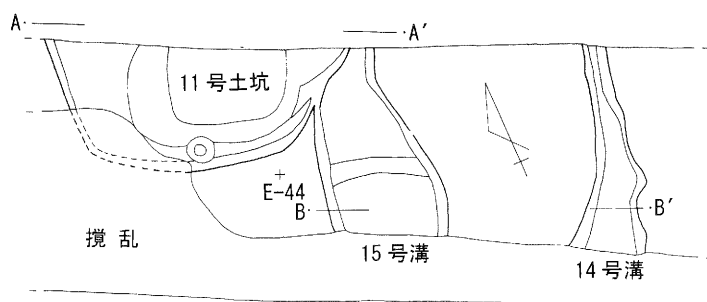
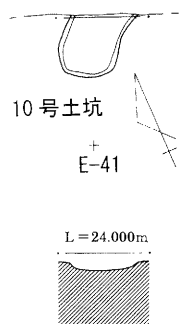
C 土坑 土坑は、Ⅱ区に7基（1号～7号）、Ⅲ区に5基（8号～12号）、Ⅵ区に2基（13号・14号）、Ⅶ区に1基（15号）、Ⅷ区に1基（16号）、計16基が検出されている。

(単位m)

土坑名 挿図No.	調査区	グリッド	形 態 段 数	長 径 短 径	深さ最深 中段 上段	特 記 事 項
1号土坑 第29図	Ⅱ 区	D-22・23 E-22・23	長円形 三段	1.80+ 1.80	0.90 0.52 0.12	上段は土坑周囲全体に存在し、青黒色粘土が堆積している。全体に投入土の様相を呈している。遺物は、須恵器蓋・坏が出土している。
2号土坑 第24図	Ⅱ 区	E-24	長円形 二段	1.70+ 1.29	0.39 0.24	1号竪穴を切断している。覆土に軽石粒を含む。
3号土坑 第29図	Ⅱ 区	D-27	長円形	1.05+ 0.36	0.11	6号溝・4号土坑と同一の覆土であり、一体化する可能性が高い。
4号土坑 第29図	Ⅱ 区	D-27	長円形	0.75+ 0.96	0.16	3号土坑と同様、6号溝と一体化する可能性が高い。
5号土坑 第29図	Ⅱ 区	D-28	不明	0.98+ 0.96	0.25	6号溝覆土中に構築されている。
6号土坑 第29図	Ⅱ 区	D-29 E-29	溝状	1.32+ 0.38	0.14	E-29ピット群に切断されている。
7号土坑 第29図	Ⅱ 区	E-32	円形	1.60 1.39	0.59	最深部が西寄りに位置し、西壁はほぼ垂直となる。覆土は投入土。

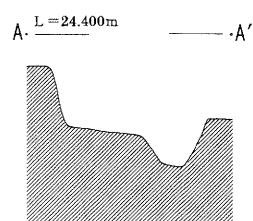
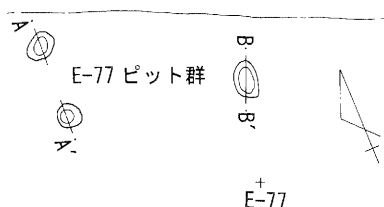
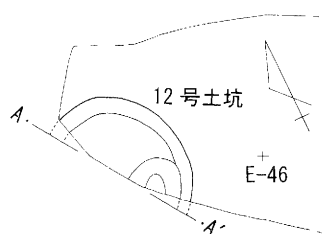
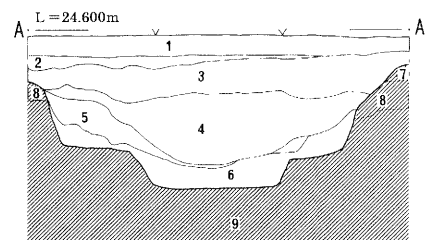


第29図 土坑① 1号・3号～7号土坑、E-29・31ピット群、6号溝



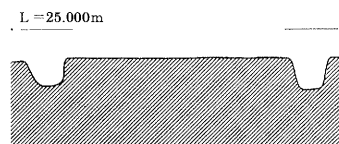
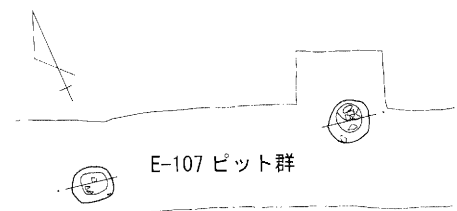
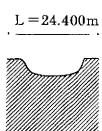
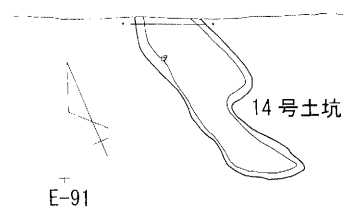
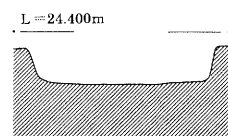
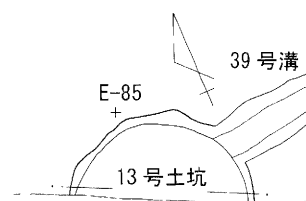
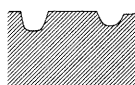
11号土坑土層

- 1 表土、耕作土。
- 2 青灰色 (10BG 5/1) 粘土。酸化鉄粒、白色火山灰粒を含む。
- 3 暗青灰色 (10BG 3/1) 粘土。酸化鉄粒、白色火山灰粒を含む。
- 4 灰色 (N 5/) 粘土。緑灰色 (7.5GY 6/1) シルトブロックを多量に含む。
- 5 青黒色 (10BG 2/1) 粘土に緑灰色 (7.5GY 6/1) シルト粘土を含む。
- 6 緑灰色 (2.5GY 6/1) シルトに灰色 (N 5/) 粘土を含む。
- 7 暗灰色 (N 3/) 粘土層 (シルト質)。上位に軽石小粒を含む。部分的に炭化物をしもふり状に含む。
- 8 褐灰色 (10YR 6/1) 粘土層 (シルト質)。
- 9 緑灰色 (10GY 6/1) 砂質土。



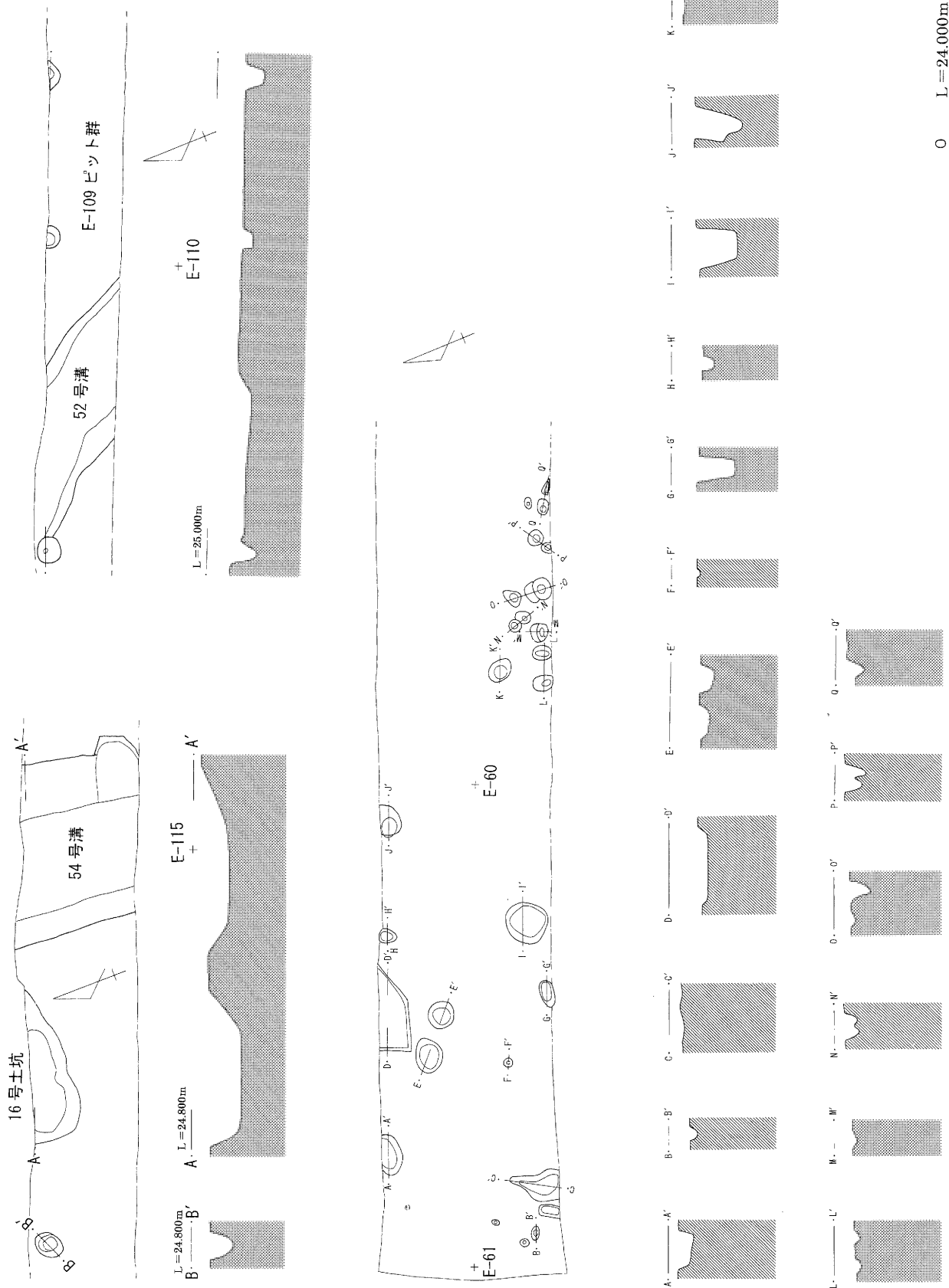
A L=25.000m A'

L=25.000m B B'

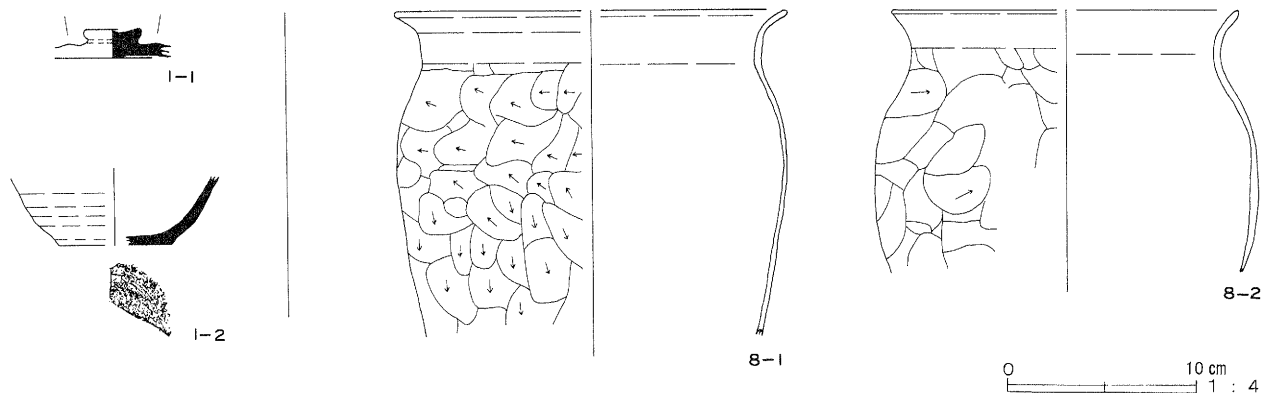


0 2 m 1 : 60

第30図 土坑② 10号~14号土坑、E-77・108ピット群、14号・15号・39号溝



第31図 土坑③ 16号土坑、E-59・109ピット群、52号・54号溝



第32図 土坑出土遺物

第20表 1号土坑出土遺物観察表（第32図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・蓋	—	—	—	①④	②	灰	つまみのみ	
2	須恵器・坏	—	—	(5.8)	①③⑥②④	③	暗青灰	下位1/4	底部橙色

第21表 8号土坑出土遺物観察表（第32図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	土師器・甕	(20.4)	—	—	②③④①⑥	②	にぶい赤褐	上半1/4	外面煤、内面炭化物付着
2	土師器・甕	(18.0)	—	—	②④①③	②	橙	上位1/8	内面一部炭化物付着

(単位m)

土坑名 挿図No.	調査区	グリッド	形 態 段 数	長 径 短 径	深さ最深 中段 上段	特 記 事 項
8号土坑 第13図	Ⅲ 区	D-35 E-35	長方形	2.51+ 1.02	0.25	7号住居跡の2次覆土が、本址上面にも堆積している。遺物は、土師器甕が2個体出土している。
9号土坑 第15図	Ⅲ 区	E-37	長円形	1.11+ 0.63	0.23	覆土は、9号住居跡と同一構成であるが、僅かにマンガン粒が多い。
10号土坑 第30図	Ⅲ 区	D-40、41	長円形	0.62+ 0.48	0.07	青黒色シルトを覆土とする。
11号土坑 第30図	Ⅲ 区	D-43、44	方円形 二段	上2.44 下1.39	0.96 0.56	15号溝を切断している。
12号土坑 第30図	Ⅲ 区	D-46 E-46	円形 二段	上1.28 下0.44	0.72 0.48	覆土は、11号土坑第4層・緑灰色シルトブロックを含む青黒色粘土と同一。
13号土坑 第30図	Ⅵ 区	E-84、85	円形	1.49	0.29	39号溝を切断している。
14号土坑 第30図	Ⅵ 区	D-90	不整形	1.84+ 0.53	0.12	青黒色シルトを覆土とする。
15号土坑 第42図	Ⅶ 区	D-98	長円形	0.62+ 0.78	0.26	5号竪穴覆土中より構築。
16号土坑 第31図	Ⅶ 区	D-115	長方形	1.46 0.64+	0.32	覆土は、軽石粒を多量に含む暗灰色粘土。



第33図 ピット群出土遺物

第22表 E-108Pit群No.1ピット出土遺物観察表 (第33図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・高台碗	(12.4)	5.2	(5.6)	①②⑥	③	灰白	1/6	一部にぶい橙色。表面磨滅
2	土師器・甕	(22.0)	—	—	①②③④⑥	②	にぶい橙	口縁部1/5	外面煤、内面炭化物付着
3	土師器・甕	—	—	(5.1)	①⑥	③	明赤褐	底部1/4	外面煤付着

土坑の他、ピットの集中する地点が10箇所みられる。しかしピットは、いくらか列を成す例もみられるが、群を成すものの遺構を構成するとは認めがたいものが多く、その名称は、近在するEラインのグリッド名を用いた。

E-29 (第29図) II区D・E-29グリッド、3穴。径24～38cm、深さ12～29cm。1号住居跡及び6号土坑を切断している。覆土は、オリーブ灰色シルトブロック・軽石粒を含む灰色シルト質粘土。

E-31 (第29図) D-31・32、E-31グリッド、3穴。径24～42cm、深さ13～14cm。覆土は、緑灰色シルトブロック・粒、酸化鉄を筋状に含む青黒色粘土である。

E-35 (第13図) II区D-35、E-35グリッド、7穴。径18～51cm、深さ7～37cm。覆土は、多量の小礫、軽石粒、酸化鉄を含む青灰色粘土であり、8号土坑と共通する。

E-59 (第31図) IV区E-59・60、D-60グリッド、28穴。59グリッドに位置する14穴は、径11～23cm、深さ5～24cmと小さく浅いものが多い。60グリッドに位置する14穴は、半数が径26～43cm、深さ15～49cmと大きくて深いピットがみられる。しかし半数は、59グリッドにみられるピットと同様である。深いピットは、N-59°-Eの方位をもって配される。

E-77 (第30図) VI区D-77グリッド、3穴。径18～29cm、深さ9～21cm。覆土は、軽石粒を含む灰色シルト質粘土である。

E-87 (第39図) VI区D-86・87、E-87グリッド、3穴。径19～41cm、深さ29～31cm。覆土は、軽石粒を含む青灰色シルトである。

E-88 (第40図) VI区D-88グリッド、4穴。径16～38cm、深さ15～40cm。覆土は灰色シルトである。

E-94 (第41図) VII区D-94、E-95グリッド、5穴。径21～36cm、深さ16～32cm。覆土は、マンガン粒を多量に含む暗灰黄色シルトである。

E-108 (第30図・33図) VIII区D-107・108グリッド、2穴。東側ピットは、径34cm、深さ27cm。須恵器高台碗(1)、土師器甕(2・3)が出土している。西側ピットは、径34cm、深さ22cm。土師器甕の破片が出土している。両ピット芯々間は、2.05mを測り、方位はN-100°-Eを示す。覆土は共に、焼土粒を多量に含む青黒色シルト質粘土である。

E-109 (第31図) VIII区D-108・109グリッド、3穴。径24～29cm、深さ11～26cm。3穴は、ほぼ一直線上に配置され、芯々間は、東側1.80m、西側3.40mを計る。西側ピットは、52号溝に切断されている。このことから、同溝内に、ほぼ一定間隔に位置する1ピットが存在した可能性を残す。ラインの方位は、N-68°-Wを示す。覆土は青黒色シルトである。

D 溝跡 溝は、Ⅱ区6条（1号～6号溝）、Ⅲ区10条（7号～16号溝）、Ⅳ区12条（17号～28号溝）、Ⅴ区9条（29号～37号溝）、Ⅵ区11条（38号～48号溝）、Ⅶ区3条（49号～51号溝）、Ⅷ区5条（52号～56号溝）と、Ⅰ区を除いてほぼ全域から56条が検出されている。

1号・2号溝（第24図・44図） D・E - 23グリッド。1号溝は幅49cm、深さ19cm、2号溝は幅36cm、深さ16cmを計り、方位はそれぞれN-30°-E、N-1°-Wを示す。ともに底面は水平で、上位に軽石小粒を含む暗灰色シルト質粘土を覆土としている。1号溝から、須恵器蓋（1）が出土している。

3号溝（第24図） D - 24・25、E - 25グリッド。2号竪穴の上面を削平している。幅40cm、深さ8cmを計る。方位はN-75°-Eを示す。覆土は、軽石粒を含む灰褐色粘土である。

4号・5号溝（第34図・44図） D・E - 27グリッド。4号溝は、最大幅62cm、深さ38cm、5号溝は、最大幅79cm、深さ32cmを計り、ともに北側に脹らみをもって湾曲しているため方位は計測できない。4号溝は、暗青色粘土を覆土とし、5号溝は4号溝の上面を削平している。4号溝からは、須恵器蓋（1）
坏（2）が出土している。

6号溝（第29図・44図） D - 27・28、E - 28グリッド。最大幅63cm、深さ35cmを計り、北側に脹らみをもって湾曲する。覆土は、青黒色粘土であり、底面周辺部に回転篋削りを持つ須恵器坏（1・2）、土師器坏（3・4）が出土している。

7号溝（第34図） D・E - 35グリッド。8号土坑・E - 35ピット群の上面を削平している。幅48cm、深さ24cmを計り、方位はN-20°-Eを示す。覆土は、浅間A軽石粒を含む。

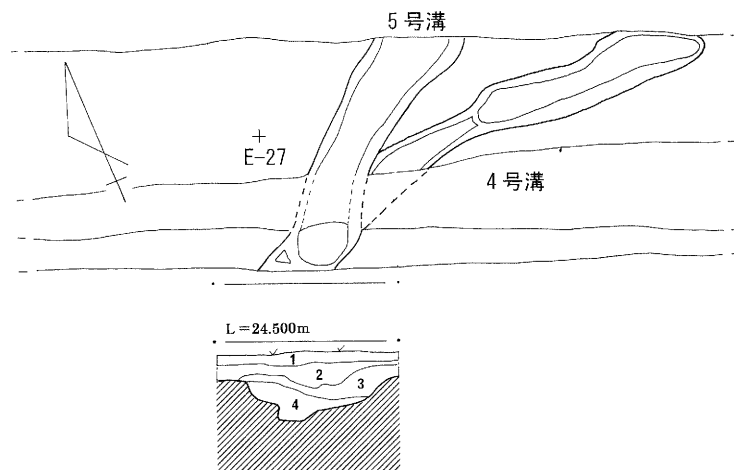
8号溝（第34図） D・E - 36グリッド。幅1.24mの中に幅40cm前後の分離帯を挟んで、やはり幅40cm前後の2条の溝が並行している。東側は深さ34cm、西側は深さ30cmを計る。断面は、逆台形を呈す。酸化した底は平坦面を成し、南から北へ僅かに傾斜をもつ。2条の溝の上端は、それぞれ平坦面をもって外側に張り出す。溝を挟んだ平坦面の全体幅は、3.42mを計る。方位はN-22°-Eを示す。覆土は、暗青灰色粘土である。

9号～13号溝（第34図） D・E - 41・42グリッド。幅28～32cm、深さ12cm前後を計る。共にやや曲線を成すが、北を中心に東西に10°振れた範囲に納まる。覆土も共通し、灰色シルト質粘土が堆積している。この中で12号溝は、幅が4mに及び、底面も平坦であり、溝の状況を呈さないが、覆土が共通するため、この中に含めた。

14号・15号溝（第30図） D・E - 43グリッド。幅20～95cmと定まらないが、深さ19～21cmで安定する。やや蛇行するものの、方位は概ねN-10°-Eを示す。覆土は、9号～13号溝と同一の、灰色シルト質粘土である。15号溝は、11号土坑に切断されている。

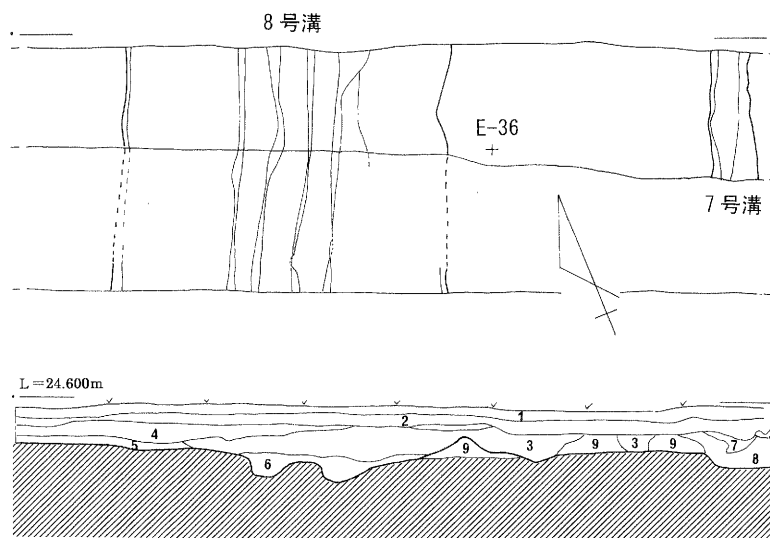
16号溝（第35図） D・E - 44・45グリッド。断面はU字形を呈し、底は凹凸が激しい。幅2.12m、深さ52cmを計る。強く蛇行し、全体ではほぼ東西行する。覆土は、全面に砂粒・浅間A火山灰粒が多量に含まれ、底面付近は、強く酸化している。南側の立ち上がり部に幅8cm、長さ1.16m以上の木杭が60cm間隔で打ち込まれている。

17号・18号溝（第35図） 17号溝はD・E - 49、18号溝はD・E - 52グリッド。17号溝は、断面緩いU字形を呈し、幅56cm、深さ24cmを計る。方位はN-70°-Eを示す。南側の一部は、段を成して1mほどの広がりをもつ。18号溝も、断面緩いU字型を呈し、幅38cm、深さ12cmを計る。方位はN-22°-Wを示す。両溝はほぼ直交し、覆土も、僅かに軽石粒を含む暗灰色シルト質粘土で共通する。



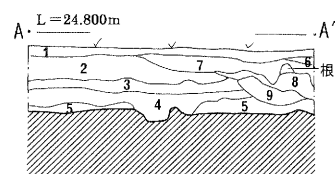
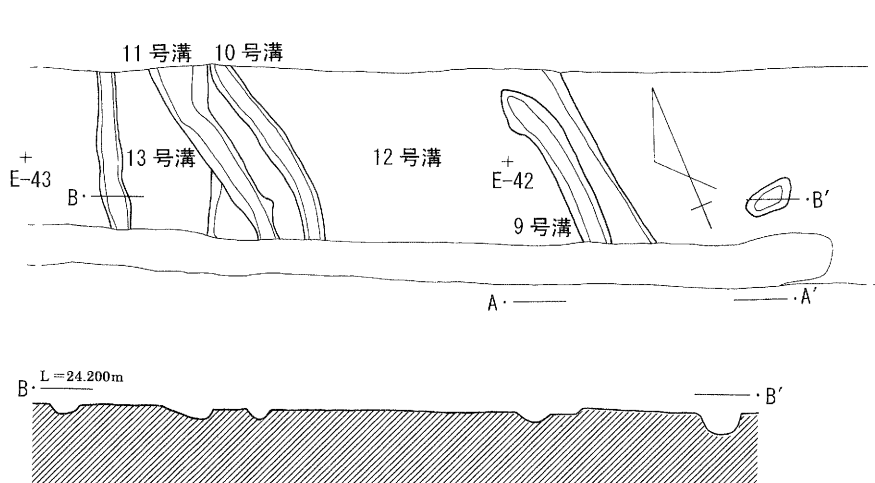
4号・5号溝土層

- 1 表土、耕作土。
- 2 青灰色 (10BG 5/1) 粘土。白色火山灰粒、酸化鉄粒、青黑色 (10BG 2/1) 粘土ブロックを含む。
- 3 青灰色 (10BG 5/1) 粘土。酸化鉄粒、青黑色 (10BG 2/1) 粘土ブロック、土師器片 (国分期) を含む。
- 4 暗青灰色 (10BG 3/1) 粘土。青灰色 (10BG 5/1) 粘土ブロックを含む。



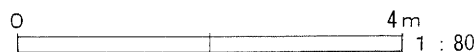
7号・8号溝土層

- 1 表土、耕作土。
- 2 青灰色 (5BG 6/1) 粘土。酸化鉄、浅間 A 火山灰粒を含む。
- 3 暗青灰色 (5BG 3/1) 粘土。炭化材粒、浅間 A 火山灰粒、焼土粒を含む。
- 4 2層と同様であるが、酸化鉄をほとんど含まず密である。
- 5 暗青灰色 (5BG 4/1) 粘土。炭化材粒、焼土粒、白色粘土粒を多く含む。
- 6 3層と同様であるが軽石粒をほとんど含まない。
- 7 黄灰色 (5BG 5/1) 粘土。多量の小礫、浅間 A 火山灰粒、酸化鉄を含む。
- 8 暗緑灰色 (7.5GY 4/1) シルト。小礫を多量に含む。
- 9 灰色 (N 5/) 粘土。軽石粒、炭化物粒を含む。

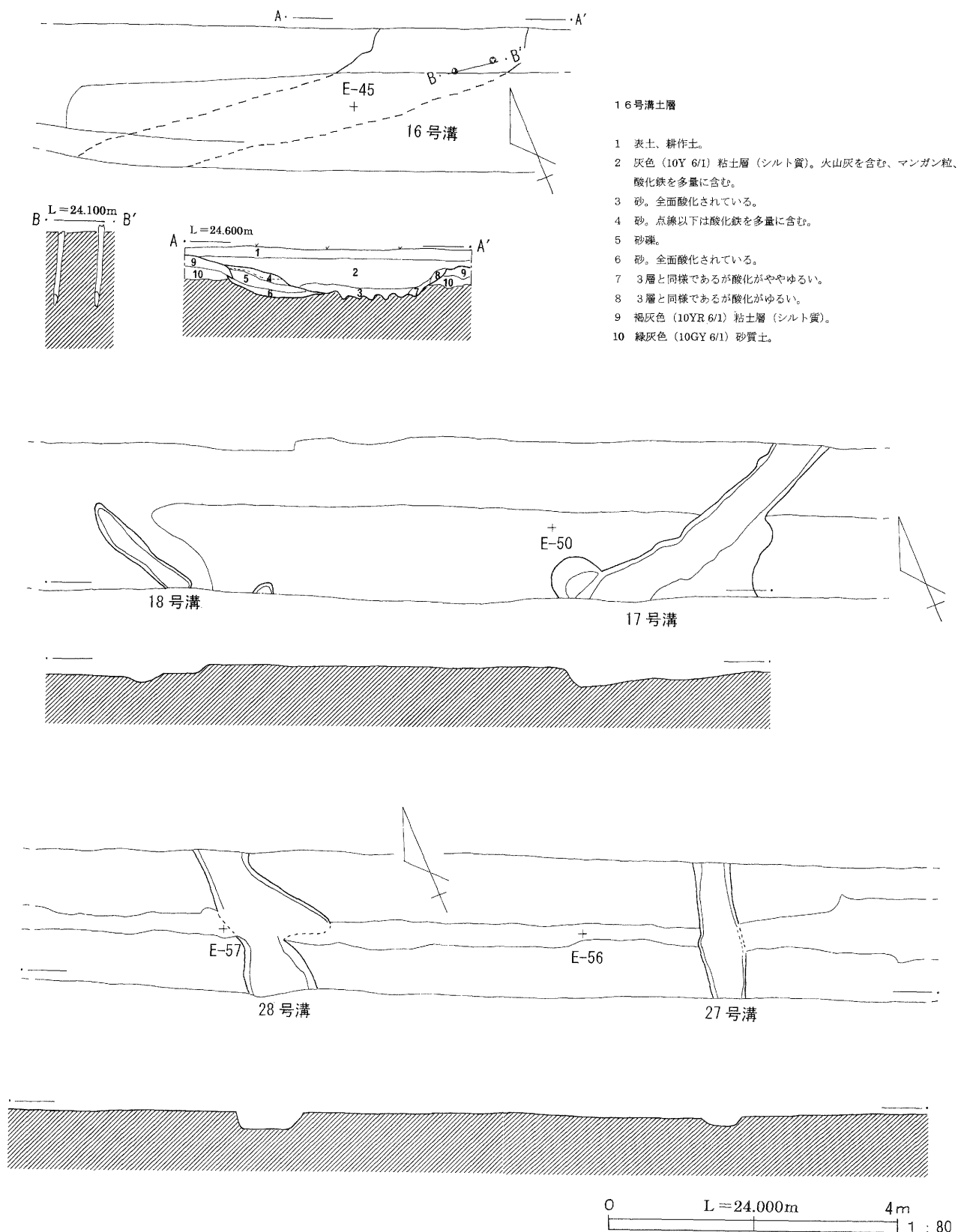


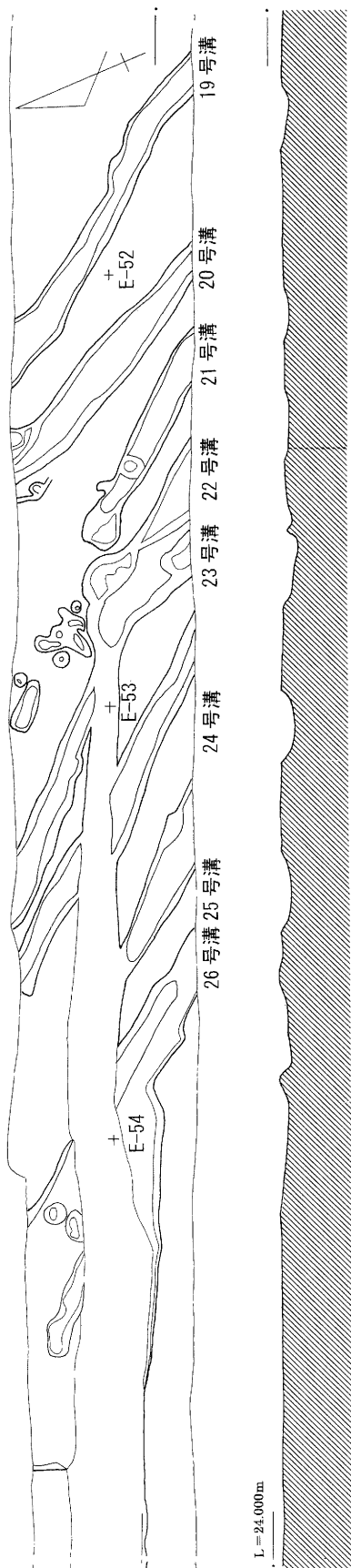
9号・12号溝土層

- 1 表土、耕作土
- 2 灰色 (10Y 6/1) 粘土層 (シルト質)。火山灰含む、マンガン粒、酸化鉄を多量に含む。
- 3 褐灰色 (10YR 6/1) 粘土層 (シルト質)。
- 4 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土層 (シルト質)。
- 5 緑灰色 (10GY 6/1) 砂質土。
- 6 灰色 (10Y 5/1) 粘土層 (シルト質)。
- 7 灰色 (10Y 5/1) 粘土層。軽石粒を多量に含む。
- 8 暗灰色 (N 3/) 粘土層 (シルト質)。上位に軽石小粒を含む。部分的に炭化物をしもふり状に含む。
- 9 3層、4層の混在層。

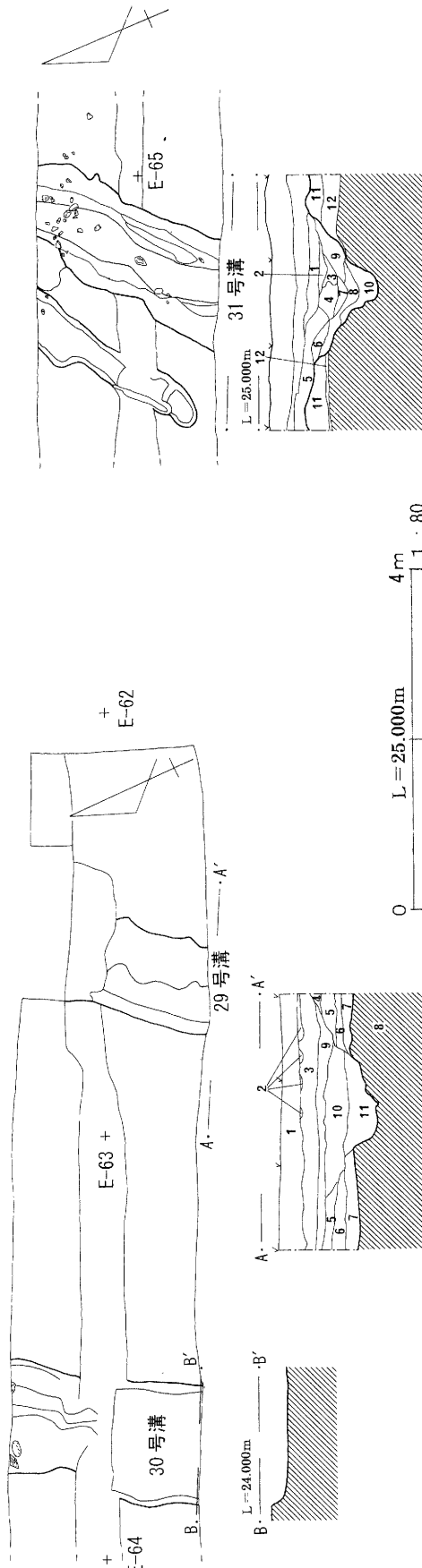


第34図 溝① 4号・5号・7号～13号溝





第36図 溝③ 19号～26号・29号～31号溝



29号溝土層

- 1 表土、耕作土。
- 2 浅間 A 軽石層。
- 3 青灰色 (5BG 6/I) 粘土層。浅間 A 軽石粒を含む。
- 4 暗青灰色 (5BG 3/I) 粘土層。オリープ褐色軽石粒を含む。
- 5 暗青灰色 (10BG 4/I) 粘土層。暗青灰色 (5BG 3/I) 粘土ブロックを含む。
- 6 緑灰色 (5G 6/I) 粘土層。暗青灰色 (5BG 3/I) 粘土粒を含む。
- 7 暗青灰色 (10BG 3/I) 粘土層。6 層をブロック状に含む。
- 8 オリープ灰色 (5GY 6/I) シルト層。
- 9 暗青灰色 (5BG 3/I) 粘土層。オリープ褐色軽石粒、暗青灰色 (5BG 3/I) 粘土ブロックを含む。
- 10 9 層とほぼ同一であるが、含有物が少なく粘性が強い。
- 11 暗青灰色 (5BG 4/I) 粘土層。炭化物を含む。

31号溝土層

- 1 黄灰色 (25Y 6/I) シルト。炭化物粒を多く含む。
- 2 灰色 (5Y 4/I) シルト。炭化物を多量、灰オリープ色 (5Y 5/2) シルトをレンズ状に含む。
- 3 暗オリープ灰色 (5GY 4/I) シルト。灰オリープ色 (5Y 5/2) シルトが 2 mm 大のブロックとして混入し、火山灰を多量に含む。
- 4 黄灰色 (25Y 4/I) シルト。浅黄色 (5Y 7/3) シルトをブロック状に、火山灰の細粒を少量に含む。
- 5 暗オリープ灰色 (25Y 4/I) シルト。酸化鉄、白色砂粒を微量に含む。
- 6 黄灰色 (25Y 4/I) 粘土層 (シルト質)。暗灰色 (25Y 5/2) 砂を層状に含む。
- 7 暗灰色 (25Y 4/2) シルト。灰黄色 (25Y 7/2) シルト、暗灰色 (25Y 5/2) 砂の混在層。炭化物を微量に含む。

- 8 黄灰色 (25Y 5/I) シルト。炭化物を微量に含む。
- 9 暗緑灰色 (5G 3/I) 粘土。白色粒、炭化物粒、酸化鉄を微量に含む。
- 10 灰色 (N 4/) 粘土。砂粒、酸化鉄を微量に含む。
- 11 灰色 (5Y 4/I) シルト。オリープ褐色の火山灰粒を含む。
- 12 灰色 (5Y 4/I) 粘土。暗青灰色 (5BG 3/I) 粘土ブロックを含む。

19号～26号溝（第36図） D・E - 51～54グリッド。断面は緩いU字形を呈し、幅34～68cm、深さ4～11cmを計る。方位はN－30～40°－Wに集中する。覆土は、僅かに軽石粒を含む暗灰色シルト質粘土で共通する。

27号・28号溝（第35図） 27号溝はD・E - 55、28号溝はD・E - 56グリッド。27号溝は、断面逆台形を呈し、幅61cm、深さ12cmを計る。方位はN－10°－Eを示す。28号溝も、断面逆台形を呈し、幅60～92cm、深さ22cmを計る。方位はN－0°－Eを示す。覆土は、灰色シルト質粘土で共通する。

29号溝（第36図） D・E - 62グリッド。断面は緩いV字型を呈し、上端幅2.02 m、深さ68cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN－40°－Eを示す。覆土は、炭化物粒を多く含む暗灰色粘土である。

30号溝（第36図） D・E - 63グリッド。断面は緩いU字型を呈し、上端幅1.52 m、深さ18cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN－38°－Eを示す。覆土は、暗灰色粘土である。

31号溝（第36図） D・E - 65グリッド。断面はV字形を呈し、幅1.22 m、深さ86cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN－40°－Eを示す。覆土は、シルト質のものが多く、炭化物粒も多く含まれる。また、上・中位層に軽石粒、砂を含み、下位層に酸化鉄が多く含まれる。さらに上位層には、拳大の礫が集中して含まれる部分もみられた。

32号溝（第37図・44図） E - 62～69グリッド。断面はU字形を呈し、最大幅66cm、深さ16cmを計る。直線を成し、長さは14.30 mを計る。方位はN－65°－Wを示す。覆土は、浅間A軽石粒を含む灰褐色粘土である。33号及び34号を切断している。遺物は、陶器椀（1）、天目椀（2）が出土している。

33号溝（第37図） D・E - 68グリッド。断面は逆台形を呈し、段を成す。上段幅76cm、段部幅40cm全体の深さ36cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN－0°－Eを示す。覆土は、粘性の強いオリーブ黒色粘土である。32号溝に切断されている。

34号溝（第37図） E - 68～70、D - 70～72グリッド。断面は逆台形を呈し、最大幅52cm、深さ24cmを計る。西側は37号溝によって切断され、それ以上は延伸していない。全体でほぼ直線を成し、方位はN－30°－Wを示す。覆土は、黄灰色粘土（9層）及びオリーブ黒色粘土（12層）を中心に堆積し、上位に軽石の純層がみられる。

35号溝（第37図） D・E - 69～70グリッド。近代の溝であり、34号溝を切断している。

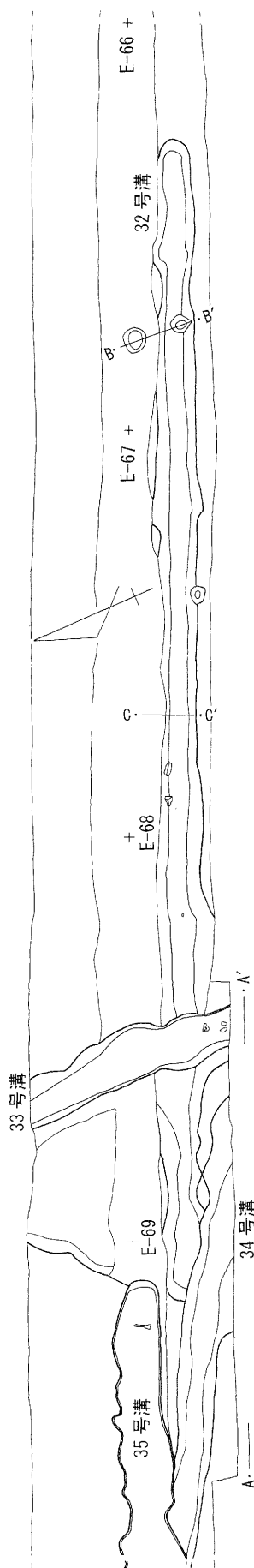
36号溝（第37図） D・E - 70グリッド。断面は、逆台形の崩れたU字形を呈し、幅1.68 m、深さ32cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN－10°－Wを示す。覆土は、黄灰色シルト、暗オリーブ褐色シルト質粘土であり、38号溝と共通する。34号溝との前後関係は、不明である。

37号溝（第37図） D・E - 72グリッド。断面は、逆台形を呈し、幅72cm、深さ52cmを計る。直線を成し、方位はN－80°－Eを示す。覆土は、粘性の強いオリーブ黒色粘土であり、33号溝と共通する。

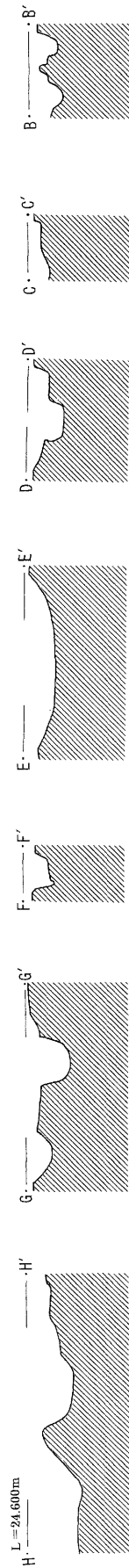
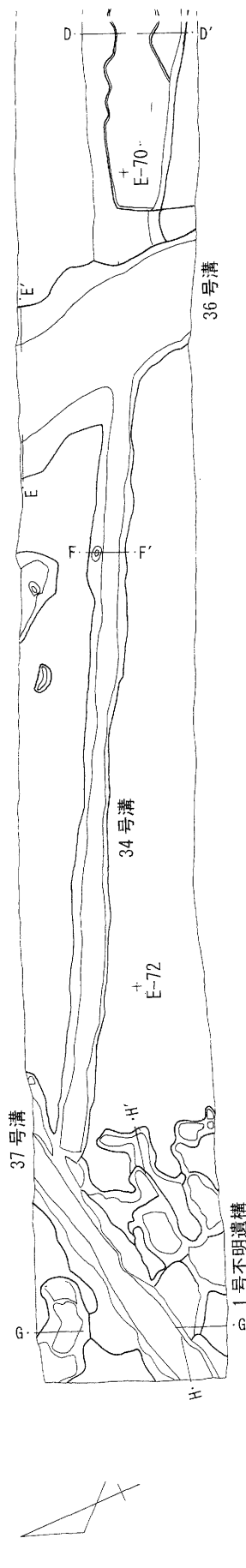
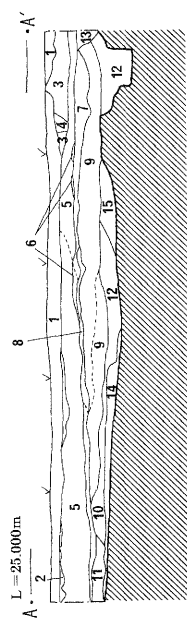
38号溝（第38図） D・E - 75グリッド。断面は、逆台形を呈し、幅は不明であるが、深さは38cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN－80°－Wを示す。覆土は、黄灰色シルト、暗オリーブ褐色シルト質粘土であり、36号溝と共通する。上面には軽石粒の多量に含まれた黒褐色シルト質粘土層が堆積する。

39号溝（第38図） D・E - 84グリッド。断面は、逆台形を呈し、幅46cm、深さ16cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN－85°－Eを示す。覆土は、オリーブ黒色粘土であり、13号土坑に切断されている。

40号溝（第38図） D・E - 85グリッド。断面は、逆台形を呈すが、西側が一段下がる。幅62cm、最深部16cmを計る。やや湾曲するが、方位は概ねN－33°－Eを示す。覆土は、オリーブ黒色粘土である。



- 33号・34号溝土層
- 1 表土、耕作土層。
 - 2 浅間A軽石層。
 - 3 1層と5層が混じりあう。擾乱土層。
 - 4 3層中に1層の土がブロック状に混じりあう。
 - 5 黄灰色(2.5Y 4/1)粘土。白色軽石粒を含む。点線より東側は酸化鉄を含み全体的に赤色。
 - 6 灰色(5Y 4/1)軽石粒純層。
 - 7 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土。黒色粘質土を斑状に、軽石粒を多量に含む。
 - 8 黄色灰色(2.5Y 4/1)粘土。軽石粒を含む。5層、9層より粘性は弱い。点線より東側は酸化鉄を含み全体的に赤色。
- 9 黄灰色(2.5Y 4/1)粘土層。14層に起因すると思われる白色粒を含む。粘性は強い。点線より東側は酸化鉄を含み全体的に赤色。
- 10 灰色(5Y 4/1)粘土層。14層に起因すると思われる白色粒を多量に含む。粘性は強い。所々で白色粒が斑点状に混じる。
- 11 灰色(5Y 4/1)粘土層。14層に起因する砂質灰色層土が混入し、基層の粘土質は斑点状に見える。
- 12 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土層。全体的に14層のシルト質の灰白色土が混じる。粘性は強い。
- 13 黄灰色(2.5Y 4/1)粘土層。5層と似るが部分的に14層のシルト質灰色土が混じる。
- 14 灰色(5Y 5/1)砂質土層。溝の地山。
- 15 オリーブ黒色(5Y 3/1)粘土層。12層と似るが砂質灰色層に起因すると思われる白色粒の混入が少なく、若干黒みが強い。



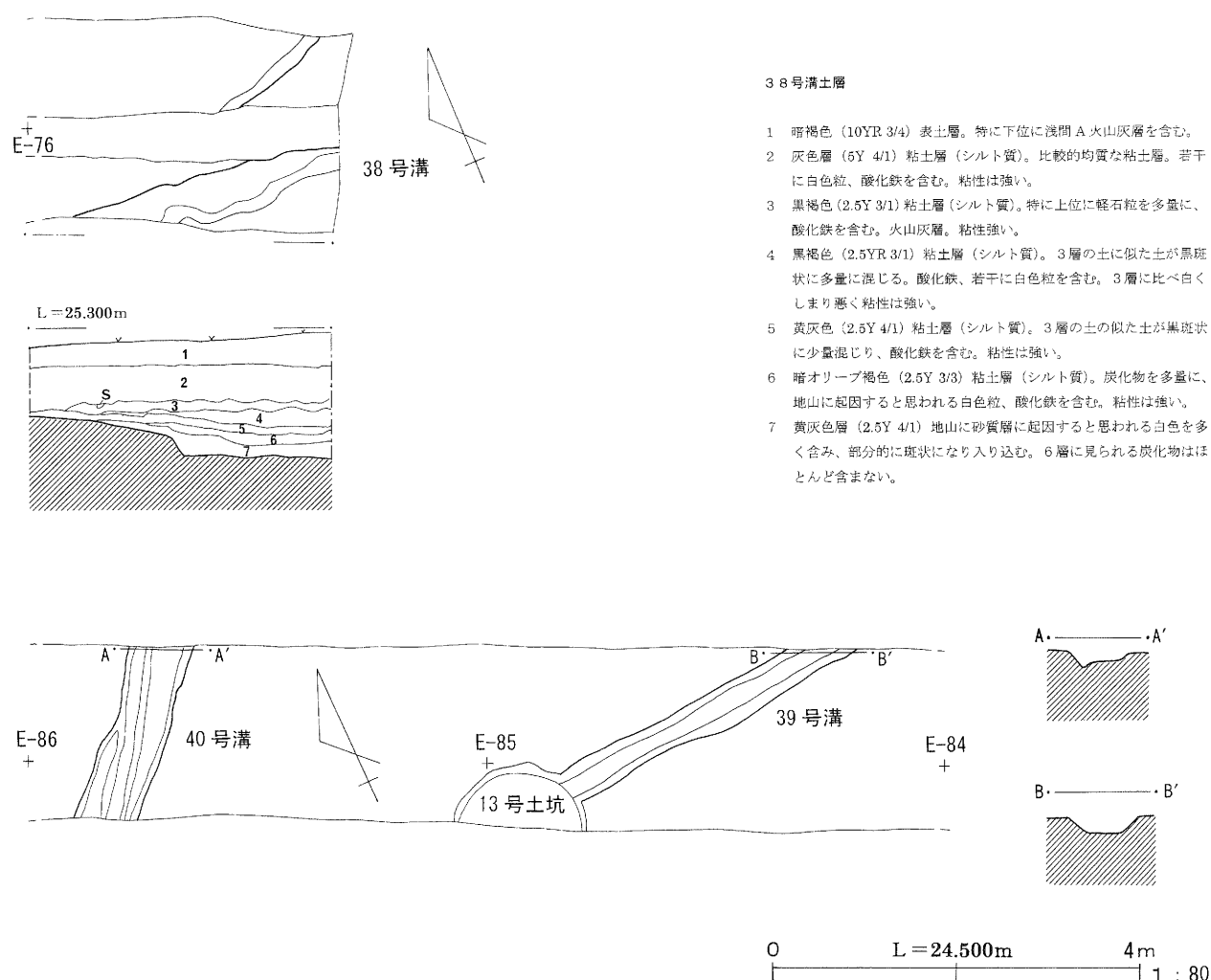
0 L=24,400m 4m 1:80

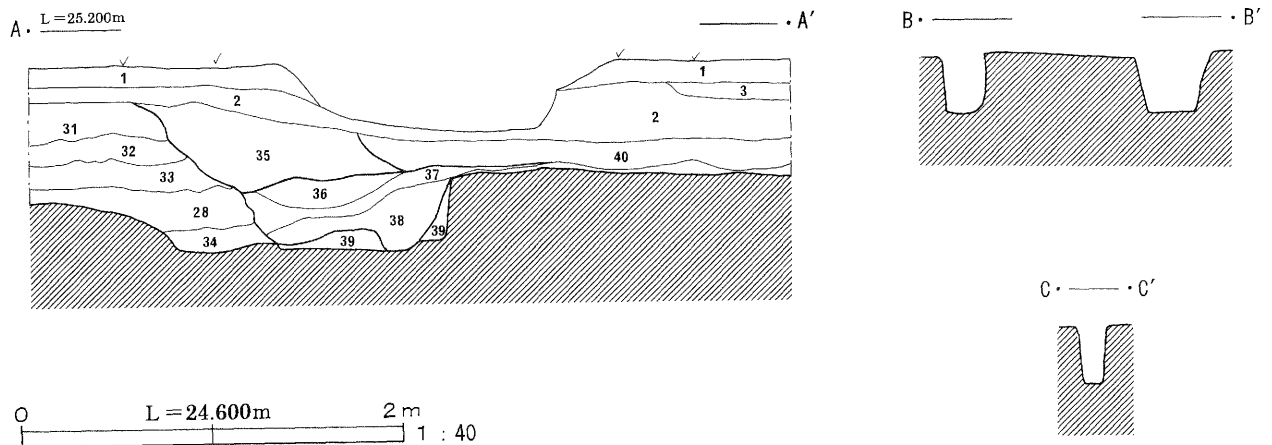
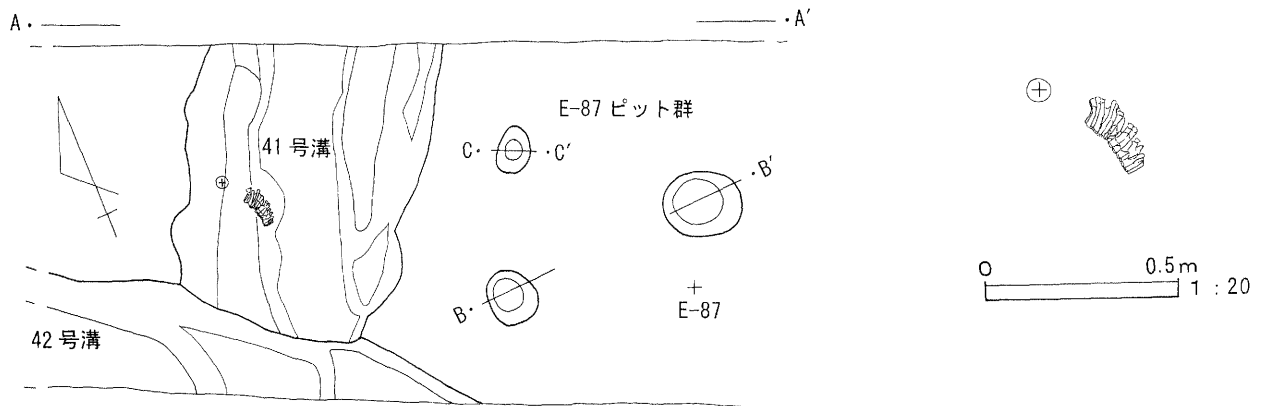
第37図 溝④ 32号～37号溝、1号不明遺構

41号溝（第39図・44図） D・E - 87グリッド。42号溝に切断されている。底面は、中央に分離帯を挟んで2条の溝が並行している。全体の断面は、逆台形を呈し、上面幅1.31m、深さ42cmを計る。平面形は、若干湾曲するが、方位は概ねN-30°-Eを示す。西側の溝は、緩斜面をもち、幅36cm、分離帯からの深さ8cmを計る。西側の溝分離帯側底面から、歯の上面を西、顎の先端を南に向けた馬の下顎が出土している。東側の溝は、急斜面をもち、幅26cm、分離帯からの深さ12cmを計る。覆土は、下層から緑灰色砂（38層）、青灰色粘土（37層）、暗青灰色粘土（36層）である。また本溝の上面には、本溝を踏襲した溝が存在（35層・青灰色粘土層）したが、平面では形態を成さず、40層・暗オリーブ灰色粘土層を覆土とする遺構に削平されたものと考えられた。

42号溝（第40図） D・E - 87・88、D - 89グリッド。43号溝に切断され、41号溝・44号溝を切断している。断面形は、東側は矩形であるが、西側は緩斜面を成す。上面幅1.04m、深さ37cmを計る。平面形は、ほぼ直線を成し、方位はN-55°-Wを示す。覆土は、オリーブ灰色粘土（24層）が下位に、オリーブ灰色砂（23層）、赤褐色シルト（22層）が中位に、灰色シルト（21層）、灰オリーブ砂（18層）が上位に堆積している。砂が中心を成す。

43号溝（第40図） D・E - 88グリッド。42号溝・44号溝を切断している。断面形は、逆台形を呈し、





41号溝土層

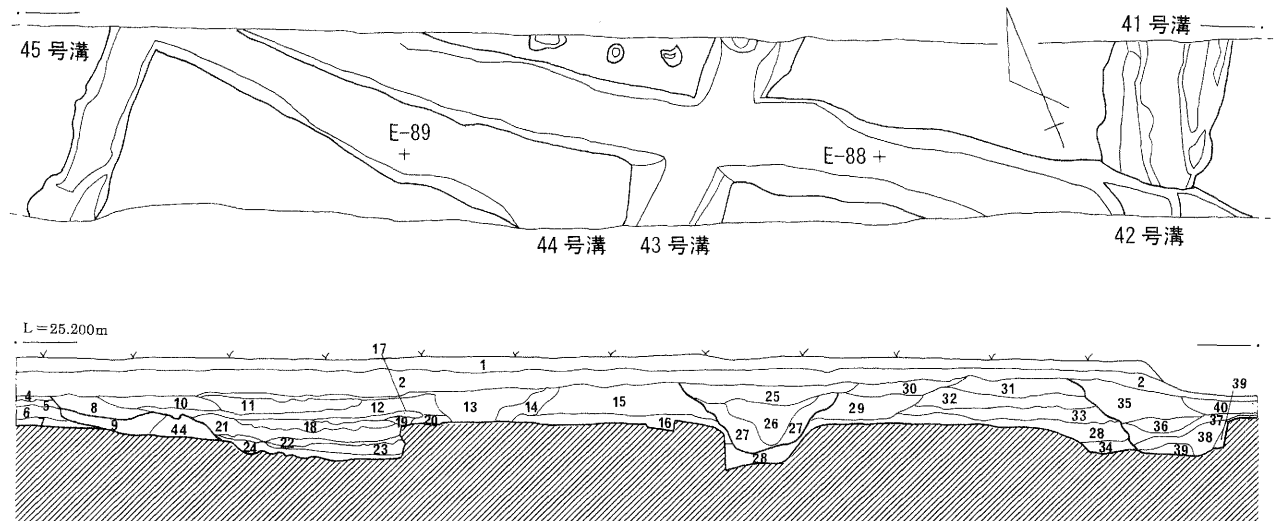
- | | |
|--|---|
| 1 耕作土層。 | 35 青灰色 (5BG 5/1) 粘土。白色粒を多量に含む。2～4mmの砂質ブロックが混入する。 |
| 2 灰色 (10Y 4/1) 粘土。少量の白色粒、帯状の酸化鉄を含む。 | 36 暗青灰色 (5BG 4/1) 粘土。白色粒を多量に含む。 |
| 3 灰色 (10Y 4/1) 粘土。白色粒、軽石粒を多量、酸化鉄、1～2mmの炭化物を含む。 | 37 青灰色 (10BG 5/1) 粘土。2～4mmの砂質ブロックがわずかに混じる。 |
| 28 青灰色 (10BG 5/1) シルト。3～5mmの砂質ブロックを含む。 | 38 緑灰色 (7.5GY 6/1) 砂。砂質層を基層としてシルト層が混じる。 |
| 31 灰オリーブ色 (5Y 5/2) シルト。白色粒を多量に、シルト土と砂質土が混在する。 | 39 オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 粘土。混入物は少なく、極微量の白色粒、2～4mm程度の砂質ブロックを含む。 |
| 32 灰オリーブ色 (5Y 5/2) シルト。白色粒を多量、砂質土を含む。 | 40 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 粘土。白色粒を多量に含む。砂質土がブロック状に混じる。 |
| 33 暗青灰色 (10BG 4/1) 粘土。白色粒を極少量を含む。 | |
| 34 暗青灰色 (10BG 3/1) 粘土。細砂粒を多量、白色粒を極少量を含む。砂質土がブロック状に混じる。 | |

第39図 溝⑥ 41号溝・E-87ピット群

上面幅0.80～1.04m、深さ82cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN-42°-Eを示す。覆土は、オリーブ灰色粘土 (24層) が下位に、青灰色粘土 (27層)、灰オリーブシルト (26層) が中位に、灰色シルト (25層) が上位に堆積している。

44号溝 (第40図) E-87、D・E-88・89グリッド。42号溝・43号溝・45号溝に切断されている。断面は、皿状を呈する。幅は計測できないが、残存部は1.20mあり、深さは44cmを計る。西辺はほぼ直線を呈し、方位はN-41°-Wを示す。覆土は、灰色粘土 (9層)、青灰色シルト (44層) が堆積する。

45号溝 (第40図) D・E-89グリッド。44号溝を切断している。断面は、緩いU字形を呈し、幅58cm、深さ24cmを計る。ほぼ直線を呈し、方位はN-42°-Eを示す。覆土は、暗オリーブ灰色粘土 (8層)



42号～45号溝土層

0 L=25.200m 4m 1:80

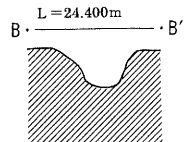
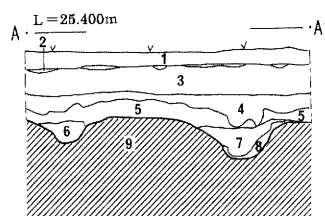
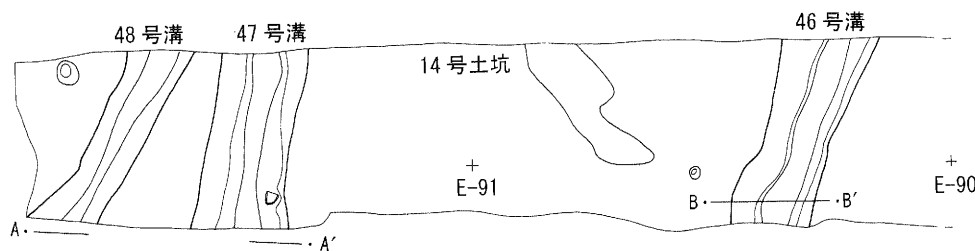
- 1 耕作土層。
- 2 灰色 (10Y 4/1) 粘土。少量の白色粒、帯状の酸化鉄を含む。
- 3 灰色 (10Y 4/1) 粘土。白色粒、軽石粒を多量、酸化鉄を含む。1～2mmの炭化物が混じる。
- 4 オリーブ黒色 (10Y 3/1) 粘土。少量の白色粒、帯状の酸化鉄を含む。
- 5 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘土。少量の白色粒、酸化鉄が点在する。
- 6 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘土。酸化鉄が点在し、少量の細砂粒、極少量の白色粒を含む。
- 7 灰オリーブ色 (5Y 5/3) 砂質土とシルト質土の混在層。混入物は少ない。酸化鉄が点在する。
- 8 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 粘土。少量の白色粒、酸化鉄を含む。わずかに2～3mmの粘土塊が含まれる。
- 9 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土。少量の白色粒、1～2mmの炭化物を含む。
- 10 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 粘土。2～4mmの砂質ブロックが少量に含まれる。
- 11 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 粘土。やや砂質である。1mm以下の砂質粒子を含む。11層、12層の間に細砂粒の層をもつ。
- 12 灰オリーブ色 (7.5Y 4/1) 砂質土。少量の白色粒、粘質土をブロック状に含む。
- 13 灰オリーブ色 (5Y 5/2) シルト。砂質土が斑状に含まれる。
- 14 灰色 (5Y 5/1) 粘土。混入物が少なく、少量の砂質ブロックを含む。
- 15 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘土。砂質ブロック、白色粒、少量に炭化物を含む。
- 16 オリーブ灰色 (5GY 5/1) 粘土。砂質土の中にシルト質土が含まれる。
- 17 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土。微量の雲母、細砂粒を含む。
- 18 灰オリーブ色 (5Y 6/2) 砂質層。間にシルト質土が含まれる。
- 19 灰オリーブ色 (5Y 5/2) シルト質土と砂質土が混在する。
- 20 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 砂質土の中にシルト質土がブロック状に見られる。
- 21 灰色 (5Y 5/1) シルト。0.5mm～1cm程度の砂質ブロックを含む。
- 22 赤褐色 (2.5YR 4/8) シルト。微砂粒子を多量に含む。
- 23 オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 砂質層。酸化鉄を少量に含む。
- 24 オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 粘土。0.5mm～1cm程度のシルトブロックを含む。
- 25 灰色 (7.5Y 5/1) シルト。少量の白色粒、酸化鉄を含む。
- 26 灰オリーブ色 (5Y 5/2) シルト、砂質土が混じる。
- 27 青灰色 (10BG 5/1) 粘土。砂質ブロックを斑状に混じる。
- 28 青灰色 (10BG 5/1) シルト。3～5mmの砂質ブロックが混じる。
- 29 青灰色 (10BG 5/1) 粘土。少量の白色粒を含む。砂質土が混じる。
- 30 オリーブ灰色 (10Y 6/2) 粘土。多量の白色粒、シルト質土と砂質土が混在する。
- 31 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘土。多量の白色粒、シルト質土と砂質土が混在する。
- 32 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘土。やや多量の白色粒、シルト質土と砂質土が混在する。
- 33 暗青灰色 (10BG 4/1) 粘土。白色粒を少量に含む。
- 34 暗青灰色 (10BG 3/1) 粘土。多量の細砂粒、極少量の白色粒を含む。砂質土をブロック状に混じる。
- 35 青灰色 (5BG 5/1) 粘土。多量の白色粒、わずかに2～4mmの砂質土ブロックが混じる。
- 36 暗青灰色 (5BG 4/1) 粘土。白色粒を多量に含む。
- 37 青灰色 (10BG 5/1) 粘土。2～4mmの砂質ブロックがわずかに混じる。
- 38 緑灰色 (7.5GY 6/1) 砂質層を基層としてシルト層が混じる。
- 39 オリーブ灰色 (2.5GY 6/1) 粘土。混入物は少なく、2～4mm程度の砂質ブロック極微量の白色粒を含む。
- 40 暗オリーブ灰色 (2.5GY 4/1) 粘土。やや多量に白色粒、砂質土がブロック状に混じる。
- 41 暗青灰色 (10BG 4/1) 粘土。少量の白色粒を含む。
- 42 灰色 (7.5Y 4/1) 粘土。白色粒、軽石を多量に含む。
- 43 暗オリーブ色 (5GY 4/1) 粘土。少量の白色粒、砂質土がブロック状に混じる。
- 44 青灰色 (10BG 5/1) シルト。

第40図 溝⑦ 42号～45号溝、E-88ピット群

である。

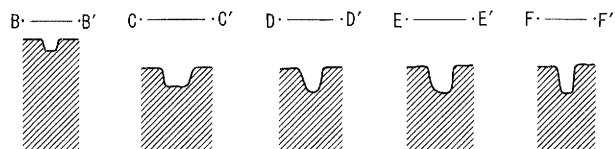
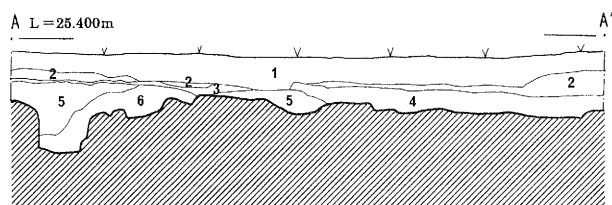
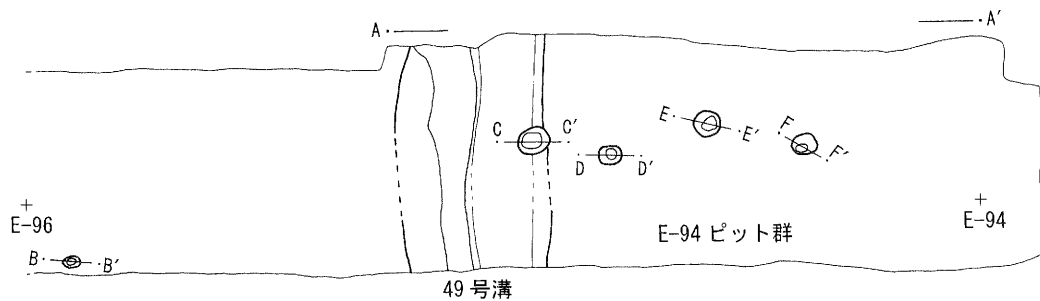
46号溝 (第41図) D・E - 90グリッド。断面は、底面付近では矩形を呈し、上面に向けて朝顔花形に広がる。上面幅84cm、深さ42cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN-52°-Eを示す。覆土は、暗オリーブ灰色粘土であり、45号溝と共通する。

47号・48号溝 (第41図) D・E - 91グリッド。断面は、共にU字形を呈する。47号溝は、幅98cm、深さ38cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN-30°-Eを示す。48号溝は、幅54cm、深さ26cmを計



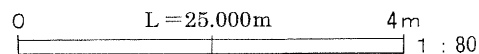
47号・48号溝土層

- 1 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 表土層。
- 2 灰オリーブ色 (5Y 4/2) 浅間 A 軽石層。軽石粒を多量に含む。
- 3 黄灰色 (2.5Y 5/1) 粘土層。軽石粒を中量に、炭化物を少量に含む。
- 4 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘土層。軽石粒を多量に含む。3層よりも黒色である。
- 5 オリーブ黒色 (5Y 3/1) シルト層。地山の砂質層に起因すると思われる白色塊を多量に、白色軽石粒も少量に、炭化物を部分的に含む。
- 6 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘土層 (シルト質)。全体的に地山の砂質層に起因すると思われる白色部斑点状に、黒色粒、炭化物を含む。5層より粘質が強い。
- 7 6層と類似しているが炭化物は見られない。シルト塊を若干含む。
- 8 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト層 (粘土質)。シルトに水分が加わり粘質化したと思われる。

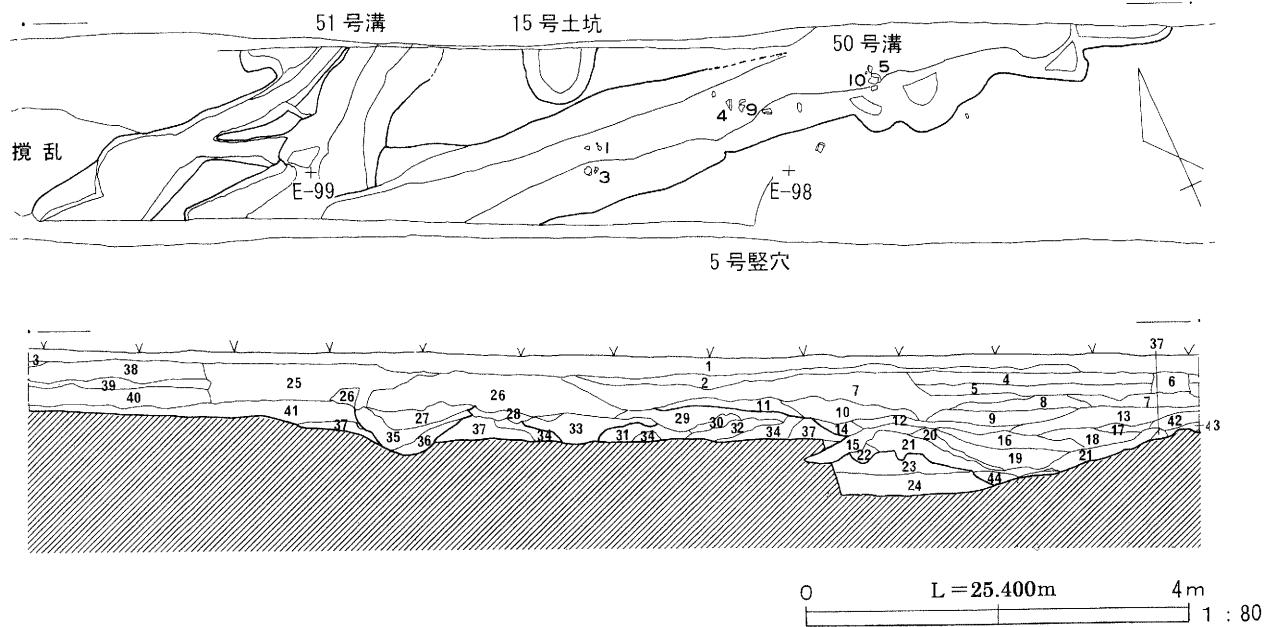


49号溝土層

- 1 表土、耕作土。
- 2 灰色 (7.5Y 6/1) シルト。暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘土ブロック、浅間 A 軽石粒を多量に含む。
- 3 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト層。マンガン粒を多量に含む。
- 4 2層を基盤層とし黒褐色ブロックを主体的に含む。緻密な層で軽石粒を多量に、シルト粒を少量に、炭化物を若干に含む。
- 5 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト層 (粘土質)。黒褐色 (2.5Y 3/2) ブロック、酸化鉄粒、マンガン粒、軽石粒を多量に、シルト粒を中量に、炭化物粒を微量に含む。暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘土小ブロックも含む。
- 6 黒褐色 (2.5Y 3/2) シルト層。5層に似るが若干暗色。炭化物を多量に、マンガン粒を中量に含み軽石粒はほぼ無し。シルト粒を多量に含み特に下位では小ブロック状に含まれる。



第41図 溝⑧ 46号～49号溝、E-94ピット群



50号・51号溝土層

- 1 表土、耕作土。
- 2 灰色 (7.5Y 6/1) シルト。暗褐色 (7.5YR 3/4) 粘土ブロック、浅間 A 軽石粒を多量に含む。
- 3 暗青灰色 (5B 3/1) ブロックを主体に浅間 A 軽石粒、2層ブロックを含む。
- 4 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘土層 (シルト質)。中量の軽石粒、マンガン粒を少量、小礫、炭化物を微量に含む。
- 5 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘土層 (シルト質)。多量のマンガンを粒斑状に、中量の軽石粒を含む。
- 6 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 粘土層 (シルト質)。中量の軽石粒、マンガン粒、炭化物を微量に含む。
- 7 2層を基盤に黒褐色 (2.5Y 3/2) ブロックを主体的とした粘土層 (シルト質)。軽石粒を多量に、炭化物粒を少量に含む。
- 8 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粘土層 (シルト質)。軽石粒、炭化物を微量に含む。
- 9 黒褐色 (2.5Y 3/1) シルト層 (粘土質)。シルト粒、黒褐色 (2.5Y 3/2) 小ブロックを多量に、軽石粒を含む。
- 10 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト層 (粘土質)。7層ブロック、下層に起因する砂ブロック、多量に軽石粒を含む。
- 11 7層にシルト粒を含むことから区別される。黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト層 (粘土質)。
- 12 オリーブ黒色 (5Y 3/1) 粒子の粗い砂による砂層。
- 13 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト層 (粘土質)。軽石粒、シルト粒を多量に、炭化物を少量に含む。黒褐色ブロックをあまり含まない。
- 14 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘土質中に暗オリーブ (5Y 4/3) シルト質土が混じるシルト層 (粘土質)。3 7層 10層が混じりあう。
- 15 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粒子の粗い砂による砂層。酸化している。
- 16・17 暗オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 純砂層。
- 18 褐色 (10YR 4/6) 砂。酸化している。
- 19 黒褐色 (2.5Y 3/2) シルト層 (粘土質)。シルト粒・小ブロック、炭化物を微量に含む。2 1層より均質に見える。
- 20 オリーブ黒色 (5Y 3/2) 砂。
- 21 黒褐色 (2.5Y 3/2) シルト層 (粘土質)。2 3層のブロックを部分的に含み、マンガン粒を若干含む。粘性は強い。
- 22 灰オリーブ色 (5Y 4/2) シルト層。2 1層に同じだがより 2 3層ブロックを多く含む。
- 23 灰オリーブ色 (5Y 4/2) シルト層。2 1層をブロック状に含む。
- 24 オリーブ黒色 (5Y 3/1) 粘土質シルト層。2 3層が水を含み粘質を強くしたものと考えられる。
- 25 灰黄褐色 (10YR 4/2) 粘土層。浅間 A 火山灰層の中に大きいブロックを多量に含む。
- 26 黄灰色 (2.5Y 4/1) 軽石粒、小石を含む。マンガン粒を含む層の中に下層に起因すると思われる黒色塊が入り込んでいる。
- 27 褐色 (10YR 4/1) シルト層。多量にマンガン粒、軽石粒、シルト粒、微量に炭化物を含む。
- 28 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト層。黒褐色ブロック、砂粒、中量にシルト粒を含む。
- 29 黄灰色 (2.5Y 4/1) シルト層 (粘土質)。1 1層ブロックを多く含み、2 8層と同一と思われる。
- 30 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粒子の大きな砂による砂層。3 1層に似るが若干シルト質、3 2層ブロックを含む。
- 31 黄灰色 (2.5Y 4/1) 粒子の大きな砂による砂層。
- 32 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト層。黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘土質ブロックを少量に含む。
- 33 黒褐色 (10YR 3/1) シルト層 (粘土質)。部分的に砂質ブロック、シルト粒、炭化物粒を含む。
- 34 黒褐色 (10YR 3/2) シルト層 (粘土質)。シルト粒、マンガン粒、少量に炭化物を含む。
- 35 オリーブ褐色 (2.5Y 3/3) 粘土層 (シルト質)。下位を中心にシルトブロック、中量の白色軽石粒、マンガン粒を含む。縦に酸化鉄による変色部分が入る。
- 36 黒褐色 (2.5Y 3/1) 粘土層 (シルト質)。シルト塊は若干入るが比較的均質である。
- 37 砂質層。地山と同一層と思われるがより黄色味の強い暗オリーブ色 (5Y 4/3) で少量の黒褐色 (2.5Y 3/1) ブロックを含む。
- 38 2層に黒褐色 (2.5Y 3/2) ブロック、軽石粒を含む。土器底部がある。
- 39 黒褐色 (10YR 3/2) 粘土質。白色軽石粒、マンガン粒を含む。
- 40 灰色 (N 4/) シルト。4 1層を粒状に、また白色軽石粒を含む。
- 41 緑灰色 (10GY 6/1) シルト。暗灰色 (N 3/) シルト粒・ブロックを含む。
- 42 灰色 (5Y 4/1) シルト層 (砂質)。1 3層中に砂ブロックが多く入り込む。
- 43 黒褐色 (2.5Y 3/2) シルト層 (粘土質)。2 1層と同一層。2 1層中に砂、3 7層を少量含む。2 1層の末端と思われる。
- 44 オリーブ黒色 (5Y 3/1) シルト層 (粘土質)。2 4層に似るが白色のシルト粒、小礫を少量に含む。

第42図 溝⑨ 50号・51号溝、15号土坑

る。ほぼ直線を成し、方位はN-48°-Eを示す。覆土は、両溝とも黄灰色シルト質粘土（6層・7層）であり、僅かに炭化物の有無が異なるのみである。

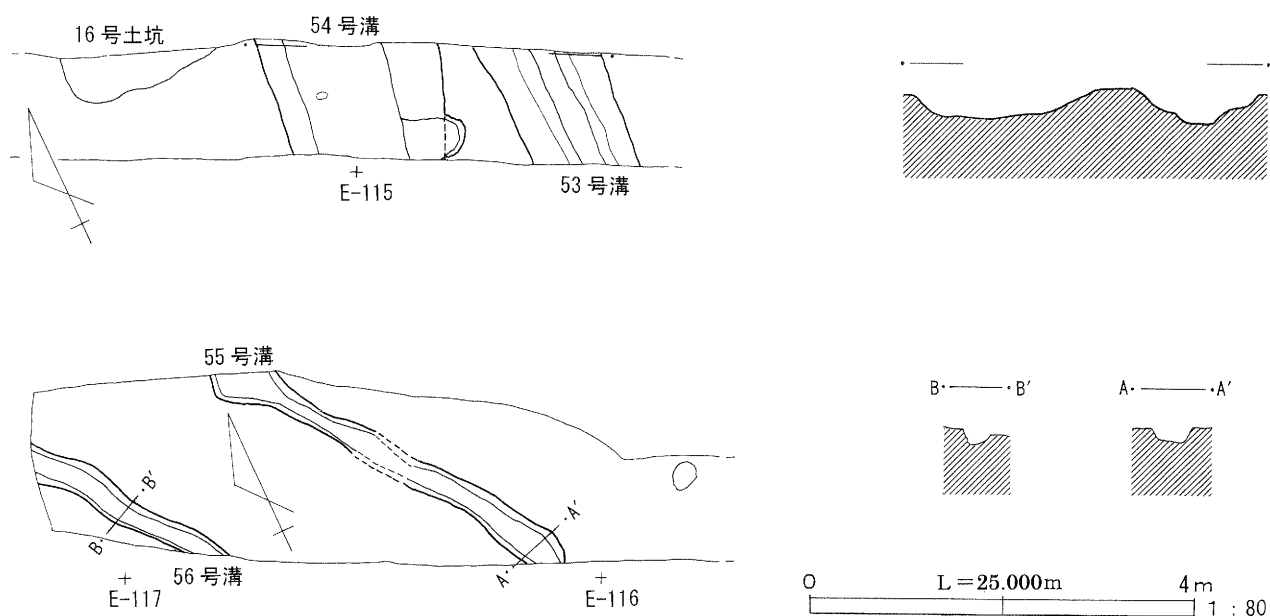
49号溝（第41図） D・E-94・95グリッド。断面形は、底面から43cmの高さまでは矩形を呈する。上面は、西側が朝顔花状に広がるものの、東側は凹凸の激しい段を成す。上面幅1.58m、深さ58cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN-23°-Eを示す。覆土は、東側からの流入であり、下位に炭化物を多量に含む黒褐色シルト（6層）、上位に酸化鉄・マンガン粒・軽石粒を多量に含む暗灰黄色シルト（5層）が堆積している。

50号溝（第42図・44図） D-97、D・E-98、E-99グリッド。51号溝及び5号竪穴を切断している。断面は、V字形を呈する。上面幅1.14m、深さ80cmを計る。上端は凹凸が激しいが、全体ではほぼ直線を成し、方位はN-84°-Wを示す。覆土の主体は、砂層（10層・12層・15層・16層・17層・18層・20層・37層・42層）であり、上位層（9層・10層）は軽石粒を多量に含む。遺物は、砂層中（15層・16層・17層・18層）から、須恵器坏（1・2）、須恵器高台碗（3）、須恵器甕（4・5・6・7）、灰釉長頸壺（8・9）、灰釉高台壺（10）が出土している。

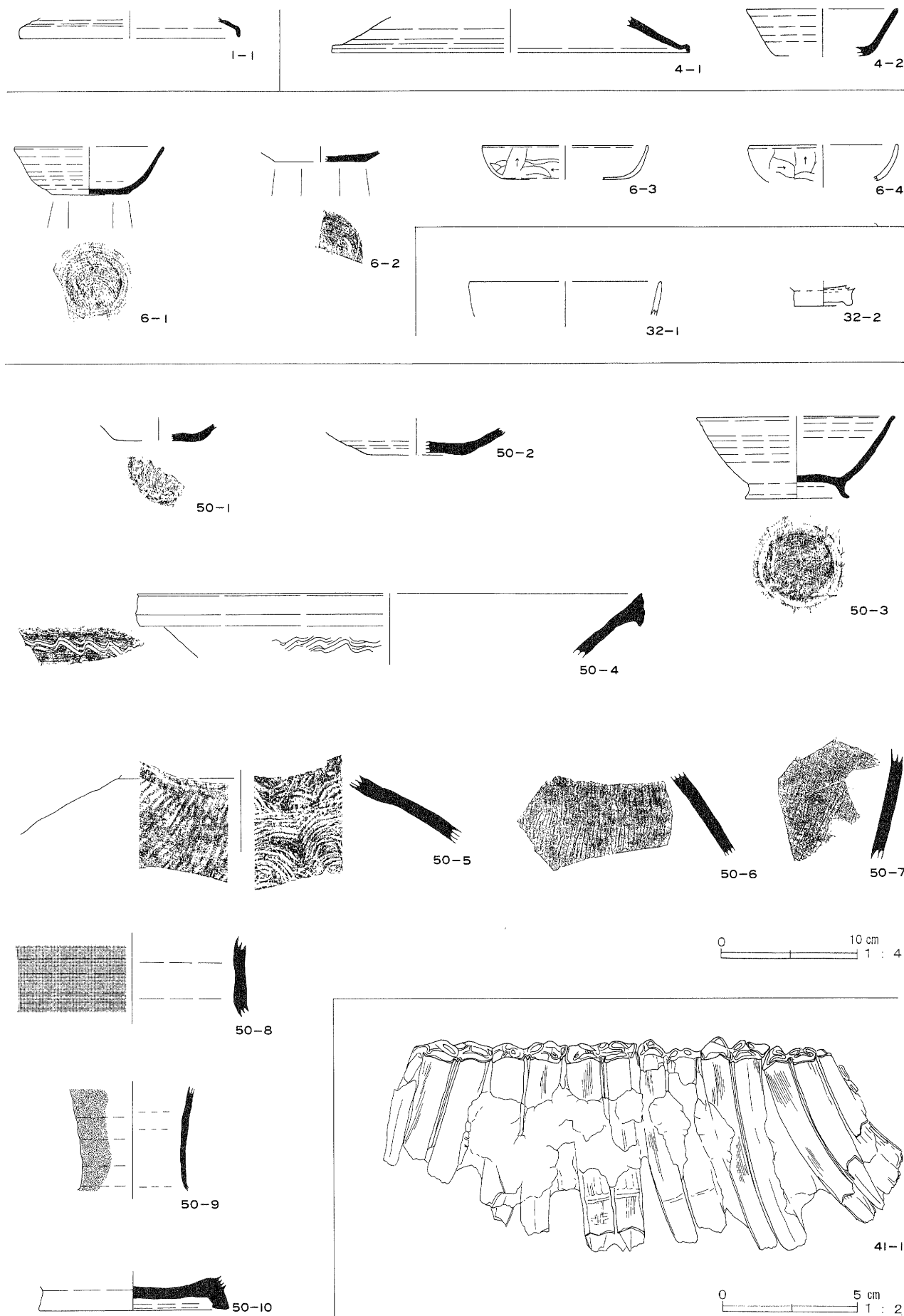
51号溝（第42図） D・E-98・99グリッド。50号溝に切断されているが、5号竪穴を切断している。断面は、緩いV字形を呈する。平面形は、方位がN-88°-EからN-58°-Eへと、逆くの字型に屈曲する。幅82cm、深さ44cmを計る。覆土は、下位に黒褐色シルト質粘土（36層）、中位に軽石粒・マンガン粒を含むオリーブ褐色シルト質粘土（35層）、上位に多量の軽石粒・マンガン粒を含む褐灰色シルト（27層）が堆積している。

52号溝（第31図） D-110グリッド。E-109ピット群の西ピットを削平している。底は、平坦面を成す。幅1.05m、深さ15cmを計る。やや東に脹らみをもつが、概ね直線を呈し、方位はN-26°-Wを示す。覆土は、軽石粒を含む黒褐色粘土・緑灰色シルト・炭化物粒を含む灰色粘土の混在層である。

53号溝（第43図） D-114グリッド。断面は、二段の逆台形を成し、上端幅1.08m、段幅52cmを計



第43図 溝⑩ 53号～56号溝



第44図 溝出土遺物

第23表 1号溝出土遺物観察表 (第44図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・蓋	(16.0)	—	—	①	②	灰	口縁部1/8	口辺部吸炭

第24表 4号溝出土遺物観察表 (第44図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・蓋	(26.2)	—	—	①⑤⑥	①	灰	口縁部1/8	一部吸炭
2	須恵器・坏	(11.2)	(3.5)	(5.4)	①⑤⑥	②	灰	1/4	口辺一部吸炭

第25表 6号溝出土遺物観察表 (第44図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	(11.0)	3.5	—	①⑤⑥②	①	青灰	1/3	
2	須恵器・坏	—	—	(6.6)	①⑤⑥	①	青灰	底部2/5	外面一部吸炭
3	土師器・坏	(12.2)	2.5	(9.4)	①②③④⑥	②	橙	口縁部1/4	
4	土師器・坏	(10.8)	—	—	④⑥②①	②	明赤褐	口縁部1/6	

第26表 32号溝出土遺物観察表 (第44図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	陶器・椀	(14.0)	—	—	陶土	①	浅黄	口縁部1/8	内外面共釉
2	陶器・天目椀	—	1.5	4.3	陶土	③	浅黄橙	底のみ	内面のみ鉄釉が残る

第27表 41号溝出土遺物観察表 (第44図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	馬歯								下顎

第28表 50号溝出土遺物観察表 (第44図)

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	須恵器・坏	—	—	(6.3)	①⑥②④	②	灰	底部1/5	
2	須恵器・坏	—	—	(7.0)	⑤①②⑥	②	灰白	底部1/4	表面剥離
3	須恵器・高台椀	(14.5)	5.9	7.6	⑥①②④	②	灰	1/3	
4	須恵器・甕	(37.0)	—	—	⑤①②⑥③	①	黄灰	口縁部1/8	
5	須恵器・甕	—	—	—	②①⑥	①	青灰	破片	
6	須恵器・甕	—	—	—	①②③⑤⑥	①	灰	破片	内面にぶい橙色
7	須恵器・甕	—	—	—	⑤②③	①	灰黄	破片	内面にぶい橙色。6と同一個体
8	灰釉・長頸壺	—	—	—	①	②	灰	破片	外面彩
9	灰釉・長頸壺	—	—	—	①	①	灰	破片	外面一部釉
10	灰釉・高台壺	—	—	(14.0)	②①⑥	①	灰	高台部1/2	底部内面灰釉

る。深さは、段までが20cm、全体で36cmを計る。ほぼ直線を成し、方位はN-1°-Eを示す。覆土は、上位が52号溝覆土と同一であり、下位が暗青色粘土・灰色粘土・緑灰色シルトの混在層である。

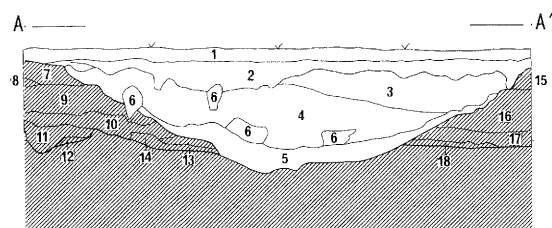
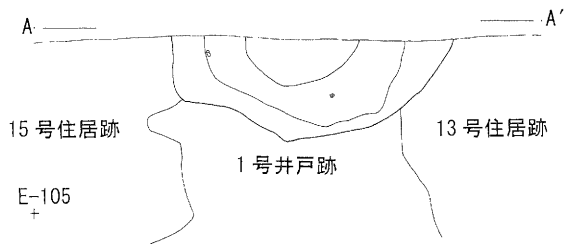
54号溝 (第43図) D-114・115グリッド。底面に凹凸がみられるが、概ね逆台形を呈する。幅1.82m、深さ26cmを計る。方位はN-15°-Eを示す。東辺の一部はピット状を呈するが、覆土に変化はなく、溝の構造の一部と判断された。覆土は、暗青灰色粘土である。

55号溝 (第43図) D-116グリッド。断面は、逆台形を成すが、東が深く、西が浅い傾向を示す。平面形態は安定せず、小さく蛇行する。幅22～60cm、深さ18cm前後を計る。方位は安定しないが、概ねN-34°-Wを示す。覆土は、暗青灰色粘土及びマンガン粒・炭化物粒の混在する青灰色粘土である。

56号溝 (第43図) D-116・117グリッド。断面は、概ね逆台形を成すが、西が深く、東が浅い傾向を示す。平面形態は安定せず、小さく蛇行する。幅24～38cm、深さ16cm前後を計る。方位は安定しないが、概ねN-36°-Wを示す。覆土は、55号溝と同一であり、形態・方位等もほぼ一致することから、両溝の性格の同一性が窺える。

E 井戸跡 井戸跡は、Ⅷ区D - 104 グリッドで1基検出されている。

1号井戸跡（第45図） 13号・14号・15号住居跡を切断している。南西側1／3が調査されたに過ぎず、大半は北側未調査区に入っている。上面は円形を呈し、現況で2.24mを計り、本来は径2.40mほどの規模をもつものと思われる。断面は漏斗状を呈し、深さ79cmを計る。井筒部分は、現況で90cmを計るが、本来は径1.00mほどの規模をもつものと思われる。全体で漏斗形を呈する。しかし、井筒部分調査中に壁土の崩落が生じたため、調査を中止せざるを得なかった。そのため、詳細は不明である。上面は、西側で14号・15号住居跡覆土（7層）上面から、東側では13号住居跡覆土上位層（15層）上面から掘り込まれている。覆土は、投入土の様相を示し、全体に浅間A軽石粒が多量に含まれている。



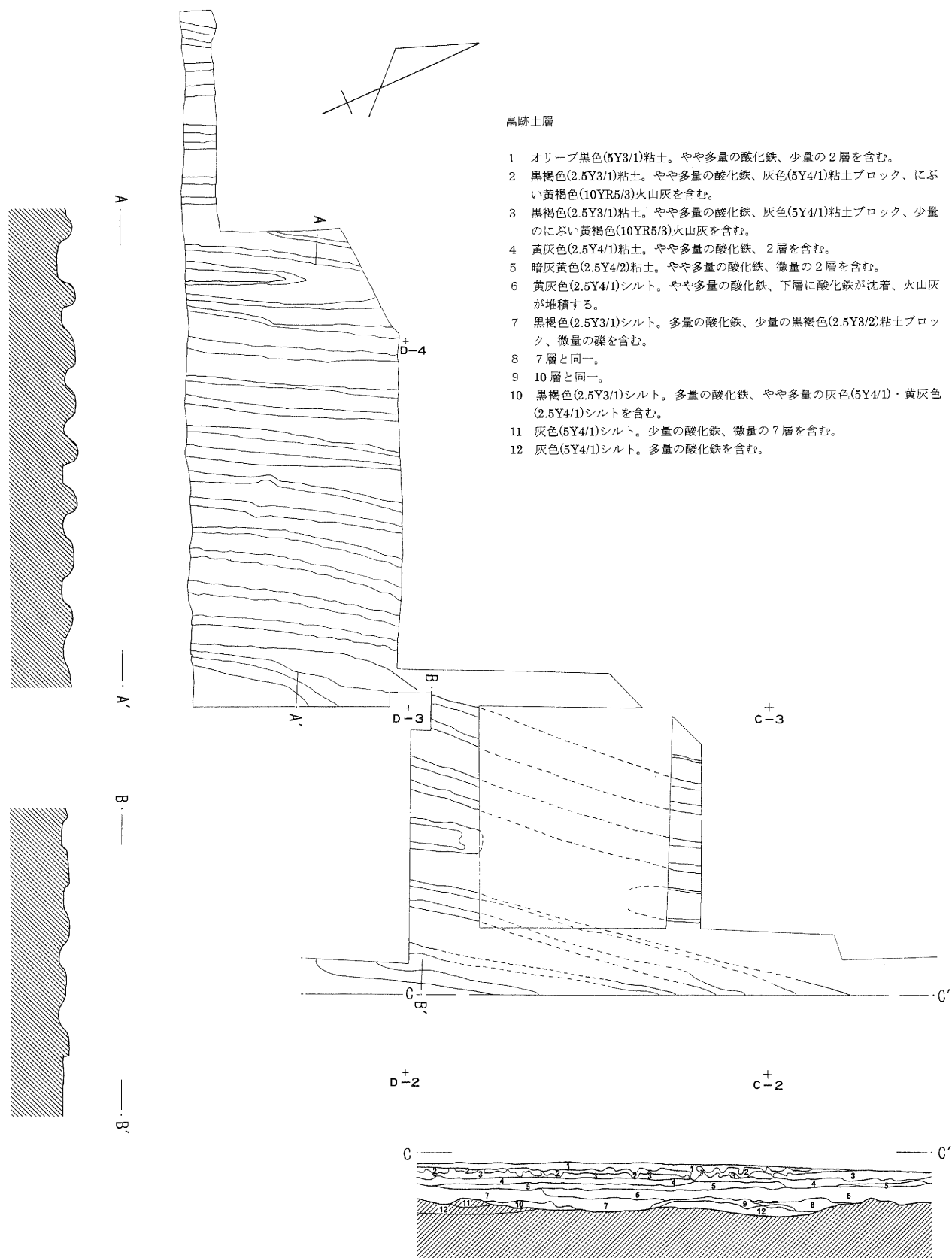
1号井戸跡土層

- 1 表土、耕作土。
- 2 灰色（7.5Y 6/1）シルト。暗褐色（7.5YR 3/4）粘土ブロック、浅間A軽石粒を多量に含む。
- 3 暗褐色（7.5YR 3/4）粘土ブロック層。部分的に2層ブロックを含む。
- 4 灰色（N 5/）シルト。浅間A軽石粒、小礫を多量に含む。
- 5 黄灰色（2.5Y 4/1）粘土。浅間A軽石粒、礫、木片を含む。
- 6 5層がふかふかした状態を呈する。
- 7 14号、15号住居第3層
- 8 暗青灰色（5BG 3/1）粘土粒、黄褐色（10YR 5/6）粘土粒、マンガン粒の混在層。白色軽石粒を含む。
- 9 灰色（N 4/）粘土。黄褐色（10YR 5/6）粘土粒、マンガン粒がほぼ同じ割合で混在する。土器片を含む。
- 10 9層と同一構成であるが炭化物の含有率が高い。
- 11 9層と同一構成であるがそれぞれがブロック状を呈し炭化物の含有率が高い。
- 12 灰色（N 5/）シルトに炭化物を霏降り状に含む。粘り床の可能性が高い。
- 13 カマド内灰層。最上面に炭化物層、焼土小ブロックを含む。
- 14 カマド内灰層。上、下面に炭化物層、焼土大ブロックを含む。
- 15 灰色（N 6/）粘土。小礫を多量、白色軽石粒を少量に含む。
- 16 にぶい赤褐色（2.5YR 4/4）粘土。灰色（N 4/）粘土、緑灰色（10GY 6/1）シルトの混在層。土器片を多量に含む。
- 17 暗灰色（N 3/）を主体して緑灰色（10GY 6/1）シルト粒・ブロック、炭化材粒、土器片を多量に含む。
- 18 17層と同一の構成であるが緑灰色シルトが主体となる。

0 L=26.000m 2m
1 : 60

第45図 1号井戸跡

F 畝跡 畝跡は、B・C・D - 2、D - 3・4グリッドで検出されており、I区全域に及ぶ。畝数18を数える。畝の方向性から、畝数5（東）・8（中）・5（西）のグループに区分され、概ねB・C・D - 2グリッド、D - 3グリッド、D - 4グリッドにそれぞれが位置する。方位は、東のグループがN - 38° - E、中のグループがN - 26° - E、西のグループがN - 20° - Eを示す。東のグループは、やや蛇行し、畝幅・畝合幅が約40cmを基本としてほぼ一致し、それよりも広い部分が多いことを特色としている。畝合の深さは、10cm 前後である。中のグループは、東半分がやや蛇行し、畝幅の基本が約30cm、畝合幅の基本が約40cmとして、畝幅が畝合幅よりも狭いことを特色としている。また西端では、2本の畝合が合同している部分もみられる。畝合の深さは、20cm 前後であり、3グループの中で最も深い。西のグループは、畝幅の基本が約40cm、畝合幅の基本が約30cm として、畝幅が畝合幅よりも広いことを特色としている。畝合の深さは、10cm 前後である。畝合の覆土は、多量の酸化鉄粒・灰色シルト・黄灰色シルトを含む黒褐色シルト（10層）、多量の酸化鉄粒を含む灰色シルト（12層）を基本として、特に東のグループでは、多量の酸化鉄粒・少量の礫を含む黒褐色シルト（7層）が堆積する部分もみられる。7層は、畝上面に及び、同位には、軽石粒を含み酸化鉄の沈着する黄灰色シルト（6層）が堆積している。

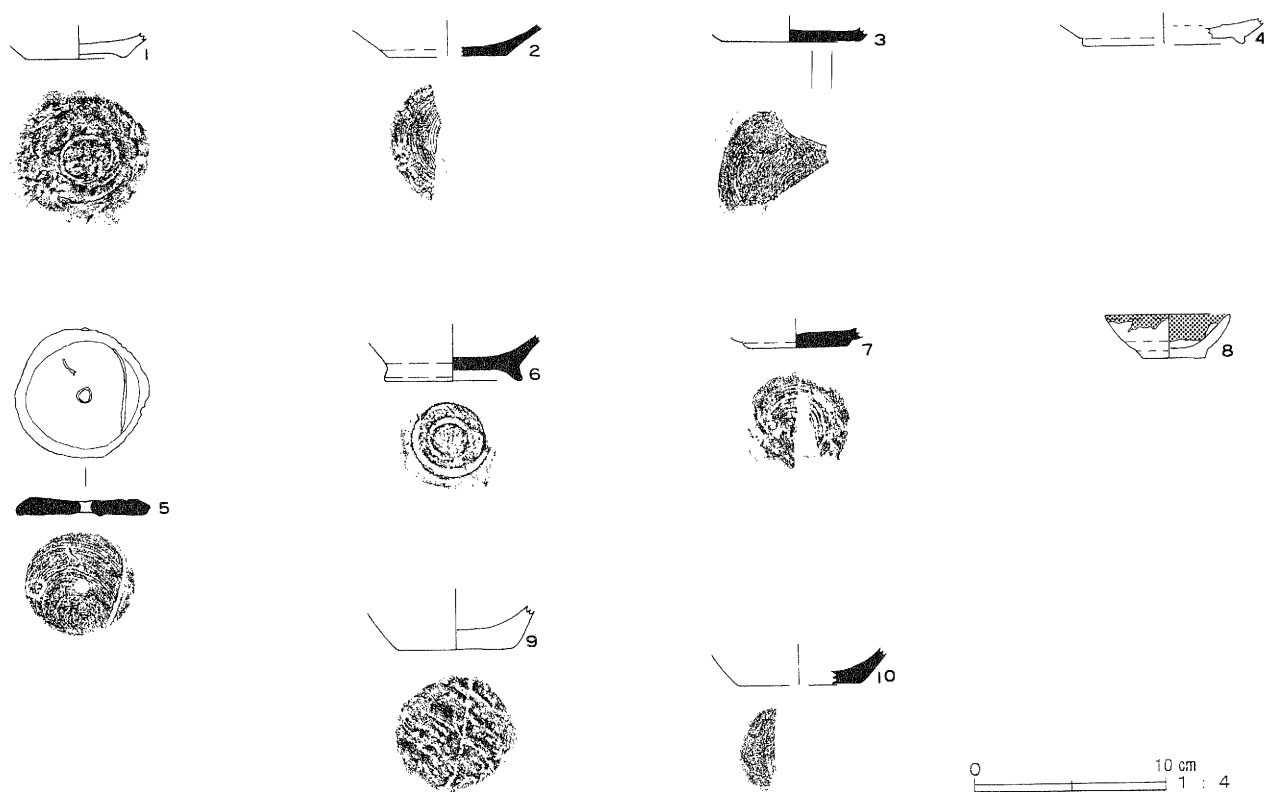


第46図 畠跡

G その他の遺構・遺物

1号不明遺構（第37図） 37号溝を取り囲むように、底面に大きな起伏が連続する土坑状遺構である。全体規模等は不明であるが、最も大きな穴は、40×100cm、深さ40cm を計る。覆土はオリーブ黒色粘土であり、37号溝覆土と近似するが、ややシルト化しているため、37号溝と区別したものである。

遺構外出土遺物（第47図） 内黒高台碗（1）は、Ⅱ区E - 25グリッド、2号竪穴外覆土中から出土している。須恵器坏（2）灰釉皿（4）は、Ⅱ区E - 30グリッド、2号・3号住居跡外覆土中から出土している。須恵器坏（3）は、Ⅱ区E - 32グリッドからの出土である。須恵器転用紡錘車（5）は、坏底部の周辺部を円形に加工し、中央部に径7～8mmの孔を穿ったものであり、須恵器高台碗（6）同坏（7）と共に、Ⅲ区E - 35グリッド、7号住居跡・8号土坑付近覆土中から出土している。灯明皿（8）はⅣ区E - 52グリッド、表土下からの出土である。9・10はいずれも表土中からの出土である。



第47図 遺構外出土遺物

第29表 遺構外出土遺物観察表（第47図）

No.	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	内黒・高台碗	—	—	5.5	④①②⑥	②	赤褐	底部のみ	E-25
2	須恵器・坏	—	—	(6.2)	①⑥⑤②④	①	灰	底部1/3	E-30
3	須恵器・坏	—	—	(7.0)	①②⑤	①	灰白	底部1/3	E-32
4	灰釉・皿	—	—	(8.4)	陶土	②	灰白	底部1/6	内面輪壳。高台部無釉。E-30
5	須恵器坏転用紡錘車	径7.1 孔径1.1 厚さ0.7	—	—	①⑥	②	灰	底部のみ	焼成後穿孔。E-35
6	須恵質・高台碗	—	—	(7.2)	①②④⑥	③	にぶい黄橙	底部一部欠	外面吸炭。E-35
7	須恵器・坏	—	—	5.6	①②③⑥	③	明赤褐	底部4/5	E-35
8	土師質・灯明皿	6.4	2.3	3.2	②④③	②	浅黄橙	完形	油煙付着。E-52
9	土師器・坏	—	—	6.1	②④①③⑥	②	にぶい橙	底部のみ	E-60
10	須恵器・坏	—	—	(6.3)	①②④⑥	③	淡黄	底部1/8	E-88

V 調査のまとめ

今回の調査は、調査範囲の幅が2m前後と狭く、わずかな例を除いて、大部分の遺構が部分調査であった。しかし、調査範囲の長さは東西約576mに及び、北島遺跡の北端部の遺構の有り様・土地利用の区分がある程度明確になったとも言えよう。ここでは、各調査区の遺構のあり方についてみてみることにする。

＜Ⅰ区＞ Ⅰ区は、全域が畠跡であった。畠跡は、全体の規模は知り得なかったが、畝・畝合の方向性及び両者の幅の関連性から、3群に区分することができた。東群は、全体の方位がN-38°-Eを示し、畝幅・畝合幅が約40cmを基本としてほぼ一致しており、それよりも広い部分が多いことを特色としていた。畝合の深さは、10cm前後であった。中群は、方位がN-26°-Eを示し、畝幅の基本が約30cm、畝合幅の基本が約40cmとして、畝幅が畝合幅よりも狭いことを特色としていた。畝合の深さは、3群の中で最も深く、20cm前後であった。西群は、方位がN-20°-Eを示し、畝幅の基本が約40cm、畝合幅の基本が約30cmとして、畝幅が畝合幅よりも広いことを特色としていた。畝合の深さは、10cm前後であった。この3群の違いが何に起因するのか不明であるが、耕作物の違いも可能性としては大きいといえるであろう。畠跡の上位には、断続的ではあるが、マーブル状の粘土層を挟んで、浅間B軽石が厚さ3～5cmの純層で堆積していた。

＜Ⅱ区＞ Ⅱ区は、東端・E-20グリッドから1号土坑の位置するE-23ポイントまで、遺構が検出されていない。また、E-23ポイント付近からは、東に向けて基盤層が傾斜をみせている。本調査区内では僅かな差であるが、このまま傾斜を続けてⅠ区に至ると考えられる。Ⅰ区とのレベル差は70cmである。逆に西に向けては安定した平坦面（西端が若干高くなる）がみられ、各遺構が集中する。この中でE-29ポイントを境にして、遺構の配置上の区別がみられる。東側では竪穴（1号～3号）、土坑（1号～5号）、溝（1号～6号）が集中するのに対して、西側では、住居跡（1号～5号）、土坑（6号・7号）、ピット群（E-29・31）が集中している。この地区でみられる溝は、弧を描くもの（3号～6号）と、直線を成すもの（1号・2号）があり、総じて直線を成す溝が新しい。竪穴は、長方形を基本とした平面形を呈している。土坑は、1号を別として、溝に付随する形のものが大部分であった。住居跡は、4号・5号は不明であるが、1号・3号は長方形を呈し、東短辺側にカマドを敷設する形態を示すと考えられた。また2号住居跡は、一辺2m前後の小型で、長方形を呈する住居跡であること、床面上から灰に混ざって小型の土錘が4個出土していること等、特異な例であることが知れた。Ⅰ区・畠跡上位に堆積していた浅間B軽石純層は、本区中央2号竪穴から東端・E-20グリッドにかけて連続して堆積している、つまり浅間B軽石純層は、Ⅱ区平坦面の東端から傾斜面、さらにⅠ区にかけて堆積していることになる。

＜Ⅲ区＞ Ⅲ区基盤層は、Ⅱ区よりもさらに20～30cmほど高くなり、ほぼ平坦面を成している。調査区中央のE-40ポイントを境にして、東側には住居跡（6号～12号）、竪穴（4号）、土坑（8号・9号）、溝（7号・8号）、ピット群（E-35）が集中している。西側は、溝（9号～15号）、近世の溝（16号）、近世の土坑（11号・12号）がみられるのみである。なお、10号土坑は、一応土坑としたが、覆土の状況から3号～6号溝に近似する溝の端部と考えられた。Ⅱ区とⅢ区を合わせてみると、住居跡等の集落の中心的な遺構は、E-23～40ポイント間、約90m幅の、高位平坦面に集中するといえる。また一旦途絶えていた浅間B軽石純層は、12号住居跡から4号竪穴の覆土上面に堆積していた。

＜Ⅳ区＞ Ⅳ区基盤層は、Ⅲ区からの高位が連続せず、再び全域で30～40cmほど低くなる。検出された遺構は、溝（17号～28号）であり、西端には列を成す可能性のあるピットを含むピット群（E - 59）がある。浅間B軽石純層は、27号溝と28号溝の中間・E - 56ポイント付近から西で断続的に堆積している。その堆積状況は、E - 59ポイントから西2mの地点で最低位を示し、東西両側に上昇をみせている。よって、この地点が小谷の底を示しているものと考えられ、基本土層（第4図）としたものである。

＜Ⅴ区＞ Ⅴ区基盤層は、Ⅳ区からの低位を継続するが、E - 66ポイント付近まで上昇し、西端・E - 72ポイント付近では40cmほど高くなり、Ⅲ区の高位を取り戻している。結局、Ⅳ区を中心とした小谷は、E - 47ポイントからE - 66ポイント付近までの間、約95mの幅をもつ、と考えられた。本区で検出された遺構は溝（29号～37号）のみであるが、小谷の西緩斜面上では、南西から北東のほぼ同一方位を示す29号～31号、平坦面上では南北行の33号・36号、南東から北西のほぼ同一方位を示す32号・34号などの区別がみられた。これより西では、浅間B軽石は含有されてはいるが、純層では検出されていない。

＜Ⅵ区＞ Ⅵ区基盤層は、Ⅴ区からの平坦面を継続し、遺構は、溝（38号～48号）、土坑（13号・14号）、ピット群（E - 77・87・88）が検出されている。ピット群は、いずれも小規模で、溝に付随する位置に配されている。検出された溝の内東端の38号溝は、構造・覆土の共通性から、Ⅴ区に位置する36号溝との関連性が強い。また、やはりⅤ区・最西端に位置する37号溝とは、方位・覆土の共通性から、これも関連性が強いといえるであろう。41号溝は、底面が2条に分離し、構造・方位・覆土ともに、Ⅲ区に位置する8号溝と共通し、強い関連性を示している。この41号溝底面からは、馬下顎が出土し、水辺における水乞祭祀の強い可能性を示している。40号・43号・45号～48号溝は、41号溝と方向性をほぼ一致させている。41号溝とまったく方向性を違えるのは、42号・44号溝である。

＜Ⅶ区＞ Ⅶ区基盤層は、Ⅵ区から継続した平坦面が、E - 91ポイントとE - 94ポイントの間にさらに40cmほど高くなり、そのまま平坦面を成すが僅かずつ高まり、西端・E - 106ポイント付近では10cmほど高くなり、最高位となる。遺構は、住居跡（13号～16号）、竪穴（5号）、溝（49号～51号）、土坑（15号）、ピット群（E - 94）が検出されている。50号溝は規模の大きな溝で、復土の大半が砂層であり、なおかつ強く酸化した部分が多くみられた。同じ様相を示す溝は、Ⅵ区・42号溝である。両溝は、方位もほぼ直交するものであり、強い関連性を示している。この50号溝に切断され規模等が不明であるため竪穴とした5号竪穴は、強固な床面をもち、住居跡であった可能性が高い。もし住居跡であったとすると、16号住居跡と共に、本区最高位の位置に、古墳時代前期の住居跡が集中することとなる。同様に、最高位には平安時代の住居跡（13号～15号）も集中するのである。

＜Ⅷ区＞ Ⅷ区基盤層は、Ⅶ区からの高位平坦面を継続しているが、E - 113ポイント付近から下がり、西端・E - 117ポイント付近では10cmほど低くなる。遺構は、溝（52号～56号）、土坑（16号）、ピット群（E - 108・109）が検出されている。高位平坦面から検出された2カ所のピット群は、それぞれ列を成し、掘立列となる可能性が高い。また、高位平坦面の端には、溝（52号～54号）が位置している。

このように、西側最高位面（Ⅷ・Ⅶ区）に古墳時代前期の住居跡、平安時代の住居・掘立列が位置し、東西の傾斜面には溝が主体的に配されていた。谷部（Ⅶ・Ⅵ・Ⅴ・Ⅳ区）には、各種の溝が配され、再び高位となったⅢ・Ⅱ区では、奈良時代末から平安時代の住居跡・竪穴が位置している。そして、最も低位のⅠ区では、平安時代の畠が存在していたのである。こうした地形と遺構の配置は、過去の北島遺跡の第1・第5・第2・第8・第20各地点調査の成果を発展的に裏付けることができたと思われる。

写 真 图 版



作業風景



作業風景



I 区全景

図版 2



Ⅱ区全景（東半）



Ⅱ区全景（西半）



Ⅲ区全景



Ⅵ区全景



Ⅶ区全景（東半）



Ⅶ区全景（西半）

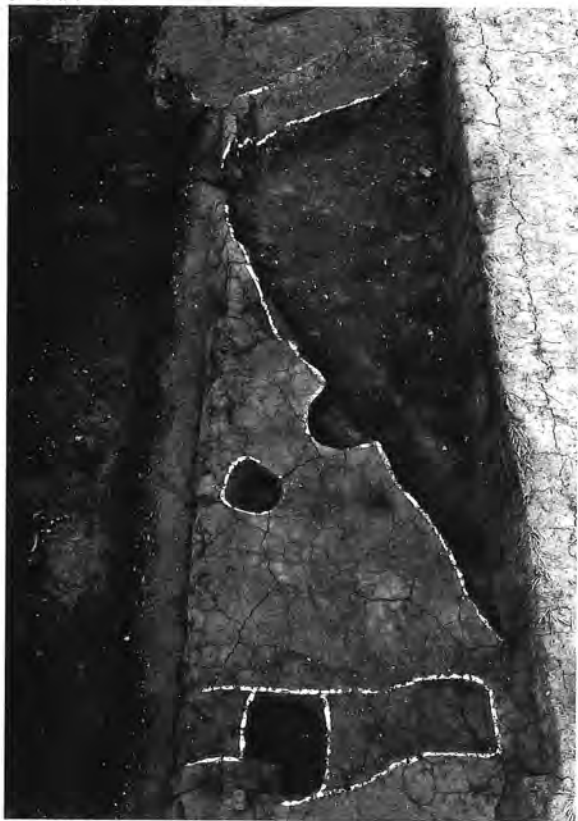


Ⅷ区全景



Ⅷ区全景

図版 4



1号住居跡



1号住居跡遺物出土状況①



1号住居跡遺物出土状況②



2号住居跡



2号住居跡遺物出土状況



3号住居跡

图版 6

3 号住居跡遺物出土状況



4 号住居跡



5 号住居跡





6号住居跡



6号住居跡



6号住居跡貼り床

図版 8



6号住居跡遺物出土状況



6号・7号住居跡



7号住居跡



7号住居跡遺物出土状況①



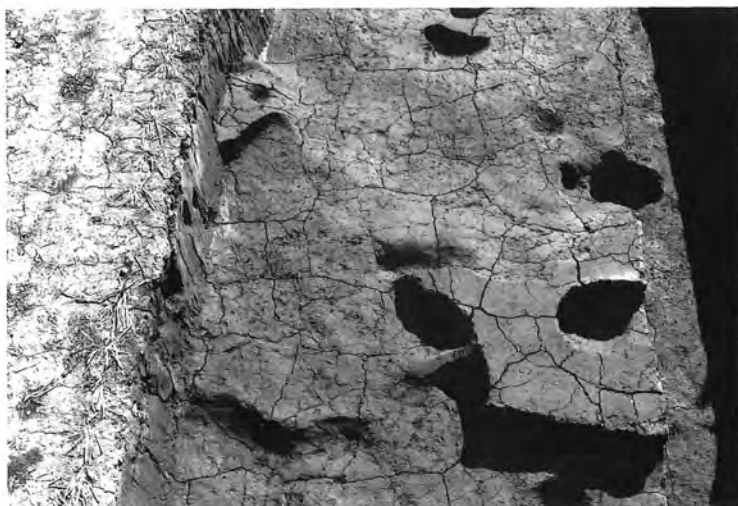
7号住居跡遺物出土状況②



8号住居跡

图版 10

9号住居跡



10号住居跡



9号・10号住居跡遺物出土状況





11号住居跡



11号住居跡遺物出土状況①



11号住居跡遺物出土状況②

図版 12

11号住居跡遺物状況③



11号・12号住居跡遺物出土状況



12号住居跡



12号住居跡遺物出土状況



13号住居跡



13号住居跡遺物出土状況



13号住居跡カマド①

図版 14



13号住居跡カマド②



13号・14号・15号・16号住居跡



14号・15号住居跡遺物出土状況①



14号・15号住居跡遺物出土状況②



14号・15号住居跡カマド遺物出土状況



14号・15号住居跡遺物出土状況③

図版 16



14号・15号住居跡遺物出土状況④



16号住居跡



16号住居跡遺物出土状況①



16号住居跡遺物出土状況②



1号竪穴



2号竪穴

図版 18



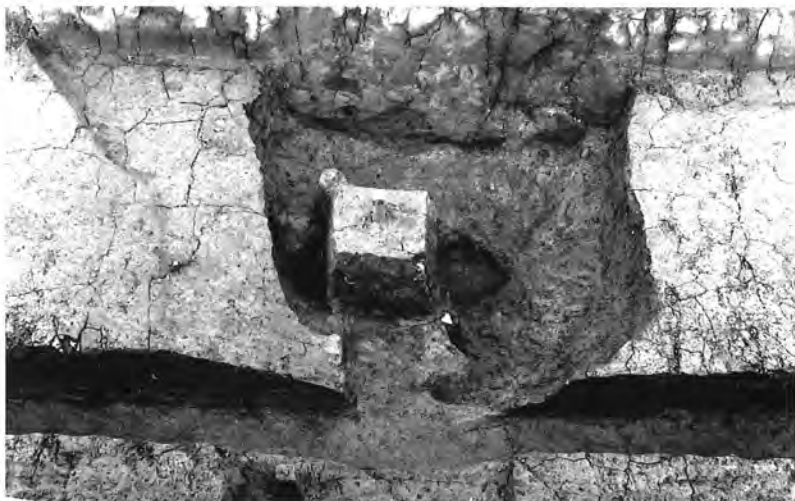
3号竪穴



4号竪穴遺物出土状況



4号竪穴



1号土坑



6号土坑



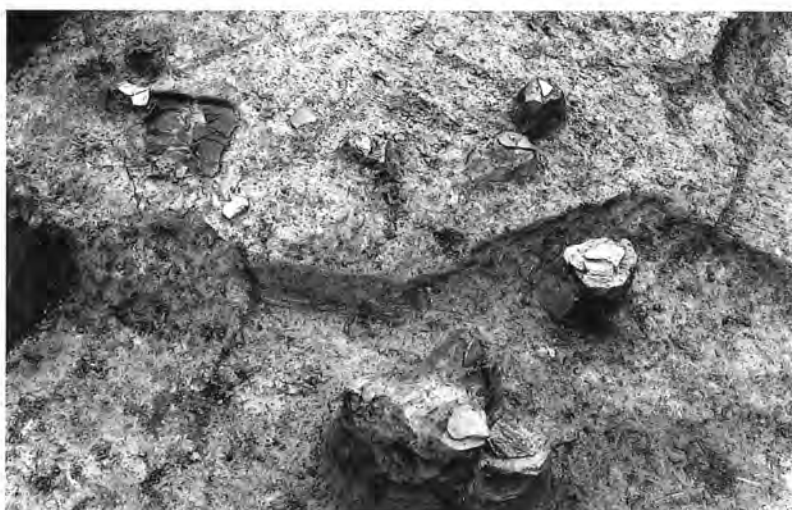
7号土坑

图版 20

8 号土坑



8 号土坑遺物出土狀況



11 号土坑





12 号土坑



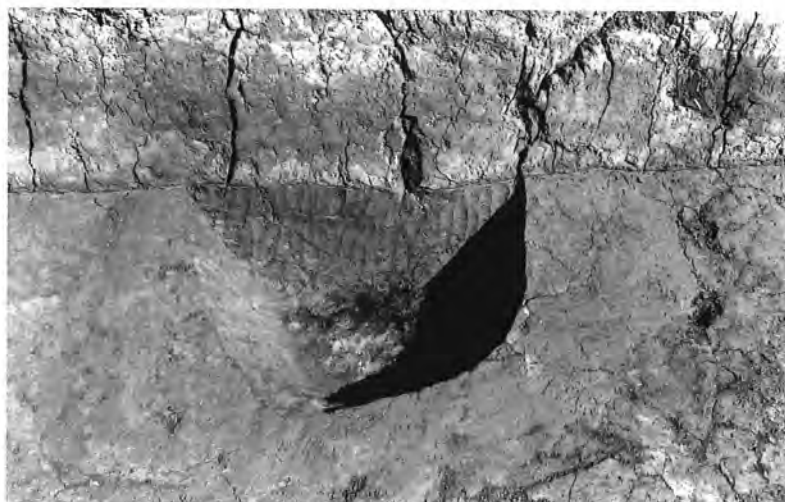
13 号土坑



14 号土坑

図版 22

15号土坑



16号土坑



E-35ピット群





E-59ピット群



E-108ピット群



E-108ピット群遺物出土状況

図版 24

1号・2号溝



4号溝



5号溝





6号溝



7号溝



8号溝

図版 26



17号溝



18号~26号溝



27号・28号溝



29号沟



30号沟



31号沟

図版 28



31号溝礫出土状況



32号～37号溝



35号溝



36号沟



38号沟



40号沟

図版 30

41 号溝



41 号溝馬歯出土状況



41 号～48 号溝





42号沟



43号・44号沟



45号・46号沟

図版 32



50号溝遺物出土状況①



50号溝遺物出土状況②



50号・51号溝



1号井戸跡



畠跡①



畠跡②

图版 34



畠跡③



畠跡④



畠跡⑤



1 号住居跡—1



3 号住居跡—1



1 号住居跡—2



4 号住居跡—1



1 号住居跡—4



6 号住居跡—1



1 号住居跡—6



6 号住居跡—2

图版 36



7号住居跡-2



7号住居跡-8



7号住居跡-10



10号住居跡-1



13号住居跡-1



11号住居跡-2



13号住居跡-3



14号住居跡-2



13住居跡-4



15号住居跡-1



13住居跡-5



15号住居跡-2



14住居跡-1



4号竖穴-6

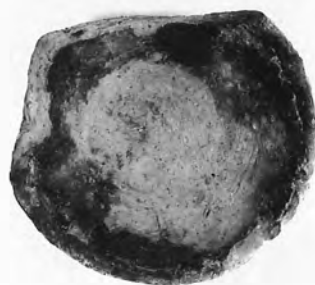
図版 38



4 豎穴—10



6 号溝—1



遺構外遺物—8



6 号溝—3



50号溝—3



1号住居跡—15



3号住居跡—9



2号住居跡—1



7号住居跡—14



3号住居跡—8



8号住居跡—1

図版 40



16 号住居跡-1



同拡大



16 号住居跡-2



16 号住居跡-3



8号土坑-1



E-108ピット群No.1ピット-2



8号土坑-2



50号溝-4



4号竪穴-11



11号住居跡-4

図版 42



3号住居跡—10



遺構外遺物—5



7号住居跡—16



2号住居跡—2. 3. 4. 5



15号住居跡—4



41号溝—1

報 告 書 抄 録

ふりがな	きたじまいせき									
書 名	北島遺跡									
副 書 名	平成14年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書									
巻 次	—									
シリーズ名	—									
シリーズ番号	—									
編 著 者 名	寺社下 博									
編 集 機 関	埼玉県熊谷市教育委員会									
所 在 地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47- 1 TEL048-524-1111									
発行年月日	西暦2002（平成14）年 9 月30日									
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	遺跡番号	(°′″)	(°′″)		(㎡)			
きたじまいせき 北島遺跡	くまがやし おおあさかみかわかみ 熊谷市大字上川上 8 3 3 他	11202	58	36° 09′ 31″	139° 24′ 37″	20020107 ～ 20020329	1, 175	道路改良 工事		
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
北島遺跡	集落跡	古墳時代前期	住居跡 竪穴	1 軒 1 基	土師器		広大な北島遺跡の北側 縁辺部の土地利用区分 が判明してきた。			
		奈良・平安 時代	住居跡 竪穴 溝跡 土坑 ピット 畠跡	15軒 4 基 52条 13基 10群 3 群	土師器 須恵器 土錘 馬下顎					
			近世以降	井戸跡 溝跡 土坑	1 基 4 条 3 基					
				時期不明	不明遺構	1 基				

平成 14 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

北 島 遺 跡

平成 14 年 9 月 30 日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／関印刷株式会社



さくらのまち“熊谷”